



ミリアム・シルバーバーグ

(1951－2008)

表紙の集合写真

Women in "Dark Times" conference  
(1988年8月 於ロックフェラー財団ベラージオ・センター)  
の出席者たち (三宅義子提供)

後列右から四人目がミリアム・シルバーバーグ、右隣が三宅義子  
前列中央がドイツ研究者のクローディア・ケーンツ、  
左後ろ隣には日本研究者のキャロル・グラックの姿も見える

表紙デザイン

岩見利子

## ミリアム・シルバーバーグ追悼記念号の刊行にあたって

アジア現代女性史研究会代表 藤目ゆき

私たちのかけがえのない友人、ミリアム・シルバーバーグは長い療養生活の後、2008年3月16日に他界した。私たちは彼女への友情と感謝をこめて『アジア現代女性史』第5号をミリアム・シルバーバーグ追悼記念号として刊行する。

私たちは2004年にアジア現代女性史研究会(CAWA)を設立して「軍事主義とジェンダー」の共同研究を始め、2005年に年報『アジア現代女性史』を創刊した。

アジア現代女性史研究会誕生のきっかけは、2003年5月にミリアムがUCLAで企画した「日本のフェミニストたちが語る」シンポジウムであった。スピーカーとして大越愛子、北原恵、藤目ゆきが招かれ、大越は有事体制が築かれつつある日本の状況を、北原は天皇一家の表象の変遷を、藤目は日米軍事同盟と売春禁止主義の結びつきを主題に話をした。

ミリアムとは2000年12月に東京で開かれた日本軍性奴隷制度を裁く女性国際戦犯法廷以来約2年半ぶりの再会だったが、その間に米国では9・11事件が発生し、アフガニスタンとイラクに対する戦争が始まっていた。報復戦争を正義と称し、しかも「女性解放のための戦争」とまで強弁して正当化し、軍事主義とレイシズムを強める米国のありように私たちは共通して憤っていたが、ミリアムはこうした展開を心から憂慮し、とくに愛国法の制定に強い危機感を抱いていた。

ロスアンゼルス滞在中、ミリアムは三人を多くのUCLAの同僚たち、学生たちに引き合わせてくれた。私たちはミリアムの家でおいしいものをどっさり食べ、かつ飲み、夜更けまで話し込み、このうえもなく楽しい時間を過ごした。ミリアムのすばらしい知性と才気、そして彼女に惹かれて集まる人々との出会いは、学問とフェミニズムの力に対する暗鬱な懷疑を吹き飛ばしてしまう。共同研究への新しい希望が芽生えたのはここからだったと思う。

「軍事主義とジェンダー」という研究課題が科研に採用された時、その科研費で最初に出かけたのは2004年5月のミリアムとの長野県旅行であった。病状は前年より厳しくなっていたが、それでもミリアムは変わらずチャレンジングで、松代大本営跡などの探訪、学問的な議論から研究活動のプランニング、家族の話題、最近のゴシップ情報の交換まで、いつもながらユーモアと知的好奇心、新しい学術活動への意欲にあふれるミリアムは研究会の出発に大きなインスピレーションを与えてくれた。

研究会の年報『アジア現代女性史』を日英両版で出すという無謀なプランが実現できたのは、ミリアムのおかげとしか言いようがない。彼女は創刊号に「トランスナショナル物語ーポスト・コロニアルの亡霊としてのヨン様、そしてオパタリアンの逆襲(ロスアンゼルス便り)」を寄せてくれた。そして、ミリアムが英語版のための翻訳者を募ってくれたのである。ミリアムのもとで学んだグレッグ、水野宏美、たけうちみちこ、中村真之介たちの惜しみない協力によってこそ、英語版は刊行にこぎつけることができた。

研究会の英語名「Association for the Study of Contemporary Asian Women's history

and Gender」の名付け親もミリアムだった。英語名に「女性史」だけでなく「ジェンダー」が入っているのも、略称「CAWA (カワ)」の命名も彼女の提案に由来している。「略称は、CAWA か AWA ね。音だと『川』か『泡』になるわね。AWA なら AHA (米国歴史協会 American Historical Association) という団体が他にあるし、CAWA のほうがいいと思う。「川」は、「泡」より響きがいいわ。」あたたかだった彼女の声は今も聞こえてくるようだ。

ミリアムが健康をとりもどし、創刊号に続けて毎号に「ロスアンゼルス便り」を連載してほしいという私たちの願いはかなわなかった。ミリアムの病状はますます悪化して、2006 年になると UCLA から退職する決心をしたと知らされた。同年 12 月に彼女の退職記念シンポジウムが開催されている。2008 年 2 月に延命装置の使用が中止されるとの知らせがあり、3 月に訃報が伝えられた。2008 年 10 月 3 日には UCLA で追悼会が執り行われた。

日本在住の私たちは、遠く太平洋を隔てたロスアンゼルスで闘病しているミリアムを思い、胸を痛めながら、ほとんど祈ることだけしかできないでいた。玉野井麻利子やたけうちみちこ、安武留美ら、ミリアムの同僚・友人・教え子たちが折りにふれてミリアムの様子を私たちに知らせてくれた。ミリアムの病状が悪化する日々にミリアムの身近にいて彼女を精神的にも生活の面でも支えていた彼女たちのおかげで、私たちもまた、ミリアムの身边に思いを馳せ、絆を心に刻むことができた。

『アジア現代女性史』第 5 号をミリアム・シルバーバーグ追悼記念号として刊行することをはじめに提案したのは、米国留学時代にミリアムと親しかった三宅義子であった。玉野井麻利子の協力によって編集プランができた。

ジェームズ・フジイによる追悼の辞、フレッド・ノートヘルファーによる追悼の詩をはじめ、UCLA のミリアムの同僚たちや親友たちが 2006 年のシンポジウムと 2008 年の追悼会で発表された追悼文や記念論文を寄稿した。追悼式に出席した日本在住のバーバラ佐藤と中川成美、そしてエリサ・フェイスンや寺澤由紀、クリスティン・デネヒー、チョン・ヘンジャ、ジンキュン・リーら、今ではもう教職に就いている UCLA の元「学生」たちもまた思い出や論文を寄せた。

宋連玉と私の論文は、二人が同席したあるシンポジウムでの報告を元としている。ミリアムが興味を抱いていた学術的なプランの一つに、ミリアム・宋連玉・藤目とのセッションもあった。実現できなくなってしまった彼女の多くのプランを思いつつ、この二遍を収録させていただいた。

本号に寄稿をお願いしたいと思いながら、諸般の事情で連絡することができなかった方たちも少なくない。ミリアムをとりまいた縁はそれだけ広がりのあるものだったからである。

ミリアム、この号を貴方に、そして、貴方の友人たちに捧げます。貴方に会えたことを感謝し、貴方が残した著作や人のつながりの中で私たちがまた貴方に再会し続けることができることを信じ、この号がそのよすがの一つになることを希っています。



目次

ミリアム・シルバーバーグ追悼記念号の刊行にあたって	藤目ゆき……………2
<追悼 ミリアム・シルバーバーグ>	
追悼の言葉	ジェームズ・フジイ……………8
ミリアム・シルバーバーグに捧げる詩	フレッド・ノートヘルファー……………10
ミリアム・シルバーバーグの業績	……………11
思い出	
歴史家ミリアム・シルバーバーグ 一出会いと「再会」	三宅義子……………16
ミリアム、ありがとう！	玉野井麻利子……………20
Miriam, We Love You	バーバラ佐藤……………21
ミリアム：歴史家にして教師	クリスティン・デネヒー……………24
ミリアム先生の思い出	エリサ・フェイソン……………25
普遍性の一断片—友人ミリアムを偲ぶ未完成原稿	グレゴリー・ヴァンダービルト……………26
シルバーバーグ先生との思い出	たけうちみちこ……………29
思い出	安武留美……………32
シルバーバーグ先生の思い出	水野宏美……………34
ミリアム・シルバーバーグとアメリカ、韓国に於ける朝鮮学研究	ジンキュン・リー……………35
感情労働者としての教授：ミリアム・シルバーバーグの場合	Chung, Haeng-ja……………36
ミリアム・シルバーバーグ氏を偲んで	中川成美……………39
ミリアム・シルバーバーグの思い出	寺澤由紀……………42
ミリアムさんとやよりさん	大越愛子……………44
<ミリアム・シルバーバーグ遺稿>	
戦争責任再訪：日本におけるのアウシュヴィッツ	ミリアム・シルバーバーグ……………48
<追悼記念号に寄せる諸論文>	
ポストコロニアル日本の在日朝鮮人による労働「運動」—早船ちよ『キューポラのある街』及び 梁石日『夜を賭けて』における映画と文芸の表象	クリスティン・デネヒー……………68
戦時下日本のジェンダーと朝鮮人の労働	エリサ・フェイソン……………76
「欠損・切断された男性身体—古沢岩美の敗戦体験と主体」	北原 恵……………88
朝鮮戦争時期の在日朝鮮人女性の闘い	宋連玉……………96
第二次世界大戦後日本の「女性解放」について	
—繊維労働者の経験から考える	藤目ゆき……………108

著者プロフィール

アジア現代女性史  
Contemporary Women's History in Asia

アジア現代女性史研究会  
CAWA (Association for the Study of Contemporary Asian Women's history and Gender)

---

追悼ミリアム・シルバーバーグ

---

追悼 ミリアム・シルバーバーグ

## 追悼の言葉

ミリアム・ロム・シルバーバーグは長い療養生活の後、2008年3月16日日曜日の未明に他界した。

ミリアムは東京で成長期を過ごし、東京の聖心インターナショナルスクールに通った。その後米国に帰国し、ジョージタウン大学で修士号、シカゴ大学で博士号(1984年)を取得し、ジョン・ウィテック、ハリー・ハルトウニアン、テツオ・ナジタ、藤田省三、藤目ゆきのような歴史学者やピーター・ラビノウイツ、マサオ・ミヨシ、ビル・シブリー、前田愛のような文学界の人々と交友関係を築いた。

ミリアムは太平洋をはさむ両岸で、全生涯の歩みを通して、無数の同僚たち、学生たち、社会活動家たちに深い影響を与えた。

彼女の著作“Changing Song: the Marxist Manifestos of Nakano Shigeharu”はジョン・フェアバンク東アジア歴史学賞を受賞し、1998年に日本語に翻訳され(邦題『中野重治とモダン・マルクス主義』)、文学と歴史学が専制的な専門分野の本拠地から解き放たれたときに発揮する桁外れの力を実証した。

同書は依然として、いかに社会批評として文学を読むべきかを示す比類ない模範である。

ミリアムは同時に、最も自覚的に理論的な近代日本史家の一人であった。

彼女は中野重治と佐多稲子のような反抗する人物たちの努力を肯定する際であれ、消費者や批評家や労働者や知識人としての女性たちの形成を探索する際であれ、主観性の探索に固く結ばれた仕事をし続けた。

日本の「モダン・ガール」に関する画期的な著作“The Modern Girl as Millitant,” “The Café Waitress Sang the Blues”は国際的に有名である。

ミリアムの仕事の射程は広く、マルクス主義文学、大戦間期の大衆文化、都市社会の勃興、日本の植民地遭遇、現代のポピュラーカルチャーに及んだ。

近代性と帝国主義の結びつきに対するミリアムの変わらぬ関心が、彼女の卓越したキャリアの初めと終りに表出している。彼女がジョージタウン大学で研究を開始

したのは、1923年の関東大震災直後の東京と横浜における朝鮮人虐殺に関する論文によってであった。そしてUCLAにおけるキャリアの最後には、「人種と文化」および「帝国についての日本のイデオロギー」のようなコースにおいて植民地遭遇を研究していた。

ミリアムの学者としての仕事には知的ダイナミズムが非常に明白であった。彼女はUCLA女性学センター所長として在任中、センターにそれをもたらした。ミリアムの世話でさまざまなワークショップやイベントが催された。そのなかには、元朝日新聞記者で日本軍性奴隷制度を裁く女性国際戦犯法廷の代表であった松井やよりのトークもあれば、ミリアム自身のパーキンソン病との対決を学問的・人間的障害学へと折り込んだ「身体障害と直面するフェミニズム」と題する、通念を根底から覆すような学会もあった。

国際的な名声を持つ一学者としておそらく非常に希有だったのは、ミリアムが自分の学生に高い優先順位を与えたことであった。

特にパーキンソン病のために日本戦間期の大衆文化に関する名著“*Erotic Grotesque Nonsense*” (U. C. Press, 2007)の完成はもちろんのこと、座って講義を行うことも困難になっていた最後の数年間はそうだった。ミリアムはもはや誰かの補助なしに書くことができなくなったときさえ、学生たちのために推薦や助言や案内のために書いていた。

ミリアムの日々が無慈悲な監禁状態の連続になったとき、真っ先に学生たちが、そして同僚たちや友人たちが、大西洋や太平洋を越えて、また全国の大小の大学町からミリアムを見舞いに訪ねた。訪れた人々は時には集団で、またしばしば一人だけで、言葉を発するどころか、瞬きさえ出来ないミリアムとコミュニケーションする方法を見つけ出したものだ。それは、ミリアムが教え導いたり、一緒に食事をしたり笑ったり彼女の抑えがたい才気を分かち合った人々がみな彼女から並はずれた影響を受けたことの静粛で感動的な証左だった。

ジェームズ・フジイ

ミリアム・シルバーバーグに捧げる詩

フレッド・ノートヘルファー

ミリアム、私達は今日、あなたの一生を祝福するためにここにつどい、  
あなたが私達に与えてくれたものに対し  
心から感謝の意を捧げます。  
あなたは、まさに思考の宝箱でした。  
凡人には測り知れない近代日本の「エロ・グロ・ナンセンス」を理解しようと、飛び込んだあなた

きらきらと輝くあなたの眼を通して  
私達はそれを理解することができました。

「内」と「外」は同じではありません。

「歌」は常に「替え歌」です。

あなたはこのことをよく理解していました。

マルクス主義者の作家詩人であった中野重治に始まり

カフェの女給とモガとお酒をくみかわし

資生堂のくり広げたお姫様文化を堪能し

彼女たちと共に せまりくるファシズムに抵抗したミリアム

あなたはそこでひかり輝いていましたね。

「愛」と「革命」を追い求め、

あなたはついに「日本」を脱出し、

民族と文化が、まるでハゲタカのように飛び回る

日本帝国の植民地に躍り出ました。

そして私達を近代の新たな考えに導いてくれました。

あなたは、まるで「モガ」が「ヨガ」をやるかのような離れ業を見せてくれたのです。

でもあなたは決して日本を離れることはなかった。

日本とその社会の人々に対する造詣と愛情を常に持ち続けた。

日本研究センター、歴史学部、そしてカリフォルニア大学ロス・アンジェルス校に属する

私達一同は何と多くの恩恵をあなたから受けていることでしょう。

ありがとう ミリアム そしてさようなら。

私達はあなたが運んでくれた太陽のさんさんとふりそそぐ 雲ひとつない青空の日々と、  
あなたのいつも笑っている眼を語り続けるでしょう。

あなたの今いる世界も光輝くように。

でももし雨が降るようなことがあれば

あなたが歌ってくれた「歌」を見い出してください。

私達にできることはあなたの歌に合わせて

演奏することなのです。

(この詩は2008年10月3日のミリアム・シルバーバーグ教授の追悼会の際に玉野井麻利子が朗読した。日本語訳は玉野井麻利子)

## ミリアム・シルバーバーグの履歴と業績

### 学歴

- 1968年9月～69年3月 聖心インターナショナルスクール・早稲田大学法学部  
1969年9月～71年2月 ラドクリフ・カレッジ(極東言語文学)  
1977年8月 アメリカン大学国際関係学部で学士号取得(国際関係・東アジア学)  
1982年11月 ジョージタウン大学で修士号取得(東アジア史・ヨーロッパ近代思想史)  
1984年8月 シカゴ大学で博士号取得(日本近代史・中国近代史・ヨーロッパ思想史)

### 職歴

- 1985年8月～87年7月 コーネル大学 メロン・フェロー(アジア研究 教育/リサーチ)  
1987年9月～89年6月 ハミルトン・カレッジ 助教(歴史学)  
1989年7月 カリフォルニア大学ロスアンゼルス校に歴史学の助教として着任、1992年3月より准教授、  
2000年より教授。2007年に退職するまで三年にわたってUCLA女性学センター所長。  
その間、1994年8月～9月カリフォルニア大学デービス校 夏期客員教授、2004年5～6月成蹊大学アジ  
ア太平洋研究センター客員教授、同12月立命館大学客員教授

### フェロースhip・助成金など

- ジョン・シモン・グッゲンハイム基金助成金(1994～1995)  
NEH for 1993-1994  
フェロー スタンフォード・ヒューマニティーズ・センター 1993～1994

### 招待講演

- "The Modern Girl Reframed: From Taisho Chic to Showa Kitsch"(パークレイ美術館 2005年11月)  
"The Nippon Convenience Store and Me"(論楽舎、京都、2004年4月)  
"Intimacy, Diaspora, and Riddles of War"(立命館大学、京都、2004年4月)  
"From Erotic Grotesque Nonsense to Intimacy"(エール大学、2004年4月)  
"Erotic Grotesque Nonsense and Angry Little Girls"(ウースターカレッジ 2004年3月)  
"Japanese Mass Culture on the Eve of War"(スタンフォード大学、2002年5月)  
"Japanese Modern Montage"(シドニー大学パワー・インスティテュート、オーストラリア、1998年7月)  
"Memoirs of a Non-Geisha," ロスアンゼルス美術館・カリフォルニア美術協会会議・ロスアンゼルス美術  
館『芸術と理論:極東と日本の間で』(スピーカー・コンサルタント)、1998年6月  
"Erotic Grotesque Nonsense," カリフォルニア大学アーバン校のシンポジウム『エロスを可視化する:アジアの  
映画、アジア系米国人のビデオ、異文化の流露』  
"Loving, Working and Going to the Movies: Japan from the Roaring '30s to the Post-Bubble 90s"

日経ブルーインズ後援のパブリック・トーク、UCLA、1993年11月7日

"Decolonizing the Japanese History of Modernity"(ハーバード大学ライシャワー研究所、1992年11月20日)

"Was the Ero-Gro Nonsense: Japanese Modern Traditions on the Eve of War"(プリンストン大学、1987年2月)

報告、会議、ワークショップ

Ongoing Workshop Participant: "Work and gender in Modern Japan"(2005- )

(To result in conference volume)

Workshop Project: "It's Hard to be Man in Kodo Seicho Japan:Tora-San's Geographies of Desire and Circuits of Labor"

Organizer: "UCLA Center for Japanese Studies 1 Day Brainstorming Workshop :

"Colonial Sensibility: the Case of Japan"(cancelled)

Co-organizer and chair: "Japanese Colonial Sensibility: Body, Style, Korea"(AAS 04-09)

Presentation: "Passing, Colonial Kitsch, and Foreign Natives: Keywords for New Research"

Organizer: "The Politics of Resident Koreans in Japan: History, Media, gender"(04/05)

WORKSHOP Presentation: Auschwitz in Japan

Conference Organizer: Feminism Confront Disability(UCLA 4/02)

Organizer and Presenter: AAS Panel on Postwar Japanese Culture as Resistance:

presentation: "Generation before Nation"(3/04)

Organizer, Workshop: "Intimacy Across Gender and Culture"(sponsored by UCLA International Institute, etc.)

Commentator: Association of Japanese Literature Scholars(5/03)

Panel: Japanese Thought in the 1930s

"Race, Class, and the Gendering of Nationalism in Prewar Japan," Panel, The Berkshire Conference on the History of Women,(Chair),6/99

"The Modern Girl Goes to War" Conference on "The Modern, Modernity, and Modernism"(Museum of new South Wales and University of Sydney Australia)(7/98)

"Colonial Collaborations: The Japanese Case," Panel Organizer and Presenter at 1 st International Convention of Asia Scholars, Noordwijkerhout, The Netherlands, June 25-28,1998



Post-Colonial Classics of Korean Cinema Confer, UC Irvine(Discussant)(4/98)

"Japanese Culture Studies and Popular Music"(Assoc.For Asian Studies, Washington, D.C.),Discussant(3/98)

Discussant, American Anthropological Association Panel on Japanese Social Change, Nationalism and National Identity(II/97)

Conference: "Colonialism and Modernity in East Asia"

University of California Santa Cruz Presentation: "Japanese Modern Montage"(IV96)

Member, UC Irvine Humanities Research Institute Member.

Colonialism in east Asia(Spring 1995)

"After Orientalism" Conference on East Asian in Global Culture Criticism, University of California, panel on Colonialism Berkeley(4/92)Association for Asian Studies Conference Panel on Gender and Sexuality(3/92)

"Advertising Every Body: Japan in the Modern Years," "Choreographing History" Conference at UC Riverside(2/92)

Project Associate on bi-national project funded by Toyota Foundation, Social Science Research Council: "Female and Male Role Sharing in Japan: Historical and Contemporary Constructions of Gender"(Conferences in Osaka, Ann Arbor,8/91,12/91,8/93)Symposium on War Prints from the Sino-Japanese and Russo-Japanese Wars" in conjunction with the Grunewald Foundation, Whyte Gallery, UCLA, November, 1991

October1991 "Soviet Popular Culture Under Stalinism" sponsored by the Southern California Research Seminar on the Soviet Union with support by the Center for Russian and East European Studies and History Departments UCLA, UCSD Commentator(October, 1991)

International Workshop on "The Construction of Gender and Sexuality in East and Southeast Asia" sponsored by the Center for Pacific Rim Studies, UCLA Discussant(December 1990)

## 学会

『アジア現代女性史』("Contemporary Women's History in Asia") 国際編集委員

"Positions" 編集委員

"Japanese Studies"(ウエスタン・オーストラリア大学刊行) 編集顧問

アジア研究協会北西アジア部会、1995年、96年、97年に三部学会シリーズ計画 Competing Modernities in Twentieth Century Japan への正式代表に選出

1992年夏期、AHA 太平洋岸支部の立案委員会

カリフォルニア大学出版局、シカゴ大学出版局、コーネル大学出版局、デューク大学出版局、イリノイ大学出版局、“サインズ”、“フェミニスト・スタディーズ”などにおいて近代日本文化、思想史、中国文化史、女性史、人類学、フェミニスト理論の分野の査読

助成金審査委員

ジョン・シモン・グッゲンハイム記念基金

アジア研究協会北西アジア部会

社会科学調査委員会学位ワークショップ・パーティシペーション

UCLA日本研究日本研究学部生・教授会調査助成金

出版物

**Erotic Grotesque Nonsense: Japanese Mass Culture in the '20s and '30s** (University of California Press, 2007).

『中野重治とモダン・マルクス主義』(林淑美;林淑姫;佐復秀樹訳)平凡社、1998年

**Changing Song: The Marxist Manifestos of Nakano Shigeharu**, Princeton: Princeton University Press, 1990. Awarded John King Fairbank Award, 1990.

“Afterword: And Some Not So Bad,” in Jan Bardsley and Laura Miller, eds. *Bad Girls of Japan*. (Palgrave Press, 2005).

“TRANSNATIONAL WIVES’ TALES: Yonsama as Postcolonial Ghost and the Revenge of the Obatarians (letter from Los Angeles)” in *Contemporary Women’s History in Asia* (Inaugural Issue), June 2005:pp.166-171.

「トランスナショナル物語ーポスト・コロニアルの亡霊としてのオン様、そしてオバタリアンの逆襲(ロスアンゼルス便り)」『アジア現代女性史』創刊号、2005年6月、106-110頁

“War Responsibility Revisited: Auschwitz in Japan” in *Review of Asian and Pacific Studies*(Japanese language version)ed., Nakagawa Shigemi. No.29(2005):pp43-46

「エロ・グロ・ナンセンスの時代ー日本のモダン・タイムス」小森陽一編『岩波講座 近代日本の文化史』7岩波書店、2002年、61-109頁

「日本 モダン モンタージューパロディーのアイロニー」立命館大学国際言語文化研究所編『立命館言語文化研究』11巻1号、1999年6月、13-22頁(コメントは55-56頁)

“The Cafe Waitress Serving Modern Japan,” in Stephen Vlastos, ed. *Mirror of Modernity: Invented Traditions of Modern Japan*(University of California Press, 1998.)

**"Going to the Movies with Nakano Shigeharu: Montage by a Woman Westerner"**(1st issue of Nakano Shigeharu-published in English and Japanese in the journal, 1997)

「女西洋人からの断片のモンタージュ—中野重治と—しよに活動写真に行く」中野重治の会編集発行『中野重治研究』第一輯(影書房発売)、1997年、5-14頁。

「日本の女給はブルースを歌った」藤田晴子監修『ジェンダーの日本史』東京大学出版会、1995年

**"Advertising Every Body: Images from the Japanese Modern Years"** in Susan Foster, Ed. *Choreographing History* (Indiana University Press, 1995).

**"Osmanthus"** (Translation of short story by Ozaki Midori). *Manoa*, vol. 3, No.2, Fall 1991: 187-190. [Broadcast over KCRW as part of Japanese short story series Summer 1994

**"Constructing a New Cultural History of Modern Japan"** *Boundary 2: An International Journal of Literature and Culture*, Duke University Press. Special Issue on "Japan in the World." Vol. 18 No. 3. Fall 1991:61-89; in Masao Miyoshi and H.D. Harootunian, Ed., *Japan in the World*. Duke: Duke University Press, 1993.

**"Remembering Pearl Harbor, Forgetting Charlie Chaplin, and the Case of the Disappearing Western Woman."** Solicited for first issue of *Positions* (new journal of East Asian history and culture). *Positions: First issue*, special issue on "Colonial Modernity" Vol. 1 No. 1, Spring 1993, pp. 24-76.

**"Constructing the Japanese Ethnography of Modernity."** *Journal of Asian Studies*. 51 No.1 (February 1992):30-54.

**"The Modern Girl as Militant,"** In Gail Bernstein, Ed. *Recreating Japanese Women, 1600-1945*. Berkeley, University of California Press, 1991.

**"Marxism Addresses the Modern: Nakano Shigeharu's Reproduction of Taisho Culture."** In J. Thomas Rimer, Ed. *Culture and Identity: Japanese Intellectuals during the Interwar Years*. Princeton: Princeton University Press, 1990, pp. 133-153.

**"After the Grand Tour: Modern Girls, New Women, and Colonial Maidens"** in the Modern Girl Collective, ed. *Modern Girls around the World*, Duke University Press, 2009.

# 思い出



## 歴史家ミリアム・シルババーグ - 出会いと「再会」

三宅義子

私が、ミリアム・シルババーグと初めて会ったのは1982年頃だったと思う。紹介してくれたのは、アメリカ人留学生たちの懇親会の席に加わったときに知り合った、シカゴ大学大学院で日本近代史を専攻するジャッキーという名の女性だった。同じ院生仲間で中野重治について博士論文を書くためにリサーチをしているミリアム・シルババーグはきっとあなたと話が合うから、と彼女は会うことを勧めた。後日、本人から電話がかかり、約束の場に現れたミリアムさんの颯爽とした姿はとても印象的だった。私より八歳ほど若い彼女の全身に活力がみなぎっていた。ここ10年ほどはミリアムさんとは音信不通になり、共通の友人たちから彼女の病状悪化を聞くだけになってしまったが、この時のミリアムさんの姿を思い出すたびに私には信じられない思いだった。

「颯爽」というのは若さゆえの容姿のことだけではない。何よりも印象づけられたのは彼女の鋭い知性だった。中野重治の奥さんの原泉さんとのインタビューや娘さんとの交流、そして大原社会問題研究所の客員研究員だった関係で法政大学の故藤田省三氏を指導教授(メンター) 役にして交わしたディスカッションなどについて話題はつきなかつたが、私が今でも忘れないのは、お互いの自己紹介的話しをしたあとで食事をする段になって彼女が言った次のような言葉だった。「今日ようやくフジタと山田盛太郎の『日本資本主義分析』を読み終えたので、祝杯をあげなきゃ」。「戦前の左翼青年たちは『分析』を理解するために枕にして寝た」という多分藤田氏から聞いたであろう言葉を付け加えるとき、その顔には伝説的な理論書を読破した高揚感がみなぎっていた。この言葉を通じて私は中野重治をマルクス主義の歴史のなかに位置づけようとしているミリアムさんの博士論文の構想の一端を理解したような気がしたものだ。

それは同時に、私自身にマルクス主義、戦前日本の知識人の歴史というものをきちんと考え直す必要性を認識させるうえで十分に刺激的な言葉でもあった。なぜなら、60年代半ば、日本マルクス主義の記念碑的業績とも言える<日本資本主義論争>の「講座派」の流れを汲む先生が多かった大学の経済学部で学んだ学生だったので、私の理解能力は別にして山田盛太郎の『日本資本主義分析』(1934年刊)は一度は目を通したものであったが、高度経済成長をへるなかで大きく変容した日本社会の現実とマルクス主義理論の不協和音は誰の目にも明らかでマルクス主義を過去の遺物として葬り去ろうとする論壇の主流に私自身も流されていたことは確かだからだ。ミリアムさんは、言葉の本来の意味で日本社会の近代化に果

たしたマルクス主義の役割を高く評価し、文化革命家としての中野重治の再評価をしようとしていたのである。日本社会がマルクス主義という過去の思想的遺産に目をそむけようとしているときに逆に欧米の大学でそれを再評価する研究が進んでいるとはなんと皮肉なことか。そのときすでにフェミニスト・スタディーズを勉強したいとアメリカの大学院進学準備をしていた私にとって、この夜のミリアムさんとの語らいはアメリカの大学での勉強に大きな期待をふくらませてくれるものとなった。

私のカリフォルニア大学大学院での勉強は1983年から始まるのだが、博士論文を書き終えて帰国するまでの八年間のあいだにミリアムさんとの親交は深まっていった。近代日本女性史の原点である繊維女工の歴史を階級・ジェンダーの交差点においてとらえ返した論考をミリアムさんは高く評価し、貴重なコメントをくれた。また、先にふれた山田盛太郎の『日本資本主義分析』を日本社会科学のジェンダー視点の欠如を示す例として取り上げた論文を書いたときも、ミリアムさんとのあのときの会話がなかったら、『分析』のことは青春期に通り過ぎた多くの本の一冊として忘却の彼方に追いやったまま思い出せなかったかもしれない★。

帰国してから私は地方に暮らすようになったために彼女の東京滞在中も何度か会う機会を逸したし、さらに、彼女の健康状態の悪化などもあってやがて音信不通になり、友人たちから深刻な病状を聞くだけになってしまった。そして彼女が逝ってしまった今になって私は、ミリアムさんと親しく交わった場面の一コマ、一コマを思い浮かべながら、私の留学生生活を支えたものはミリアムさんの励ましだったことに思い当たるのである。母語ではない言語で大学院生としての一定水準の論文を書いていくこと—これはたんに英語表現上の誤りを直し、文章を磨いてくれたというようなテクニカルな次元の問題ではなく、日本の歴史、女性史のことなど何も知らない人たちに理解してもらおう議論をどのようにつくってゆくかという問題なのだが、彼女の評価が私の努力のパネになったことは確かだ。彼女は中野重治論を *Changing Song* として1990年に上梓するが（邦訳『現代マルクス主義と中野重治』平凡社1998）、私の女工哀史論を「革新的」と「注」をつけて紹介しているのを見つけたときの喜びは今も忘れられない。

私が院生だった期間、ミリアムさんに誘われて、三つの学会・研究会でペーパー発表の機会をもった。ウェレズリー大学で開かれたBerkshire Women's History Conference とイタリアのベラージオで開催されたWomen in "Dark Times" Conference (歴史家クローディア・クーンツの企画で、第二次大戦下の日本、ドイツ、イタリア、中国の女性政策や動員の比較研究を目的としたもの)、アリゾナ州フェニックスで開かれた日本研究者ゲール・バーンステイン主催の日本女性史のアンソロジー出版のための研究会 (Gail Bernstein ed., *Recreating Japanese Women: 1600-1945*, Berkley: University of California Press, 1991) である。ミリアムさんのテーマはいずれも「モダンガール」だった。中野重治論の刊行にこぎつけたあと、リサーチのなかで出会った『女人芸術』などを読み込むなかで次の仕事としてモダンガール論に着手していた。ちなみに、バーンステインの本のなかのミリアムさんの論考は"Modern Girl Goes Militant"である（これの姉妹編とも言うべき論考は「日本の女給はブルースを歌った」脇田晴子・S.B.ハンレー編『ジェンダーの日本史』下巻所収 東京大学出版会 1995）。

「モダンガール」というと私たちは、短髪で大胆に肌を露出したファッションを身にまと

い、モダンボーイとカップルで街角を闊歩する（銀ブラ）姿を思い浮かべるが、それを1920年代、30年代日本に開花した消費文化が生み出した風俗現象とみなすのが常だった。しかしミリアムさんは、これを関東大震災後モダニティに向かう日本社会の変容、とりわけ階級横断的な消費主体の形成という観点からとらえ返し、モダンガールの喫煙や自由恋愛を明治の良妻賢母規範からの新世代の離陸とみる。エロティックなイメージを強調するメディアや文学の表象によって「モボ」と並んで「モガ」のモダニティ推進力としての政治性など誰も省みなかったなかで、モダンガールとは誰かといえば、長期のストライキを戦う女工やこの期に生み出されてきた女給を含む「職業婦人」と呼ばれたさまざまな職種で働く女たちだったのだというのが彼女の論点である。だから、モダンガールは「モガ」ではなく「モダンガール」とフルネームで呼ばないかぎり歴史のなかで彼女たちが果たした役割を見失ってしまうのだ、と。

ミリアムさんが手探りでモダンガールの問題に手を染めてから30年近くが経った今、「モダンガール」研究は日本のジェンダー研究の分野で根を下ろし、東アジアの近代化を読み解くキーワードとしての地位を与えられている。その研究によると「モダンガール」という国境を越えた（トランスナショナル）女性の表象は中心である西洋から周縁部・アジアへという一方的流れではなく、相互浸透性のうちに形成されていることを確認するにいったという（2008年版『日本女性史大辞典』（吉川弘文館）の「モダンガール」の項目参照）。これはモダンガールを欧米の模倣ではなく、日本女性の固有の課題のなかから誕生したものともみたミリアムさんの論点の延長線上にあることは明らかである。

深刻な病気に苦しんでいたミリアムさんが長編のモダンガール論を脱稿した、と風の便りに聞いたのは数年前で、それがようやく2006年に*Erotic Grotesque Nonsense*として刊行の日の目を見たようだ（Berkeley: University of California Press）。私がそれを知ったのは2008年の始めで、A5変形判369ページに及ぶ大著を手にとったときは我がことのようにうれしかった。ミリアムさんはすでに大学も退職しており入院中だった。二月に入ると周囲では延命装置をはずすことも話し合われているというニュースが伝えられた。あの発刺としたミリアムさんがそんなことになってしまうとは！ 信じられない気持ちだったが、今となっては、せめて彼女が心血を注いだ著書を読むことしか私にはできない。それがせめてミリアムさんとの友情に報いることになるかもしれない、そう自分に言い聞かせながら私は何日もかけて読み通したのである。

「何日もかけて読み通した」と言うのは、重厚な中身のためだ。それは、日本資本主義の発展を背景に関東大震災以後開花してゆくマスカルチャーの意味を日本近代史のなかでとらえるためにミリアムさんが使用した膨大な資料と、彼女の解釈によって浮き彫りにされるモダニティのさまざまな局面を「モンタージュ」の手法によって提示することで読者自身に断片を統合しながら全体像の組み立てをゆだねるという本の構成の仕方からきているだろう。一方の極に議論の起承転結が一直線上に置かれた著作があるとすると（このことが本の質に関係しているという意味ではない）、ミリアムさんの本は多次的叙述という意味で対極にあるからだ。この本では、章と章のテーマはストレートにはつながらず、また、章ごとに完結した分析が提示されているわけではないが、全章読み通して断片がつなぎ合わされることでその相互関係が理解され、著者の意図が見えてくるという仕掛けになっている。そのために、読者としてもそれなりのつきあい方をする覚悟が要求されるということである。そ

んなわけで日常業務に中断されながらも、私が、また本に戻り、最後まで投げ出さなかったのは、カルチュラル・ヒストリーを描くミリアムさんの論点がとても興味深かったからだ。やっぱりミリアムさんだ！—読みながら私は何度もそう思った。そこに映し出されていたのは、80年代に私がみた豊かな感受性と鋭い知性で物事の核心に迫っていく、あのミリアムさんの姿そのものだったから。

人びとがモダンを求め、実践した場所が五つあげられている—1)「モダンガール」が闊歩した銀座を始め、女工たちの戦鬨性があふれだした工場地帯の路地裏の道ばた、2)女給がエロティシズムを売り物にして働いたカフェ、3)ハリウッド・ファンタジーを伝播する場としての雑誌『映画の友』、4)変わりゆく夫婦の関係と生活の近代化が実践される家庭、そして5)民衆のレジャーランドとして賑わった浅草。これらを取り上げるなかで、モダニティを生きる人々の意識のありようが跡づけられるのだが、参照される資料は、先行研究は言うに及ばず、文学作品、映画、エロティシズムのジェスチャー、レビューガールの衣装、食べ物などにおよび、それらを読み解くミリアムさんはセンシティブで機知に富む。ユーモアのセンスに満ちた叙述は読む者を引きつけずにはおかない。階級を越えて初めて消費主体となったこの時代の人々が日常生活のなかで求めたモダニティへの鼓動は、まさに浅草のジャズホールや舞台上で演奏されるドラムの音と重なり、スピード感を伴ってページの間から立ち上がって来るようだ。そして該博な知識に裏付けられた彼女の分析は、明治の家族国家イデオロギーに育成された身体とは異なる身体性の出現を的確に描き出すのである。

さて、本のタイトルとして掲げられている「エロ・グロ・ナンセンス」であるが、この言葉は1920年代、30年代の大衆文化の低俗性を特徴づけるために使われてきたことはよく知られている。とりわけ、30年代になって軍国主義の台頭とともに抵抗の拠点を失った民衆が個人の快楽に逃避することで戦争に巻き込まれてゆくというような解釈が一般的だったと言える。ミリアムさんの解釈はこれに挑戦するもので、本書の内容を一言で要約すれば、「エロ・グロ・ナンセンス」—「エロ・グロ・ナンセンス」の中心はエロティシズムの追求と著者はみる—のマスカルチャーが何を表そうとしたのかを読み解く試みということになるか。新しいジェスチャー、新しいセクシュアリティ観や家族関係の変容、観客として「エロ・グロ・ナンセンス」文化を消費すること—これらに埋め込まれているのは、明治の家族国家イデオロギーからみずからを解き放ってゆく近代のエートスだった。もちろん、これが戦時体制の深化とともに消費主体としての民衆は天皇の臣民として再編成され、コスモポリタンの「エロ・グロ・ナンセンス」は非国民の快楽としてしりぞけられ、最終的には「鬼畜米英」のスローガンに置き換えられてゆくのである。

ここまで書いてきて私は、天皇の臣民であることに変わりはないにしても資本主義的商品の消費主体となって快楽を追求する民衆と、天皇の臣民として再編成され、帝国の野望に荷担してゆく民衆の経験の二重性を表すさいに、ミリアムさんが採用しているconsumer-subjectsという言葉に注目していることを付け加えたい。subjectsという言葉の意味の二重性—つまり、行為の主体者と絶対的權威に従う臣民という二重の属性。この言葉を通してミリアムさんは日本のマスカルチャーの歴史の特異性を語ろうとしたのかもしれない、と私は考えるからだ。

以上、ミリアムさんの究極的関心であるモダンガール論がマスカルチャーの歴史という射程のなかに位置づけられ、分析されていることをみてきたが、それにしてもこの力作を送

り出したミリアムさんに私は心から敬意を表したい。衰えゆく健康と死の予感のなかでよくぞ執筆に集中し、完成にまでこぎつけたものだと感嘆する。おかげで私はミリアムさんと再会できたことに感謝したい。

あなたが残した思索の跡をたどることで、私は、親交のあった80年代と同じような知的刺激を受け、豊かな時間を過ごすことができました、と。

<筆者あとがき>

本稿を書き出したとき、私のなかのミリアムさんの思い出を前置きとして書いて、本論では彼女の二冊の著作*Changing Song* と *Erotic Grotesque Nonsense* のなかでジェンダーの視点がどのような位置を占め、論点構成にいかなる役割を果たしているのかを検証する予定であった。しかし、私の健康上の問題もあって当初の計画をまっとうするところまでいかないうちに息切れ状態になってしまった。本稿は私の記憶のなかのミリアム・シルババーグ像ということで一応のまとめがりがつくと思うので、このまま提出させていただく。本文は別の機会に譲りたいと思う。

★これらのテーマで書いた私自身の論考は、拙著『女性学の再創造』（ドメス出版 2002）を参照していただきたい。



ミリアム、ありがとう！

玉野井麻利子

ミリアムの医師団が彼女のライフ・サポートシステムをはずす、という日の数日前、私は朝早く彼女のいる病院にむかった。大声で話しかければ彼女の耳に届くかもしれない。でも他の人たちがいたらどうしよう、と思い、まだ町のさめやらぬ頃に彼女に最後のお別れを言いたかったのだ。幸い、病室にはもう深い眠りについたかにみえるミリアム以外、誰もいなかった。勇気を出してこう言った。

「ミリアム、テキストの読み方、教えてくれてほんとうにありがとう！ それから“本”の書き方色々教えてくれたよね。いつも私がこれ以上は先に進まない、と思っていた時、いつも肩を押してくれたよね。ほんとうに、ありがとう！」

思い返すと、私とミリアムの関係は常に純粹に「学問を通して」いたように思う。ひとつのエピソードを紹介しよう。彼女が(良性)脳腫瘍の手術を受けるという日の数日前、ミリアムは私のオフィスにやってきて、私の腕の中で泣き崩れたことがあった。私はこの手術のことを知っていたので、心の中で言うべきことを準備していた。ところが彼女はこれとは全く無関係なことを私に言ったのである。「近頃、日本の近代性について本を出したH教授、私の中野重治の本を全く引用していないのよ。何てことなの！」これにはわたしもびっくりしてしまって言葉を失ってしまったのである。



私は時に彼女との関係がどうしてこんなに学問一筋になってしまったものだろう、と考えることがある。そして思い出すのは1993年、私がここカリフォルニア大学ロス・アンジェルス校に赴任した時に交わした彼女との会話だ。「マリコ、あすブルーミング・デールのデパートに連れて行ってあげるよ！ 口紅の色を選んであげる！」私は実に無反応(!)であった。彼女はこれに懲りたのか、その後我々の関係は学問のみに落ち着いてしまったようだ。

そのかわり、ミリアムはこの非学問的關係を私の娘(当時小学校の五年生)に向けた。ところが娘もまだ口紅の色に興味がなかったので(20代に入った今もないのだけれど)、彼女との関係もまた学問的になってしまった。大学の入学試験の時など、娘の書いたエッセイをミリアムは何時間もかけて直してくれたそうである。彼女と娘とのランデブーの場所はたいていインターナショナル・パンケーキハウスというホットケーキ専門のファミリーレストランだった。初めて娘をこのレストランに連れていった時、私も夫もいっしょに昼食を食べるものと思いこんでいたのだ。ところがミリアムは「これは私と葉子とのデートなんだから、あなたたちは帰ってね」と言った。彼女はいつも、誰に対しても、常に真剣だった。そして常に寛大だった。自分の持っているすべてのものを、常にさらけ出してくれた。

こんなに寛大であった彼女、そしてこんなに早くいってしまった彼女に、私は何もお返しができなかったような気がする。



## Miriam, We Love You

バーバラ佐藤

今夜、私もまた、麻利子(玉野井麻利子, Associate Professor, UCLA)とスタッフの方々、彼女の学生さんたち、娘の京子さん、そして、ミリアムのため、この追悼の式典を準備するのに奔走されたすべての方々に、感謝申し上げたいと思います。この計画に成美(中川成美)と私を含めて下さいましたことに感謝いたします。

私たちのそれぞれが、数え切れぬほどさまざまに、ミリアム(Miriam Rom Silverberg)のことを思い出します。私たちがここに集い、悲しみを、愉快的話を、そしてミリアムと彼女の輝ける才能への愛を共有することが、麻利子の尽力によって可能になりました。魂ということであれば、ミリアムは私たちの日常とは別の場所にいつもいるということになるでしょう。しかし、私たちのミリアムが、私たちの語るすべての言葉に耳を傾け、それらすべてを愛おしんでくれることに疑いはありません。

「ミリアムの友人たち」のみなさん—こう、あなたがたが愛情をこめてメールの題をつけてくださったように、そしてそれはミリアムに関するたくさんのファイルのひとつにしまいこまれているわけですが—あなたがたは私にとってだんだん親愛なるものになってきました。部屋を見回せば、あなたがたが誰であるかを認識するのに紹介の必要などありません。

赤いジャケットを見事に着こなしているソンドラ（ソンドラ・ヘイル(Sondra Hale, Professor, UCLA)）が、ミリアム自身と、彼女が色彩、気品、そして華麗さにたいして持っていた愛とを讃えます。

「ミリアムの友人たち」のみなさん、私もまたさいごの数か月を彼女とともにいたいと切に願っていました。しかし、ミリアムに残された日々をあたう限り心地よいものにすることができたのは、数の上でこそわずかではあったわけですが、あなたがただったのです。あなたがたは、ミリアムの反応を注意深く記録されました。あの目のちらつとした動きは何かのサインだったのかしら？彼女が流した涙は何かを伝えようとしていたのかしら？私は、「今になって思えば」という言葉は使いたくありません。しかし、学事のスケジュールに従うのではなく、直観に従って東京からロサンゼルスに飛び、この今ではなくてあのときに、ミリアムとあなたがたすべてとともに過ごさなかったことを後悔する気持ちを抱いていることは事実です。

ジム（James Fujii, Professor, UC Irvine）が細心に段取りを組んで、朝日が昇る時はだれがミリアムのそばにいて、日中は、そして夜の帳が下りたら誰がそばについているかを、みんなに知らせてくれたのでした。みなさんは、ご自身の毎日がいかに忙しかろうとも、スケジュールを調整して交替でそばについておられました。ミリアムの好きな音楽をあなたがたはかけられたわけですが、どんなに彼女の好みが他の人と違っていたことか、天のみぞ知るところです。アリス（Alice Wexler, Professor, UCLA）が2008年のアカデミー賞にチャンネルを合わせたとき、ミリアムはまどろんでいたのかもしれませんが。でも実際、彼女はその「派手さ」に見入り、テンポが緩くなってきたら「チャンネルを他に切り換えた」のでした。みなさんは賞賛のこぼれを期待されていたわけではないのですし、それらを欲しておられたのでもありません。しかし、なにものもミリアムの目を逃れることはできなかったということを感じておいていただきたい。ミリアムは、彼女だけが知り得たように、あなたがたがそばにいたことを知っていたのです。（ミリアム、言う必要もないでしょうが、ジムが今日どんなにこの場にいたいと願っていたことか。彼は私たちといっしょに参列する予定でしたが、ジョージ（James Fujiiのご尊父）の衰弱がすすみ、東京を離れられなくなったのです。）

私たちの友情が花開くずっと前、私はその分野におけるミリアムの業績についてはよく知っていましたし、それに畏れをなしてもいました。しかし、1998年、私がミリアムの隣に坐ったとき、彼女はシドニーで開催された「モダニズム、モダニティー、近代」シンポジウムにおける記念プログラムでのミリアムと寸分違わぬように感じられ、このとき私たちは絆を確かなものにしたのでした。

ミリアム、私がこの追悼式の日取りをまちがえてさえいなければ、カジ（佐藤一樹）と祥（息子）は私と一緒に参加したことでしょう。祥はあなたが喜ぶかもしれないと彼なりに考えたことをしました。彼はニューヨークのアパートメントで、亡くなった家族の栄光を讃える聖歌であるカディシュを歌いました。祥は、あなたに食事制限があるにもかかわらず、美香子さんの家の近くのレストランから、あなたの大好きだった「とんかつ」を届けさせるように手配したのだとも打ち明けてくれました。まこと、ミリアムは、佐藤家のなかに確かな存在を占めていたのです。とてもミリアムらしい、キャスター付きの鮮やかなブルーの旅行鞆は、私の母から彼女に遺贈されたカシミアのセーター、ロサンゼルス気候には適さない

二着のジャケット、「レンタル中」の靴、派手なピンクのポケットブック、そして知る人なき他の物たちと同様に、屋根裏で次に使われる機会を待っています。

私は日本から、ミリアムとだいたい週に一回ほど話をしました。ミリアムの話し方があまりにはっきりしなくて理解できないこともままありましたが、さいごの日々と一緒に過ごそうと、つまり、半年を「懐かしの国」(日本)で、もう半年をアメリカで過ごそうと決めたのでした。

今季節は秋、十月です。「十月の黄昏」について詠んだW・B・イエイツとも、私たちのまわりのものが枯れゆく秋というのとも違って、ミリアムの精神は私の心のなかで日々新たにされ、彼女の教え子たち—エリッサ(Elyssa Faison, Associate Professor, University of Oklahoma)、ジョナサン(Jonathan Hall, Professor, UC San Diego ジョナサン・ホール)、トッド(トッド・ヘンリー)—のなかで再生し、彼女の発表、著作、論文は、彼女の友情のうちに、彼女の生きることへの挺身のうちに甦ります。私はミリアムが美しい一枚の布だと考えるのが好きなのです。彼女は人生というタペストリを織りなす一本の生き生きとした糸でした。

ミリアムは生きるために懸命に闘いました。2005年に成蹊大学に滞在中、彼女の指の感覚の喪失はだんだんと悪化の一途を辿っていきました。薬物治療のため、美しい黒髪は失われ、特にシャワーから出たあとは、柔らかな巻き毛を残すのみになっていましたが、若い少女を思わせる瑕疵なき素肌は胸を打つほど美しいものでした。ミリアムは独立自尊の人で、他人にたよることをよしとはしませんでした。東京は渋谷の、ひしめき合う通りをかき分けるように歩いたとき、私が彼女の腕を強くつかみ過ぎてバランスを崩すというので、私はずっと叱られていました。ミリアムは何度も「ストリート」から涙ながらに電話をかけてきましたが、こうしたことのすべてから、若者であふれかえるところにいることの、最新のカラースクリーンの電子辞書をチェックしながらヨドバシカメラをみてまわることの、飽くことなく吉祥寺で毎日百円ショップへ出かけたときの、あるいはまた、人びとの写真を撮り、今もそのままに残っている元麻布のよく訪れた数少ない場所の写真を撮っているときの高揚感が滲み出していました。

ミリアムは豊かな人生を送りました。彼女の瞳目すべきバックグラウンドに注意を向けてみなければならぬでしょう。ミリアムと私はともにユダヤの血を引いていますが、これが私たちを結びつけたもうひとつの共通項です。「懐かしの国」で人格形成期を過ごした子供のころ、彼女はユダヤ・コミュニティー・センターでの金曜の夜の礼拝にいつも出ていました。ミリアムの父親も研究者で、社会学者でしたが、国務省からの要請で日本に来て、ユダヤ・コミュニティー・センターを創設し、最初の代表を務めたひとりとして働いたのでした。ミリアムは来日中、金曜の夜にはシュール(シナゴグ)に行こうと主張しましたが、これは私たちのいずれかが熱心な信者だからというのではなく、彼女が自分のルーツを大事にしていたからなのでした。観念ではない幸せな記憶が、彼女を広尾の礼拝堂へと向かわせたのでした。彼女はさいごまで、何が正しくて何が間違っているかについての判断力を失ってはいませんでした。2003年にイラク戦争が始まる前、ミリアムと私はニューヨークでのアジアスタディーズ協会(AAS)の大会に参加していました。目の前にある危機的な問題を指摘しないパネルの話をお聴き代りに、ミリアムはデモをするため通りへと出て行きました。

ミリアムは人の娘でもありました。ある種の激しさをもって彼女は両親のことを敬慕して

いました。そしてまた彼女は daughter であり、aunt であり、いどこでもありました。彼女は多くの帽子をかぶりました。親戚の方が数名、今日私たちとともにいらっしやいますが、同意して領いてくださることは私にとってよるこびです。彼女はみなさまがたのすべてについて語ったのです。

ミリアムは本当にさいごまで、彼女の母親であるジューンのそばにいました。大変な困難がありました。ミリアムは彼女を、ワシントンの長く住んだアパートメントから、ともに近くにいることのできるロサンゼルスへの移動させました。ミリアムはほとんど毎日そこを訪れました。ジューンを亡くしてのちミリアムの最後の来日のとき、立命館大学の成美（中川成美）と西正和が彼女をセミナーに招きました。それは明らかにミリアムのための舞台でしたが、彼女は私に参加するよう主張しました。そして当然のことながら、それはミリアムの舞台となりました。彼女は学生も教員も私も虜にしました。セミナールームは興奮に沸きかえりました。

セミナーのあと、ミリアムと私は、泊っていた京都のコープ・インに戻りました。私はジューンを偲んで何かしようと言いました。香典のかわりに、私がシルヴァーバーグ家の女性たちを上等な中華のディナーに招待することで話は決まりました。私たちはおなかいっぱいになってレストランをあとにしたのですが、ミリアムは、私たちはワイルドに生きなくてはいけない、そして、京都の百円ショップを東京のと較べてみなくては、と主張したのです。私たちは「おせんべい」を数袋、ジャンクフードをいくつかと、もちろんコーラも買ったのですが、コーラは部屋に戻ってラムと割って飲むためでした。

時計に目をやると、私が持ち時間をオーバーして話してしまったことは明らかですが、最後にまとめとして、もう一度くりかえさせてください。ミリアムは生まれながらにして教師であり、また学者として時代に遙か先駆けていました。時間は過ぎ去っても、私たちのミリアムをなくした喪失感まで持ち去ってはくれません。ミリアムの精神は日ごとに生まれかわっています。彼女はたぐいまれな人物でした。鶴のように、彼女は高く舞いました。残り続けるのはミリアムの学究だけではありません。ミリアムその人も残り続けます。彼女は私たちすべてにとってのインスピレーションなのです。

ミリアム、私たちはあなたを愛しています。

(翻訳：近藤康裕)



ミリアム：歴史家にして教師

クリスティン・デネヒー

私がミリアムの名前と研究を初めて知ったのは、ジョージタウン大学に在学中に私の指導教官だったジョン・ウィテック神父を通してだった。彼はミリアムの修士論文の審査委員をしており、ミリアムはフランツ・ファノンの作品を援用しつつ、1923年の関東大震災の際に起こった朝鮮人に対する暴力行為を考察していた。中野重治についての彼女の研究におけるように、文学テキストを歴史の分析のなかに組み入れる彼女の能力はひとつの特色であり、

彼は私ができることを理解するだろうことを知っていたのだ。UCLAでのミリアムの指導のもとで、私は日本現代史の複雑さ、とりわけ帝国主義と国家権力の性質の諸問題について目を開かされた。私が認めたひとつのことは、ミリアムが国家権力の歴史上の軌跡と私たちの日々の生活のなかにあるそうした権力関係の現代における名残や現れのあいだの結びつきを強調することを決して恐れなかったことだ。私が学位論文「戦後日本における植民地朝鮮の記憶」を書いているあいだ、彼女は様々な歴史のアクター（朝鮮人知識人、日本の左翼知識人、元植民地官吏）自身の言葉を引用することで、彼ら自身をして自らを語らしめることを常に私を促した。詩やその他の文学テキストのニュアンスをとらえることができる彼女の能力は、綿密な解釈力と歴史上の文書のなかの証言としてのそれらの有効性を示すひとつの優れた事例だった。彼女は慣習にとらわれない原典の利用を勧め、学生たちに現代日本についての新しい問題を問うことを促す優れた師であった。彼女のもとでティーチング・アシスタントをしているとき、私は彼女が講堂をいっぱいにした学生を前にしてハロー・キティからセーラームーンや宝塚におよぶ話題を議論しつつ、現代日本概論のなかでジェンダー問題を取り上げるのを見た。人類学や文芸批評その他のアプローチを引き合いに出しつつ、ミリアムは伝統的な学問的境界に縛られず、学生たちにそうした人為的に引かれた境界線の外部に出ることを試みることで自らの地平を広げるように熱心に勧めた。創造的実験を常に励まし楽しんだミリアムに感謝を捧げたい。（翻訳：阿南順子）



### ミリアム先生の思い出

エリサ・フェイソン

文化、労働、ジェンダー…ミリアム先生と幸運にも彼女の弟子となったわれわれにとって、これらは思想史の重大な要素である。ミリアム先生は、娯楽や遊びが重大問題であると信じ、女性、労働階級、植民地の人々の思想史は大衆文化を通して研究できると考え、文化史と思想史の区別を拒まれた。代わりに、大衆雑誌が、考現学者（モダンオロジスト）論文、帝国国家のイデオロギーや法律と共に検討されるべきであると主張された。また、お住まいになっていたロサンゼルス市の政治や文化生活に非常に興味を持たれ、通りの歴史、民族的混合、ロスを支える映画産業、その風景を圧倒するビルボードや広告のそれぞれに、日本の大正時代の考現学者が東京の文化生活を観察しドキュメント化しようとしたときのように目を留められた。

この文化史と思想史の区別の拒絶は、先生の教えるスタイルにも反映されていた。私は、1992年から就職するまでUCLAでミリアム先生に師事したが、先生に教えを受けることは先生の生活の一部にされることを意味した。先生からは、ゼミでだけではなく、レストランやカフェ、先生の家でダイエットコーラを飲んでお煎餅を食べながら学んだ。ミリアム先生は、ハリウッドやアメリカのテレビ、Jポップや、また彼女の若い時に人気があった寅さんの映画に夢中で、よく話は、山川菊栄がとりすましてモダンガールを非難したことから、

アメリカのテレビドラマのアリー・マクビール（1990年代に人気があった）の反フェミニズムへと途切れることなく移動した。

個人的にもアカデミックな生活にも、ミリアム先生は筋金いりのフェミニストで、ほかの女性の権利のために立ち上がった女性を称賛し尊敬されていた。そのフェミニスト意識、ユダヤ人としての文化遺産、そして日本で子供時代をすごしたアメリカ人としての経験が、先生のアイデンティティを形成し、研究の中で探究した知的問題にも大きく反映されていた。成人後は大半を病気と闘われ、最後の10年間は脳腫瘍やパーキンソン病の診断が生活の中心となり、障害研究に注目されるようになった。UCLA 女性研究センターのディレクターとして「障害に向き合うフェミニズム」という会議を主催された。先生がオバマ大統領の選出を目にされることができればとか、先生にもっと歴史や映画に関する質問をすることができればなどと思うが、いつまでも、先生に学んだこと、また先生を通してめぐり合えた人々を大切にしていきたいと思う。

（翻訳：安武留美）



普遍性の一断片—友人ミリアムを偲ぶ未完成原稿

..... グレゴリー・ヴァンダービルト

ミリアムさんが亡くなった後、助手の仕事をしていたときにアパートの研究室でたまたま見つけた未完成の英訳原稿を思い出しました。ミリアムの親友のジムさんに頼んで、最期の世話を担った従妹のヘレンさんに奇跡のようにミリアムの遺物のなかから見つけ出してもらいました。ミリアムのプライバシーを侵す恐れがありましたが、原稿のきれいにできるところをきれいにして、ミリアムを記念するために出版しようと決心して、がんばりました。一ヶ月ほどかかりましたが、結局、僕の能力以上になって、ミリアムの友人が編集しているインターネット雑誌に断られてしまいました。が、この遺作にも生きるということについて教えてもらいました。

この未完成翻訳は、藤田省三氏（1927—2003）の「或る喪失の経験—隠れん坊の精神史」というものです。『精神的考察』（みすず書房、1982年）に載せられているものですが、1981年、『子どもの館』という雑誌のため書かれたようです。1981年に、10年以上学界から亡命していた藤田が法政大学に帰ってきて、ミリアムがシカゴ大学の院生として青春の故郷の東京に戻ったところでした。2003年6月、藤田の偲ぶ会のために書いた追悼文でミリアムが藤田との出会いをこう語りました。

私には、藤田省三のすばやい身のこなしについて鮮烈な思い出があります。彼にはじめて会った時のことです。大原社研の所長だった二村一夫の研究室で、彼は突然、椅子の上に足を組んで座ってしまったのです。カール・ショースキーについて、また日本共産党の並外れた勇気と、この党が占領軍の農地改革政策のもとで置かれた皮肉な立場について興奮しながら語っている

最中のことでした。彼はこうして、椅子を「座布団」に変身させてしまったのでした。このゼミは河上肇の『貧困物語』から始まり、荒畑寒村の日記へ、『女人芸術』へ、さらに山田盛太郎や辻潤、ウィリアム・エンプソン、淡谷のり子へと進んで行きました。そうしてもちろんベンヤミンへも。歴史を生きることは勉強することそのものであり、そして勉強は生活と区別することができないということを学びました。(『みすず』510号、2003年10月)

勉強と生活、友情と仕事。そうして体の動きにも学ぶことができます。(有名なモダンガール論にも足の動きに目が引かれるとあったことを思い出します。)当時、日本でも英語圏でも紹介されたばかりのベンヤミンへの関心が藤田と共通していました。『Changing Song』には中野重治とベンヤミンが会ったことはありえないのに、同じ質問を聞いて、同じ近代を問うていたという印象的な結論が忘れられません。UCLAの院生として、僕はミリアムのゼミに参加したり、『Erotic Grotesque Nonsense』の雑役をしていたのですが、ミリアムと親しくなったきっかけは2000年の秋、同志社で研究するため京都に引っ越してから、ある夜、京都に来たミリアムから「Come and meet my friends」というミリアムらしい電話が入りました。京都の北部の岩倉地域にある屋敷にミリアムに会いに行きました。「論楽社」(論じることを楽しむ社のような場所)というところで、大人のための(無宗教)寺子屋のようなところに入りました。ミリアムと響きあった居場所だとすぐわかりました。創立者の虫賀宗博さんと上島聖好さん(当時夫妻)はミリアムより4年下で、学園紛争に残された乱雑のままの大学に入りました。卒業すると、藤田のような学者も、岩波の安江良介さんのようなジャーナリストも、ミリアムより数週間後に他界した岡部伊都子さんのような随筆家も、ハンセン病療養所の入園者も、有名無名の先生を探したり、講座を開いたり、小冊子を作ったりして、自分で意味を作ろうとしてきました。競争ばかりのアメリカ学界のものになってしまったミリアムにとって、こういう孤独の中から共同体(コミュニティ)を求めて生かすことは、冷たい清水のようだったと思います。僕にとってもあの夕は思想世界や友情世界への入口でもありました。

その京都の秋の夜以来、病院での言葉のない対面や別れもありました。藤田に一回しか会ったことがありませんし、2002年の秋、上島と一緒にお見舞いすることはミリアムは僕が友人か学生かという曖昧で反対の気持ちを表示したそうです。藤田は弱っていて生き残りつつありましたが、ハンナ・アーレントのことを話しました。ミリアムのゼミではじめてアーレントを読みましたので、結びついたと感じました。翌春、ミリアムがロサンゼルスからわざわざその中野区の病院に行きました。こういうふうに語りました。

最後に会ったとき、彼は私の手をしっかり掴んで、「帰れ」と言いました。

「帰って勉強をしろ、帰って仕事をしろ」ということだったのだと解釈しました。

この追悼のために、ミリアムがアーレントの「パーリアとしてのユダヤ人」論を探しました。院生時代、藤田に読ませてもらったそうで、20年後「パーリアとしての藤田省三」を問いました。「パーリアとしてミリアム」を考えるとアーレントに指摘された「力ない人々に自分を重ねる」、「文化の真の融合というものを実践する」、「反逆者としての責任を引き受ける人間」、それぞれにミリアムも描かれたでしょう。

それから5年後、あのカルヴァーシティ市の長期介護施設で、上島の自殺をミリアムに報

告しなければならぬ日、鬱というものと長く暮らしていた彼女が「Why?」と声がほとんど出ないのに言おうとしました。上島は「お休みどころ」（茨木のり子さんの詩から取ったことば）という名前で熊本県の山奥にもう一ヶ所の居場所を開こうとしました。詩人や芸術家などが大好きだったミリアムが「artists' colony」の種として応援しましたが、上島は山村の高齢化・無人化、男女関係の不信頼、現代若者の「明るい虚無」（彼女がパートナーにしようとした人の自己像）——つまりミリアムが直感によってわかった戦後日本の人々の歴史的孤独そのもの——を超えられず、自死を選びました。同じく2007年10月29日、太平洋のむこうにあったミリアムの病室で、詩篇第23篇も Kaddish というユダヤ教の服喪者の祈りも覚えず、「南無阿弥陀仏」を二人で唱えて泣きました。その年の11月まではお見舞いに行くとミリアムが少しでも良くなりそうでしたが、お正月過ぎにインドへ出かける前にお見舞いに行くと眼が覚めなかったのです。2008年3月、アメリカへの帰りに熊本市内の上島家の墓にお参りしたとき、太平洋の向こうのミリアムが他界しました。

「隠れん坊の精神史」には藤田のキーアイデアが見えます。隠れん坊は「おとぎ話」の世界が体で動かして劇にされるプロセスで、こういう経験によって参加者が社会のメンバーになり、人間として成熟することができます。

こうしていずれも社会喪失の危機を経過することを通して相互的に回復と再生を獲得するという劇的過程をぼんやりと経験する。（鬼が）相手に勝つことは自分を救うだけでなく相手をも救うのであり、（隠れん坊）相手に敗けることは相手の勝利になるだけでなく自分の社会的勝利にもなるのであった。勝ち負けの一義的な二者択一を物の見事に取っ払った、この相互性の世界は私たちに何を思い出させるであろうか。

藤田にとって、高度成長によって自動車道が道路にあふれて隠れん坊のような遊びが不可能になったように、日本の人々にはこの可能性が失われてしまいました。何が残っているのか。鬼役の社会的死と再生が基礎となった信頼がなくなると共同生活はありえないでしょう。藤田はこういう予言的な断片を残しました。

ミリアムの勉強にも、ミリアムの生活にも、こういう可能性を探す予言的な声が聞こえます。障害をもっていたからかもしれませんが、こういう社会的相互信頼がまだ残っているようにミリアムは生活し勉強しました。知人や未知の人に迷惑をかける場合があり、裏切られる場合がありましたが、人の心が突然開く場合もありました。そうすると友情もありえます。不思議です。

ミリアムが亡くなって以来、藤田が尊敬して共鳴しあった E. M. フォースターのことばがよく思い浮かびます。If I had to choose between betraying my country and betraying my friend, I hope I should have the guts to betray my country.（「もし、国を裏切るか友人を裏切るか、どちらか一つを選ばなければならなかったら、国を裏切る根性がありますように」）ミリアムにこういう根性精神を学びました。感謝します。

2009年5月21日





## シルバーバーグ先生との思い出

たけうちみちこ

私がシルバーバーグ先生に初めてお会いしたのは1999年の冬でした。私がUCLAの博士課程に入学を希望していたので、彼女の指導のもと研究したいと思いお会いに行きました。彼女は私の修士研究が占領期のパンパンガールであることと、アメリカで日本女性史先駆者であるシャロン・シーバースの生徒であったということで大いに興味をもってくださいました。私にUCLAに入学するために努力をなさい、そして実力をみせなさいと、彼女が次に教える20世紀日本女性史のクラスを取ることを勧めてくださいました。

シルバーバーグ先生の講義はとてもカリスマティックで刺激的でした。クラスでは100人くらいの生徒の前で私に修士論文を発表する機会を与えてくださいました。故・松井やよりさんがいらっしゃったときにはホームパーティーによんでくださり、松井さんと直接お話をする機会をつくって頂きました。(その後残念なことに、私が彼女に松井さんの死をお知らせすることになってしまったのですが。)まだ正規の生徒ではなかったのに、ホームパーティーに呼んでくださったお礼として、ポッキーなど日本のお菓子とハローキティのボールペンとノートを差し上げました。その時シルバーバーグ先生は日本の女子高生のような喋り方で「(お菓子は)太っちゃうからダメー。」とおっしゃいました。後に「実はあんまりキティちゃんとか好きじゃなかったんだけど、あれからはまっちゃったのよねえ。」とおっしゃり、ハローキティのトースターやテレビをみせてくれました。UCLAで行われたシルバーバーグ先生のメモリアルでたくさんの方々が彼女のキティちゃん好きのエピソードを話された時、私は心の中で「実は私のせいなのです……。」と恐縮しました。

シルバーバーグ先生は本当に楽しい笑い方をされる方でしたね?彼女が日本のドラマのロングバケーションをみているとおっしゃったので主題歌をまねて歌ったら「うまい、うまい!うっふふふふふふー!」と笑いました。先生は自分の分野の大衆文化だけでなく、日本の現在の大衆文化や流行もよくご存知でした。ある時は、「みちこ、スマップの新しいCD買っちゃったのよー。ウフ♥」と言い残し、私の友達のPh. D. Candidacy Qualification Exam会場に向かって行かれました。これから試験を受ける真剣な面持ちの友達と対照的だったのでよく覚えています。またある時、私の試験勉強の指導するために私を家に呼んだのに、「そうだ、サンタモニカで少年ナイフのコンサートがあるのよ。」とおっしゃり、一緒に出掛け、二人でずうずうしく楽屋に入って少年ナイフの方々とお話したことがあります。また、映画「Memoirs of a Geisha」を一緒に見に行ったら、「私、渡辺謙に似てる彼氏がいたのよ。」とおっしゃったので、私ともう一人の学生の羨望的になりました。最新の日本で流行している映画、ドラマ、漫画などは先生のお宅で拝見させて頂きました。そしてそれらはすでに先生の新しい論文のテキストになっているのでした。

シルバーバーグ先生は新しい学士の生徒、知らない人たちに「日本語しゃべれるの?」「日

本にいったことあるの？」と聞かれると、「I grew up in Japan!」とおっしゃいました。私はその質問をした人たちがびっくりする顔を見るのが大好きでした。

シルバーバーグ先生は学期始めに「Happy New Academic Year.」とおっしゃり、ハグして頬にキスしてくれました。先生にキスされるなんて生まれて初めての経験でした。学期が終わると、「An excellent, excellent paper!」と私のレポートをいつも褒めてくださいました。平均8年から10年かかる歴史の博士課程のなかで彼女のその言葉がどんなに励みになったことでしょうか。先学期、人類学の玉野井先生とシルバーバーグ先生の遺品の資料を整理していたら、日本女性学の資料の中に玉野井先生と私の名前のファイルがあり、私が提出したレポートたちを見つけました。こうやって私のレポートを取っておいてくださったのだと、とても胸が熱くなりました。先生が引退を決め、もう話す事もタイプすることもままならなくなった時にも、「私は絶対あなたの博士論文の監督者でいたい。Because your research is too interesting.」とおっしゃってくださいました。今でもつらい時はその言葉を思い出して励みにしています。

私が5年前に初めて講師をするときに不安がっていたら先生は、「あなたの一番の長所を使って教えればいいのよ。Use your humor!」とおっしゃってくださいました。冗談を言う私を不真面目と受け取られる先生もおられる中、「あなたのユーモアは長所なのよ、それは教えるのにとってもいいことなのよ。」とおっしゃってくださいました。先生はもちろんわかってらっしゃった。メッセージを伝えるのにユーモアはとても有益、そしてパワフルであるということ。

私が院生の学会で発表したときに、私のフレームワークに対してこういった批評を権威ある教授から頂いたと言ったら、先生もその教授の意見と一致するようなコメントを前におっしゃっていたのに、「それでなんて返したの？」とお聞きになったので、「そこには触れなかったです。」という、「You have to stand up for your beliefs!」とおっしゃいました。今、この言葉は私のアカデミア人生のモットーです。

シルバーバーグ先生の学者としてのご指導はとても厳しく、何度もくじけそうになりました。フィールドリサーチで学校の外に出て他の大学院生と話していても、シルバーバーグ先生が生徒達に課せる読む本の量と多岐にわたる分野に驚かれました。就職された先輩方が立派に堂々と仕事をこなしている姿をみる度、彼女の厳しいトレーニングをやりとげたという自信に満ちあふれているように思えました。フィールドリサーチにて、ワシントンDCで出会う日本からの学生運動世代の学者たちに一番驚かれたのは、「若い人で講座派・労農派の議論が一緒にできる人がいるなんて。」ということでした。「そういう事を誰が教えてるの？」と。「中野重治研究をされたミリアム・シルバーバーグ先生です。」と誇らしげに答えたものです。一昨年アートを書く機会を頂いたのですが、シルバーバーグ先生がいらっしゃってくれたらと、どんなに思ったことか。彼女だったら今どんなアドバイスをくださるのだろうか、彼女だったら今どういう風に解釈されるのだろうか？きっとまた誰も思いつかないようなことを考えられるのであろうな、と。

シルバーバーグ先生が集中治療室に入られたとお聞きした時は、私は日本でリサーチ中でした。その後先生にお会いしに行った時、先生が涙を流して喜んでくれました。そのお姿が忘れられません。先生も私もお互い泣き虫なのです。ですが、私が「今度アーティクルが出るんです。」と言ったとたんに目つきがギラリとかわり、「私の生徒の名に恥じないものを書きなさいよ。」と目で語られました。(絶対そう!) 集中治療室にいようがいまいが、先生は変わらないな、と久しぶりにあの目でみられて身が引き締まる思いでした。

先生と最後にお会いしたのは、彼女のライフサポートを取る前日でした。一人で会いに行きました。しばらくすると彼女の従姉妹が現れ、「ミリアム、あなたの生徒のみちこが来てくれたよ。」とおっしゃいました。そうしたら、彼女の目にうっすらと涙がうかんできたのです。この時点で意識があるのかどうかわからなかったようですが、きっと私が会いにきたことをわかってくれたのであろう、と涙しました。

数日後、彼女が息を引き取ったと連絡がありました。あまりにも、あまりにも早過ぎる死です。

一度、先生は私におっしゃいました。「みちこはアンラッキーだった」と。なぜなら正規に入学した時に先生が脳腫瘍の手術、そしてその後パーキンソン病と判明し、先生の病気のため私の大学院生活が他の生徒達よりも長くなってしまったから、と。でも違うのですよ、先生。私はラッキーだったのですよ。あなたに指導される期間が長くなったのですから。泣き言を先輩方や他の指導教授の方々に聞いて頂くくらい厳しい指導でしたけれども、先生の学術的才能に惚れ込み、尊敬していました。

先生が私に教えてくれたフェミニスト歴史研究者として大事なことは何時も自分の信念を貫き、創造力と想像力を持つということ。シルバーバーグ先生、あなたの最後の生徒として誇りを持ち、あなたのように強い探究心を持ち、あなたの名に恥じぬように精進して行きます。あなたに少しでも近づいていけるように。

この手記を執筆中にうれしい知らせがありました。この秋からカリフォルニア州立大学ロングビーチ校で日本史を教える事になりました。シルバーバーグ先生は私が UCLA に入学した時から将来はもう一つの母校であるロングビーチで教えることを望んでいたという事をご存知でした。先生がいらっしゃったら、きっと「Excellent! Excellent! Michiko.」とおっしゃることでしょう。彼女の笑顔が目には浮かびます。

シルバーバーグ先生のかわりに、全米に散らばった先輩方が今回の就職活動を大変よくサポート・応援してくださいました。ここまでたどり着くまで、この号にも手記をよせておられる、玉野井先生、ノートヘルパー先生、ジムさんが数々の推薦状を書いてくださいました。シルバーバーグ先生にとって、彼女の残した生徒間にある絆、そして彼女の生徒への同僚・友人からの支援、これらの事柄が何よりも一番うれしいのではないのでしょうか。

新しい指導教授であるシャロン・トラウィーク教授が、私の UCLA での就職最終面接の一部である研究発表の練習を皆の前でする時に、「私はミリアムから素晴らしい生徒を授かってラッキーです。」とおっしゃいました。元指導教授であるロングビーチ校のシャロン・シーバース教授は「(この就職は) ミリアムがみちこの研究を良いと認めてくれたおかげだ。」とおっしゃいました。二人とも、シルバーク先生を讃え、私の就職は彼女の私への指導の貢献が大きいと述べ、彼女に感謝することを忘れませんでした。そして私の就職は先生を通じて知り合った方々にも大変喜んで頂けました。「ミリアムも天国できっと喜んでいるよ」と。

6年前に AAS 学会で発表した際に、先輩の水野宏美さんが聞きに来てくださり、「I saw Miriam in you!」とおっしゃいました。私の発表の仕方がシルバーク先生に似ていたそうです。その事をシルバーク先生に言うと「そうなのよ、指導教授に似てくるのよ。」とおっしゃいました。私も宏美さんや他の先輩方にシルバーク先生の面影を垣間みます。彼女の教えそして彼女の講義の仕方や仕草まで、私たち生徒の中にずっと生きてゆくとことでしょう。

シルバーク先生が私たち生徒に残してくれた沢山の物の中に、藤目ゆき先生をはじめとする日本で活躍されるフェミニストの方達との繋がりががあります。一番下っ端の私が言うのもなんですが、これからもよろしくお願い致します。私もアメリカのアカデミアでの日本女性史の発展に携わりながら、日本とアメリカの学者交流に貢献してゆきたいと思ひます。シルバーク先生がそうなさっていたように。

最後にシルバーク先生の思い出を執筆させて頂く機会を与えてくださったアジア現代女性史ジャーナルの皆様へ感謝をこめて。

2009年3月



思い出

安武留美

私が、故ミリアム・シルバーク先生にお会いしたのは、私が UCLA 歴史学部で大学院生活を始めたばかりの頃、学部主催の新入生歓迎のレセプションの場であった。先生は、私が日本人留学生であることを知るとすぐに「日本の歴史のなかでどの時代に一番興味を持つか」という質問をされた。私が「幕末または明治でしょうか……」と何気なく答えると、その理由はなぜなのか問いただされ、少々困惑したことを思い出す。大正・昭和時代のご研究が多いシルバーク先生を納得させるのは非常に困難なことであったに違いないが、当時、アメリカ史を勉強するために留学した私は、日本史の知識のみならず興味も充分持っていな

かった。

その後、シルバーバーグ先生および先生の下に集まる研究者や学生の皆さんの影響であろうか、アメリカへ逆戻りであった私は、日本そしてアジアにも興味を持つようになった。私が UCLA の大学院に入ってから、シルバーバーグ先生がスタンフォード大学の研究員として UCLA をしばらく離れるまでの 3 年ほどの間に、私は先生のクラスを 2 つ履修した。その中のひとつのクラスの課題論文で日本での廃娼運動を取り上げたことがきっかけで、米国で売春撲滅運動も推進した女性組織—Woman's Christian Temperance Union—をテーマとして博士論文を書くことになった。シルバーバーグ先生のクラスは、多量な一次文献と難解な理論を読まされ授業中には名指しで質問が飛んでくる大変厳しいものであった。しかし、どんな資料、事象、話題でも研究対象として扱おうとする先生の斬新なアプローチは大変刺激的であり、専門の異なる歴史学専攻者のみならず、文学、人類学、社会学などを専攻する多様な国籍の学生たちが席を並べていた。また、ロサンゼルスという土地柄もあり、先生のもとには、日本からアメリカを訪れる様々な職業の知識人が立ち寄り、その方々を囲んで色々な会合が開かれていた。

留学生生活を始めて 1~2 年の間、外国留学生のほとんどいないアメリカ史専攻者たちの間ではなかなか居場所を見出せなかった私にとって、シルバーバーグ先生の周りに広がる日本語も通じる研究空間はオアシスのようでもあった。実際、先生のクラスを 2 つ履修したくらいでは、難解な理論を駆使して繰り広げられる議論には到底ついていけなかったが、それでも、時には聞き慣れた言葉で、少なくとも聞いたことはある人や事実について言及されるのを聞いていると、なぜかほっとすることができた。色々な国籍や専攻の学生たちが集まる、このシルバーバーグ先生を中心とする研究空間には、どのような背景を持っていようとも集まって来る人々を内包してくれるような大らかさがあったように記憶する。私が、思い出だけでも胃の痛くなるような UCLA での最初の 3 年間でなんとか生き延びることが出来たのは、この空間で出会った人々からもらった友情と笑いに負うところが大きい。

その後、シルバーバーグ先生がスタンフォード大学の研究員として UCLA を留守にされたこともあり、先生とのつながりは少しずつ疎遠となってしまった。今から思うと、私が先生とゆっくりお話する最後の機会となったのは、ソーテル通りのお寿司屋で、楊秀珠（ヨン・サン・チュウ）さんと 3 人で夕食を共にした時のことである。楊さんが香港の大学に職を得たことを、私がやっとのことで分野の筆記試験をパスしたことを報告すると、シルバーバーグ先生はとても喜んでくださった。そして、10 年余りの月日が過ぎた 2007 年の夏、シルバーバーグ先生を訪ねたサンタモニカの病室で、私は、楊さんを始めその昔先生を通して知り合った友人たちにも再会した。私にとって、シルバーバーグ先生は、知識やインスピレーションと共に人間味あふれる多様な研究者たちとのつながりをもたらしてくれる師なのである。



## シルバーク先生の思い出

水野宏美

ミリアムのメモリアル・サービスで述べた言葉を、「シルバーク先生の思い出」と題してここに記させてもらいたい。

ミリアムが亡くなって以来、いろんな人から彼女の思い出話を聞いた。エネルギーで、ユーモアに富んでいて、美術にも大衆テレビ番組にも政治にも精通したマルチ知識人なのに子どものように純粋にはしゃぐ、等々。私のはちょっと違う。私の学生時代の友人達は共感してくれると思うが、彼女のもとで大学院生だった私には、「シルバーク先生」はとにかく怖い存在だった。ゼミでは毎週、彼女の「What is the problematic here?」「What do you mean by that?」攻撃に冷や汗をかき、かといって何も言われないと逆に恐れが増した。たまに優しい言葉をかけられると、妙に戸惑った。もちろん、いつもしゃちほこぼっていたわけではない。ミリアムの最後の本『Erotic Grotesque Nonsense』の原稿の整理を手伝った一年は彼女のオフィスでいろんな話をした。それでも彼女が怖い存在だったのは変わらなかった。あの迫力の源は何だったのだろう。

忙しい彼女との時間を確保するために、学生達はみなそれぞれ役割のようなものがあったようだ。私は何故かいつもミリアムを空港に車で送る役だった。ゲートまで送って(9.11以前)、搭乗までの待ち時間に私の論文のコメントをもらう。彼女はいつもとても丁寧に学生の論文を読みコメントした。就職活動時に書くカバーレターを何度も何度も読み直し書き直したのも、LAXの空港でミリアムと行った作業だった。怖い先生から空港へ送って欲しいという電話があると、すぐに車を飛ばしたものだ。

ミネソタ大学での就職が決まり、自分も教授職についたとはいえ、彼女が怖い存在であることは変わらなかった。ある時、電話で連絡を頻繁にとらなければならないことがあった。ちょうど一人目の子が生まれ、本の執筆が進まなかった頃である。ミリアムは赤ちゃんがどうしているかよく尋ねてくれた。朝早く起きてきて困るので分厚いカーテンを作ろうと思うなどというくだらない話をしたら、次の電話でミリアムが「あの大切な仕事、終わったの?」と尋ねてくる。本の原稿のことだろうか、それとも何か頼まれたことがあったらどうかと、緊張して汗ばむ手で受話器を握りながら考えていると、「赤ちゃんの部屋のカーテン!」と思ってみなかった返事が返って来た。家族生活を充実させるのが最優先だと力説するミリアムに、とても意外な感じがしたものだ。彼女がとても母親思いなこと、彼女の私生活がいつも幸せなときばかりではなかったこと、すでに体の不調を訴えていたことなど知っていても、ミリアムから仕事よりも私生活を優先しろと言われるとビックリした。それほど彼女は私にとって「怖い先生」だったのである。

娘が6ヶ月になった時、ミリアムに会わせたくて久しぶりにロスに戻った。人見知りをしたことのない赤ちゃんなのだが、親のサブリミナルな緊張が伝わったのか、ミリアムの前では泣いた。戸惑ったミリアムは、キティーちゃんの顔の形の大きな枕を持って来てくれた。おみやげだと言う。顔を裏返すと枕がお昼寝セットに変身する、キュート&コンパクトの究極日本製品だ。ありがたく手に取ってよく見ると、犬の噛み跡がたくさんある。どう考えて

も、ミリアムの愛犬が使っていた枕に違いない。一人目の赤ちゃんの母親はたいてい清潔さに敏感である。それまでだらしく生活して来た私も、娘の使うものを日々熱湯消毒し、週に何回も床掃除をしていた。噛み跡のある枕を見て、正直とても戸惑った。娘の顔を見て、さらに戸惑った。しかし、怖い先生の好意を拒否するなど恐れ多くてできることではない。丁寧にお礼を言って、ミネソタまで持って帰った。

それから4年間、娘は毎日このキティーちゃん枕で寝ている。もしかしたらミリアムのように鋭い分析力を持った、頭のいい子に育ってくれるかもしれない。ミリアムのように強い問題意識を持ったフェミニストに育ってくれるかもしれない。ミリアムのように母親孝行な娘になってくれるかもしれない。ミリアムが亡くなった3月は、私の母の一周忌でもあった。私の人生を形作った二人の女性が逝った3月は悲しい月である。しかし、メソメソばかりもしてられない。

娘の寝顔を見ながら、「What is the problematic?」という声が聞こえる（ような気がする）と鞭打たれたようにイソイソと仕事部屋に入る私である。



#### ミリアム・シルバーバーグとアメリカ、韓国に於ける朝鮮学研究

ジンキュン・リー

故ミリアム・シルバーバーグ教授と最初に知り合ったのは、私が UCLA (カリフォルニア大学ロサンゼルス校) の大学院生だった頃、彼女のゼミを取ったことがきっかけです。その頃、1990年代の初期には、アメリカの大学で常勤の朝鮮学研究者を雇っていた東アジア研究学部はたいへん少数でした。大きな総合大学でも朝鮮学研究者のための新しいポジションが作られはじめたのは、1990年代の終わりから2000年以降でした。このように朝鮮研究が分野として確立していたとも言えない1990年の初期、ミリアム・シルバーバーグは、世界的視野から見て、また地域研究の対象として、朝鮮の歴史・文化の重要性を認識していた先見の明のある学者のひとりでした。UCLAでは、2007年に彼女が退職するまで、彼女の大学院生向けの近代日本史、日本文化ゼミは朝鮮研究専攻の院生たちの間でたいへん人気がありました。なぜなら、彼女のゼミを取ることによって、朝鮮研究に関するさまざまな問題を、日本、中国、西洋のモダニティーと歴史的に関連づけて再考察することができたからです。殊に若いフェミニストのアジア史、アジア文学研究者は、彼女の研究の方法に強く惹き付けられました。彼女たちは、ジェンダーとセクシュアリティを植民地、あるいは半植民地、帝国主義的モダニティー研究の中心に据えて考察するシルバーバーグ流アプローチを新鮮な驚きをもって学んだのです。私たち院生はゼミを通じて、また彼女の研究室の外の廊下で質問をするために列をつくって待っている間、知的交流をし、連帯の絆をつくっていきました。言うまでもなく、彼女の存在なしではこのように有意義な学者仲間の交流はなかったでしょう。こういうわけで、私たちの博士論文や本は、ミリアム・シルバーバーグ独特の「概念化」の方法の痕跡を留めているのです。

私がシルバーバーグ教授の研究が思っていたよりもさらに大きな影響力を持っていることを感じはじめたのは、大学院卒業後、アメリカから遠く離れた韓国で朝鮮文学を教えていた2000年頃でした。その頃、韓国の学界では、ジェンダーと植民地的モダニティーについての研究ブームとも言える現象が起こっていました。やっと大きく成長してきた韓国のフェミニズム、以前の研究に顕著であったナショナリスト的視点への批判、学界における国際交流（殊に、韓国、日本、アメリカ相互の交流）の活発化といった要因はこういった新しい研究の発展に貢献しました。こういった中で、ミリアム・シルバーバーグが韓国のフェミニスト研究者たちに与えた影響には、深いものがあつたと思います。シルバーバーグ教授の研究は、その他の要因と関連し合つて、韓国のフェミニストの学者たちを、今まで顧みられなかった史料の発掘へ、また、ジェンダー、階級、植民地的・帝国主義的近代、大衆文化などを関連させ、理論構築しなおす作業へと誘つていったのです。

教授の業績については、他にもお話したいこともありますが、この短い稿では、アメリカと韓国に於ける朝鮮学研究への教授の貢献に限って要約して述べました。最後に、シルバーバーグ教授がまれにみる卓越した教師であつたことに言及したいと思います。彼女は、学生たちに、歴史的考察が素晴らしく知的高揚を促すものであること、ものを書くことが政治的な行動であること、まだ若い学者の卵でしかなかった私たちに、寛大な態度で、それぞれの研究分野でりっぱに貢献できることを教えてくれました。ミリアム・シルバーバーグは教師として、現在アメリカのさまざまな大学で教鞭を取り、朝鮮文学、文化、歴史を教えている学者たちの多くを育てました。今後育つてゆく世代の学者の方々にも、彼女の学者、教師としての精神を受け継いでいただき、共に発展させていくことができるよう心から願っています。

(翻訳：寺澤由紀)



#### 感情労働者としての教授：ミリアム・シルバーバーグの場合

..... Chung, Haeng-ja (チョン・ヘンジャ)

私は、UCLA のキャンパスの南端から伸びるウェストウッド・ブルーバードの東側にミリアムが買ったマンションを訪ねたことが何度もある。ワークショップの参加者らとそこに泊めてもらったこともある。ロサンゼルスを東西に横切る二大目抜き通りのサンタモニカ・ブルーバードとウィルシャー・ブルーバードの間に位置する閑静な住宅街にあつたマンションのリビングルームは、天井が高く広々していた。しかし、大きなダイニングテーブルセットやソファ、テレビ、そして数々の本やビデオでいっぱいだった。視力の衰えを補うため、手狭になったリビングには、いつしか舞台上で使われるようなオレンジ色の背の高い電気スタンドが置かれるようになった。その煌煌としたライトで書類を照らしながら、眼鏡を鼻の半ばまでずらしたミリアムが、「この読み手は、私が言おうとしていることがよくわかってない！」と息巻いた姿が今も鮮明に記憶に残っている。というのも、筋肉の動きが悪く体力も



落ちてきたと心配していたが、気合いの入った怒り方にちょっとほっとしたのを覚えている。

ミリアムは、パーキンソン病によって体の動きがだんだん不自由になってくることを想定して、洋服の着脱を袖をくわえて助けたり床に落ちたものを拾ってくれる介護犬として、日本では珍しい大型プードルの雄をマンションで飼い始めた。バスターと名付け、子犬の時から飼い始めたものの、元気に走り回る立ち居振る舞いが子犬っぽいだけで、体の大きさは既に成犬だった。私がバスターと初めて対面したときに嬉しそうに飛びかかってきたバスターに押されて、私はよろけてしまったほどだ。

私の見た限りでは、バスターは体の動きを補助する介護犬としてよりも、ミリアムの心を癒した功績の方が大きいような気がする。「バスターは私の気持ちがわかるのよ。私が泣いているとそばに寄ってきて私の涙を必死で舌で拭ってくれるのよ」とミリアムが言っていた。ミリアムが自らの病のことや将来への不安を語りながら泣き出すと、バスターが駆け寄ってきて、困ったようにクンクン鳴きながら鼻先をミリアムの顔に近づけ必死でペロペロとミリアムの涙を拭おうとする姿を見たのも一度ではない。

2007年に、ミリアムが入院したロサンゼルス病院に見舞いに行ったとき、体の動きが不自由になってベッドに寝たきりになっていたミリアムの枕元からも見えるように、引き延ばされたバスターの写真が病室の棚の上に飾られていた。私がバスターとの思い出を語り始めると、パーキンソン病の進行によりほとんど無表情に見えたミリアムの目が笑ったようだった。

UCLAの歴史学部の教授であったミリアムは、私が2004年にUCLAの人類学部に提出した博士論文、*Performing Sex, Selling Heart: Korean Nightclub Hostesses in Japan* (『性労働と感情労働：日本のコリアンホステスたち』)の指導および審査をする委員会の学部外メンバーであった。「女給」や「日本の中のコリアン」に関する歴史的研究もしたことがあるミリアムは、女給の現代版ともいえる「ホステス」と「日本の中のコリアン女性」を、「感情労働」という理論概念で分析しようとする私のプロジェクトにも興味を持ってくれ、二人で議論したことも何度かあった。

「感情労働」は、カリフォルニア大学バークレー校の社会学者、アーリー・ホックシールドが、航空会社の客室乗務員への調査をもとに理論化の端緒を築いた。感情労働の簡略な定義は、自分の感情をコントロールし、相手の感情もマネッジすることだ (Hochschild 1983)。感情労働という概念は、社会学にとどまらず、女性学、経営学、心理学、教育学、人類学でも使われるようになってきている。こうした研究は、様々な職業や役割の中に埋め込まれて見えにくくなっている「感情労働」を可視可させ分析している (Guy et al. 2008, Steinberg et al. 1999)。そして、大学教授も「感情労働者」たりうると看破した論文も表れてきている (e.g., Zhang et al. 2008)。私にとってミリアムは「感情労働」を効果的に行った教授だった。

ミリアムは、学問的な内容だけでなく、学生である私の心の状態にも気を配ってくれた。私は2001年にフィールドワークから帰ってきた後、自分が集めたフィールドデータに圧倒され、博士論文の執筆は思うように進まなかった。自己嫌悪に陥り、更に書けなくなるという悪循環に陥ったことも一度や二度ではない。そんな私に「へんじゃ、私に毎週一回、博士論文のプログレスレポート（進捗報告書）をメールするっていうのはどう？」とミリアムが持ちかけてきた。プログレスレポートがどのように役に立つのか当初はピンとこなかったが、葉をもすがる思いだった私は、半信半疑でプログレスレポートなるものを書き始めた。博士論文執筆は孤独な長丁場の作業で、時には、羅針盤を失って大海原に放り出された小舟のように、自分がいったいどこに向かっているのかわからなくなる。プログレスレポートは、そうした「孤独」「方向感の喪失」「徒労感」といった鬱々としたネガティブな感情を、一週間に一度リセットするきっかけを作ってくれた。自分では一向に進んでいないと思っても、一週間、何をしたら書き出してみると、けっこう色々やっていることもわかった。そして誰かが、私の博士論文の進み具合を気にかけ、どんな状態にいるのかわかってきているという実感が、孤独感を和らげてくれた。既に病の影響でパソコンでタイプすることも容易でなかったミリアムからのコメントは最小限だったが、ミリアムは私に会った時、「でも、プログレスレポート、ちゃんと読んでるからね」と伝えてくれた。私には、その一言で十分だった。

面と向かって話す機会がある時は、学問的なことであれ、学問以外のことであれ、ミリアムと私は議論することがしばしばあった。ミリアムは私の言っていることに同意できないときには、はっきりそう言い、議論は継続する。私も同意できないときには反対意見を述べた。どちらの場合も、ミリアムから鋭い質問がとんでくることが多いのだが、私の答えに納得した時は、潔く「なるほど」と私の意見を受け入れてくれた。そうでなければ議論は継続である。また私のさまざまな質問や疑問にも、自分の経験を踏まえて真摯に答えてくれた。こうしたやりとりが、私のミリアムへの信頼のベースになっており、ミリアムが私にとって素晴らしい「コーチ」でもあった所以だ。

選手の心身の状態を把握し、アドバイスしたり、励ましたり、時にはしかったりしながら、選手が自分の能力を最大限引き出せるようにするのが理想的なコーチではないだろうか。コーチは選手の代わりに競技会に参加することはできないのと同様、博士論文執筆も、結局、大学院生自身が自分で書くしかない。方向を見失ったようなスランプ中の選手なり院生が、自ら、再び練習したり書いたりできるようにするのが、理想的な指導者であるが、そうある為には、選手や学生の心への配慮を忘れてはならない。

「コーチ」としてのミリアムは、プログレスレポートの一番の読者は私自身だということと、その心理的効用をよくわかっていたような気がする。つまり、悲観的になりがちな私が、プログレスレポートを書くことにより、「この一週間にできたこと、できなかったこと」を整理し、次に何をしたら良いかの指針になり、否定的思考から解放されるようにと考えていたのだろう。ミリアムは、日本史や女性学といった専門分野を教えるだけでなく、この学生には、どんなやり方が有効なのか、心を砕いて考えてくれていたような気がする。

ある詩人が「とても感情豊かだ」と感嘆したミリアム・シルバーバーグは、人間的な情感を持ちそれを表現しつつ、研究者としての頭脳明晰さを兼ね備えた希有な人だった。

研究と教育は、教授の大切な仕事であるが、往々にして専門分野を教えることだけが、大学や大学院での「教育」と思われがちである。しかし、「教えて育てる」のが教育なら、教えっぱなしでなく、育てているかにも気を配るべきではないだろうか。ミリアムは、研究と「教えて育てる」教育を実践していた、私にとってのロールモデルだ。

#### 参考文献

Guy, Mary E., Sharon H. Mastracci, and Meredith A. Newman. 2008. *Emotional Labor: Putting the Service in Public Service*. Armonk: M. E. Sharpe.

Hochschild, Arlie. 1983. *The Managed Heart: Commercialization of Human Feeling*. Berkeley: University of California Press.

Steinberg, Ronnie J. and Deborah M. Figart eds. 1999. *Emotional Labor in the Service Economy*. Thousand Oaks: Sage.

Zhang, Qin Zhang and Weihong Zhu. 2008. "Exploring Emotion in Teaching: Emotional Labor, Burnout, and Satisfaction in Chinese Higher Education." *Communication Education* 57:1 (105-122)



ミリアム・シルバーバーグ氏を偲んで

中川成美

こうやってロスアンジェルスにやって来て、ミリアム・シルバーバーグさんの追悼会に出席していることが、いまだ現実感をともなって考えることができません。今年の2月から3月にかけての彼女の容態については、ここにいらっしゃるマイケル・マーラさんや玉野井麻里子さんから逐次うかがっておりました。その時に、彼女の最後に会いたいという気持ちと、変わってしまった彼女を見たくないという気持ちの両方が交錯して、複雑な気持ちになったことを覚えております。私の知っている限りでの日本でのミリアムの友人たちに連絡を取り、状況を知らせましたが、みな一様にどう考えていけばいいのかについてわからないままに、ただ状況を見守るしかないという気持ちを共有しました。

彼女の死を看取ることもなく、その気持ちを持続したままに本日ここに立ったわけです。

彼女との交遊が始まりましたのは何時であったかが実ははっきりしません。「Changing Song」という卓抜した中野重治論を書いた研究者としてはその本が出た時から知っておりました。たまたま、私の友人の林淑美さんたちが翻訳することになって、そのわずかなお手伝いをしたことから、彼女とやりとりを始めたのではないかと思いますが、実物の彼女に出会ったのは、1996年か1997年のAASではなかったかと思えます。その後、1998年11月2日から4日迄立命館大学国際言語文化研究所の10周年記念の国際シンポジウムに海外ゲスト

ト・スピーカーとして、トリン・ミンハさん、ギアン・プラカーシュさんなどとともに来日された時、一緒にシンポジウムを過ごし、親しくなっていました。ミリアムさんと私はほぼ同じ年齢で、同じ世代をすごした共通感が、あまり時間をかけずに仲良くできた原因ではなかったかと思います。簡単にいってしまえば、「気があった」ということになります。この会議は「21 世紀的世界と多言語・多文化主義—周辺からの遠近法—」と題されたものですが、その概要は現在「20 世紀をいかに越えるか—多言語・多文化主義を手がかりにして」(平凡社・2000 年) になっていますが、残念なことにミリアムの論文は収められておりません。なぜなら、このときのミリアムの発表は最後の著作となった「エロティック・グロテスク・ナンセンス」の骨子となるものであり、日本語とはいえまとめるまえに発表はしたくないということで、私たちは収録をあきらめました。このときのすぐれた発表と、ユーモアにあふれた彼女の生き生きとしたすがたが思い出されます。思えば、この前世紀末に行われた会議での予測は半分は当たり、半分は失われてしまいました。あたったのは暗い植民地主義的思考から継続する戦争の予測であり、失われたのはそれを克服する希望です。

私がアメリカに行く時や、彼女が日本に来るときには必ず会っていました。ミリアムの美質の最たることは、率直であることですが、会ったとたんにもすぐ核心の話から始められるのは、私にとって大変楽でした。また、彼女が来日したときには、日本滞在時のたくさんの幼な馴染みの友人たちに囲まれて、とても幸せそうで、また彼女のことを大事に思う多くの友人たちがいることに、私まで嬉しくなりました。

2002 年から 2003 年にかけて私はスタンフォード大学で教えていたのですが、このときも彼女がサンフランシスコに来てくれたり、私もマイケル・ボーダッシュさんが UCLA の研究会に呼んでくださったりで、行き来しました。電話、メールはもちろん、頻繁にかわしました。いま、思えば徐々に手が動かなくなってメールが面倒臭くなってきたのではないかと思います。電話は本当に好きでした。

そのときに生涯忘れられないことに彼女と、私の家族との 3 人のラスベガスへの旅があります。彼女は UCLA 出版との本の打ち合わせでサンフランシスコに来ることは事前から約束していました。米山リサさんとタック・藤本さん夫妻もその時スタンフォードに滞在中で一緒に会いませんかなどと話していたのですが、突然に電話でミリアムが「出版の話がうまくいったから、お祝いしないか」と言ってきました。勿論ということで、パロ・アルトかサンフランシスコでセティングしようと申し出たところ、「いや、私はラスベガスに行きたい」と言い出したのです。ちょっと、状況をつかみかねて「どうして?」と聞きましたら、「理由は無い。行きたいから行くの」という答えでした。実は私はラスベガスの俗悪さは聞いており、もっとも行きたくない町の一つでした。

さて、どうしようかと友人たちにも相談したのですが、明日には出発という予定はあまりに無茶でした。ただ、私はサバティカルの最中で、もう少しで日本に帰るところで身軽ではありました。そしておりしも 2003 年 3 月 19 日で、もう少しであの忌まわしいイラク戦争が始まる前夜でした。この時期に一人ではいたくないという気持ちから彼女と行くことにしました。至急に 3 人分のホテルをとり、自分たちの航空券をとりと大忙しで準備して、ラスベガスの空港で彼女と待ち合わせました。にこにこしながら彼女と出会い、早速にホテル・パリスに入りました。しかし、結局は部屋で一日中、テレビで戦争が始まる瞬間を見続けました。彼女がブッシュの顔を見ながら「変な顔、目が小さいね」といったときには深刻

な状況にも関わらず一同、爆笑でした。刻々と迫りくる戦争の瞬間というのは恐怖です。しかし、ミリアムはユーモアと叡智で切り抜けてくれました。

おいしいものも食べ、小さな賭けもして、すっかりくつろいでこの小さな旅は終わったのですが、帰りの空港で、また得難い体験をしました。ミリアムはその時、やはり記憶力が落ちていたのか、帰りの航空会社をまちがっていて、違う航空会社のカウンターにいてしまい、乗客名簿に名前がないことを知らされました。その時に感動したのは、彼女の行動力です。少しの迷いもなく、すぐに高額な航空券を購入して、いとも優雅に職員に車いすをもって来るように命令して、女王様のようにゲートにはいりました。私たちの出発時間は違っていたので、大混雑のバーにはいって飲み物を注文したのですが、一向に注文にもきません。ようやく来た時には出発時間がかなり迫ってきていました。それでも尽きない話を一生懸命に続けていましたら、(ともかく戦争が始まってしまっていましたから話すことはたくさんありました)、もう搭乗時間ぎりぎりでした。会計をいくら頼んでも、ウェイターは来ません。お金をおいていこうかとメニューを見ましたら、ミリアムの頼んだのはメニューにないものでした。さて、どうしようと困っていたら、ミリアムが「逃げよう」と車いすから立ちあがったのです。車椅子を放り出して、私たちは笑いをこらえながら店を出ました。少し、小走りにいったところで、全員たちどまり、本当に大笑いしました。飲み逃げという初めての犯罪をおかした、この一行はなぜこれがこんなにおかしいかをよくわからないままに笑いつづけて、ゲートへと走りました。そうです、ミリアムも走っていたのです。

いま、このことを思い出すとおそらくはずっと優等生で生きてきたミリアムが初めて子供のようないたずらをしたことの解放感、想像にあまるほどのことではなかったかと思えます。そして、私もまたこの不思議な犯罪体験をいつも思い出すたびに、懐かしく貴重に思えてならないのです。ですから、いつか自分の生が終わるころにあのラスベガスの空港に行つて、ミリアムと私たちの飲み物代を、あのバーにそっと置いてきたいとも思っています。それまで私たちの自由な認識という空間が保障されたことへの感謝として。

数限りないミリアムとの思い出は、私の貴重な財産です。誰にもわたすことのないこの思い出を、皆さんとわかちあうことで、ミリアムへの追悼としたいと思えます。今日はまりこさんはじめ、UCLAの方たちの会のご準備、また呼んでくださいましたことをこころから感謝申し上げます。また、こうやってミリアムを軸とする友人たちの温かい心に触れることができ、殺伐たる日本の現実に生きる私にとって得難い時間となりました、これもお礼もうしあげます。最後にここに来れなかった多くの日本の友人、林淑美、西川長夫、鶴見俊輔、西成彦、保科孝夫、実吉利彦、木村美和子、瀧澤武、佐俣秀樹さんたちからの深い哀悼の意をお伝えしたいと思います。

ミリアムの笑顔が浮かびます。

(2008年10月3日UCLA・ロイスホールでのミリアム追悼会でのスピーチから)



ミリアム・シルバーバーグの思い出

寺澤由紀

私がミリアム・シルバーバーグと密に接していたのは、1990年代の前半の数年間、彼女がアメリカ東部のリベラル・アーツの大学からUCLAに移動してきて間もない頃だった。都会に引っ越して来れたのがとてもうれしそうで、ロサンゼルスでの生活を水を得た魚のように楽しんでた。この頃に出た彼女の一冊目の本は、中野重治の「転向」を新しい角度から論じたものであったが、日本研究の分野で高い評価を受け、権威ある賞を受けた。自らの博士論文を基にしたこの本を出版した後、彼女は、この時期の新しいトレンドであったカルチュラル・ヒストリーの方法や、従来の「女性史」研究とは違う「ジェンダー」研究に興味を持つようになる。<sup>注</sup> また同時に、人種・民族をめぐる理論や植民地研究を視野に入れ、カルチュラル・ヒストリーのなかでも大衆文化、ビジュアルな表象を分析の対象とする研究のやり方は、私たち大学院生にとってもたいへん魅力的で、刺激的なものであった。当時は、近現代日本史以外にも、中国史、朝鮮史、東アジア各国の文学・映画研究専攻の大学院生が彼女のまわりを集まってきて、ゼミ、勉強会、学会などみんなで積極的に参加したり、催したりした。

彼女がユダヤ系であったことは、彼女が研究をすすめていく上でも、プライベートな生活の中でも、大事な要素だったと思う。彼女にはユダヤ教のシナゴグに定期的に行くような深い信仰心はなく、どちらかというと宗教にそれほど関心がない人であったようだ。しかし、ユダヤ系アメリカ人の文化の伝統は引き継いでいて、私が大学院一年目の12月に、ユダヤ教のお祭りのハヌカのパーティーを大々的に開いて私も呼ばれた。彼女にとってはクリスマス・イブやクリスマスは関係ないらしく、その間ずっと研究の仕事をしていた。それを見て私は、「多文化共存のアメリカ」を間近に感じたのであった。もともとユダヤ系アメリカ人の食べものであるベーグルというパンを売っているお店にもうるさくて、家の近くにベーグル屋があつてまあまあおいしいのだけど、本格的 (authentic) というにはちょっと、ふわふわ (fluffy) しすぎている、などと言っていた。それから、キュウリのピクルスは、「ハーフ・ディル (中くらいに浸けた歯ごたえのあるやつ)」を買うのがこつ、などということも教わった。食べもの話ばかりだが、彼女は人生を楽しむことを知っていた人で、食べる事も、おしゃれも、友達関係も、おそらく恋も精力的に楽しもうとしていたのだと思う。パーキンソン病を患っていた晩年にも、リハビリのために滞在していた老人ホームに、新鮮でおいしい蟹料理をデリバリーでとって、ホームでの友人やわたしに盛大にふるまってくれたりした。

彼女の生い立ちを聞くと、アメリカ国務省の外交官の娘として東京で育ったそうで、ティ

<sup>注</sup>ちなみに、1990年代の終わり頃から2000年代にかけては、「ジェンダー」ではなく「女性」に焦点を当てた研究方法が再度見直されてくるが、このニューウェーブは、シルバーバーグ教授の業績とは直接関係がない。

ーンエージャーの頃の日本での思い出には、結構つらいこともあったらしい。うわさによると、はっとするほど可憐で美しい娘時代の写真が残っているというが、彼女は日本で若い時「化けものって言われてた」とぼろっと私にこぼしたことがある。背の高い「ガイジン」の娘が、1960年代の日本で、どういう差別やいじめに会ったのか、今となっては知る由もないが、「異分子」として疎外された経験によって、彼女が心の傷を負ったことは確かであると思う。そして、この原体験とユダヤ人としてのアイデンティティが、後に、修士論文で、関東大震災時の朝鮮人虐殺をテーマとして取り上げることにつながり、さらに、人種・ジェンダー・階級をめぐるポリティクス研究へと発展したのではないだろうか。また、子どもの頃につらい経験をしたからこそ、情の細かい人になったのかもしれない。友人や教え子の学生、院生に対しても同情心が篤く、やさしく接することも多かったが、反面、激しい感情をぶつけられることもあり、私にとっては、「すごくやさしくて、すごく難しい人」だったと言えるかもしれない。

それから、今も忘れられないパーティーの思い出があるのでそれも書いておきたい。まだノーベル賞を受賞する前であったが、大江健三郎がUCLAにゲストスピーカーとして招かれたことがあった。大江さんは、戦争と自身の子どもの時代の体験をポエティックに語り、シルバーバーグ教授と言語学専攻の院生の通訳を通して聴いたUCLAの学生にも大好評だった。講演のあった日の夜、彼女は、自分の院生を「特別作業班 (task force)」として「編成」して、料理やその他の準備に当たらせ、自身采配を奮って、自宅でホーム・パーティーを開いた。メニューは、オレンジ・チキン、タブーリ (中東料理のサラダ)、その他アペタイザー、そして、シルバーバーグ教授曰く「エレガントなデザート」、苺のチョコレートフォンデュであった。UCLAその他の大学の著名な教授陣や、院生や、また彼女の個人的な友人も招待されており、国籍も、人種も、年齢も、研究テーマもさまざまな研究者の気の置けない集まりだった。英語、韓国語、日本語と多様な言葉が飛び交い、それでいてリラックスした雰囲気、しかも知的な刺激にあふれていた。宴もたけなわになった頃、大江さんは、朝鮮の伝統舞踊を披露され、私の横で見ていたコリアン・アメリカンの友人は、「彼は踊りのリズムを完璧にマスターしているわ」と絶賛した。夜更けまで続いたパーティーは楽しかったが、シルバーバーグ教授のお宅は、わりとふつうのアパート・ビルの二階の一角にあったので、当然ながら、下の人が「うるさい」と怒鳴り込んで来てしまった。しかしその後も、結局宴も踊りもやめることもなく、ただ、朝鮮伝統舞踊のハイライトの足踏みのところだけ、「軽く」踏むことにして続いたのだった。それから階下の住人も二度と文句を言いに来なかったことを考えると、一夜限りだと観念してあきらめたのだろうか。次の日、シルバーバーグ教授は、ロサンジェルス大暴動後の爪痕をいまだ深く残すロスの町を、大江さんの後学のためにと朝早くから彼を車に乗せて案内し、日本行きフライトに間に合うように飛行場へと急いで向かったようだ。

この時の思い出は、シルバーバーグ教授に関しての数多くのエピソードのなかでも、私の中で燦然としている。彼女のセンスのよさ、ウィットとユーモア、ホスピタリティ、さまざまな人に対するオープンな態度、研究に対する真剣さ、人種差別や貧困その他の社会問題に対する関心、さらに、度胸がすわっているところなど、どの点でも最高に素敵だった。短く激しく燃え尽きたような彼女の人生であったが、素晴らしく幸せな瞬間が何度もあったに違いない。その輝いていた時の片鱗を共有できたことは、わたしにとってかけがえのないこと

だったと言えるかも知れない。



ミリアムさんとやよりさん

大越愛子

ここ一年間、日本軍性奴隷制を裁く「女性国際戦犯法廷」(以下「法廷」)の意義と「法廷」を構想した松井やよりさんの足跡について考え続けている。彼女のフェミニスト・アクティビストとしてのすごさは、その生前中にも事あるごとに感じてはいたものの、身近におられる安心感からか、やはり十分には理解できていなかったと思う。

2002年12月にやよりさんが早すぎる死で、その意義深い人生を終えられた後、彼女の思い出を『女性・戦争・人権』第六号で特集したが、そこに寄稿してくださった中の一人が、ミリアム・シルバーパークさんだった。その時の追悼文の多くは、やよりさんの個人的思い出が多かったが、ミリアムさんの文は、やよりさんの成し遂げた仕事の世界的意義を端的に指摘されていて、感銘深いものだった。その冒頭の一部と締めくくりをここで紹介したい。

「女たちが集い、また男たちも集わん。松井やよりさんの思い出を胸に、人々は集うことでしょう。それは、松井さんが創設に貢献した共同体が、ハルモニたちの歴史の証言者として、東京にまたハーグに集まったときのように。それは、200名を超えるUCLAの関係者が、松井さんによる東京法廷の報告を聴きに集まったときのように。ロサンゼルス聴衆には、ジェンダーの不公平性を研究する学者のほか、アジアの各地域を研究する学生、教授が集い、その範囲はまさに大日本帝国の勢力範囲におよぶものでした。」

「戦争の足音が聞こえるここアメリカ合衆国にあって、ジャーナリスト、著述家、フェミニスト、地球市民、そして、友人、松井やよりが残したもっとも大事なメッセージを、わたくしは、今、これまでになく、認識しております。それは、われわれは過去に対して責任があるように未来に対しても責任がある、という彼女の信念です。」

私がミリアムさんと初めてお会いしたのは、確か「法廷」の二日目だった。彼女の方から声をかけてくださったのだが、日本文学研究者として私の日本文化批判、仏教批判に関心をもっていると言われて恐縮したのを覚えている。

追悼文でミリアムさんが指摘してくださったように、「法廷」は、松井さんが創設に貢献した、新しく誕生した開かれた共同体だった。共同体といっても画一的なものではなく、各地域の被害女性たち、支援者たち、そして加害国日本の女性たち、加害の証言を志した元兵士、国際法に詳しくかつ従来のものを越えた法を創設することに意欲的な国際的な法律専門家たち、国境を越えて集まったフェミニスト、アクティヴィスト、ジャーナリスト、研究者、さまざまな形態のボランティア、警備を買って出た活動家など、まさに種々雑多な人々が、「日本軍性奴隷制の被害実態を明らかにし、加害者を裁く」という目的に向けて結集したの



だ。その中にミリアムさんも、私もいた。

判決を聴いた時のミリアムさんの感動は強いものであり、その場で彼女が「この判決には critical race theory が取り入れられている」と言われたことが印象的だった。彼女は、「法廷」が過去の被害と加害の実態を暴き、それを裁くのみならず、さらに普遍的な観点で、被差別の女性に対する暴力を自然視していた近代から現代に至る植民地主義、家父長制、国家ナショナリズムなどの構造的暴力を裁くものであることを指摘されたのである。

それは、1990年代に日本の戦争責任が厳しく告発された時、「女性のためのアジア平和国民基金」(以下「国民基金」)の創設で責任回避をした日本政府や右翼ナショナリズムの興隆に対して、「ジェンダー正義」「植民地主義の総決算」「家父長制暴力撤廃」という普遍的観点から、世界の女性運動と連帯した「法廷」を構想し、実現したやよりさんの志と深く共振したものであったに違いない。ミリアムさんは当時から、この画期的な「法廷」に対するすさまじいバックラッシュを危惧されており、それに負けないためにと「法廷」を世界に紹介する活動に精力的に取り組まれた。

そうした活動の一環として藤目ゆきさん、北原恵さんとともに、私をもUCLAに招いてくださったのは、2003年5月だった。アフガン戦争が始まっており、空港のチェックも厳しく、靴を脱がされ、尋問されたことが腹立たしかったのを思い出す。アメリカで「愛国法」が施行され、ミリアムさんの危機意識は強烈だった。彼女が、西海岸でもユダヤ人差別をはじめとする人種差別は依然として根強いと言われたことを記憶している。

私たちがロサンゼルスに到着した夜、UCLAでアルハンディ・ロイの講演と反戦集会があった。ミリアムさんが誘ってくださって、私たちも聴衆に加わった。白いドレスを着たロイがカリスマ的で、学生たちや大学関係者の反戦の熱気は感じとれたが、やはり少数派だったことは否めない。

そんな時代だからこそ、松井やよりさんの構造的暴力との闘いというメッセージが必要だとミリアムさんは思われたのだろう。UCLAの一角の中くらいの部屋で、私たちは各自の論点から日本の状況を発表した。私は日本の思想的文脈の中から、内向きの内面的な悪を追及はするものの、公的な責任を回避する傾向がむしろ正当化されてきた系譜と、それを打破する女性運動の意義について論じた。藤目さんのアジア女性史からの論点、パワーポイントを縦横に使った北原さんの日本の天皇制をビジュアル・イメージで解説する発表も好評で、熱心な質疑応答があったと記憶している。とはいえ、忘れていること、思い違いもありうるので、ぜひ指摘していただきたい。

楽しかった思い出としては、三人でミリアムさんの自宅に泊めていただいたのだが、夜遅くまで飲みながら色んなテーマで議論したことがある。確か私が酔っぱらって赤ワインのボトルを倒してしまい、大騒ぎしたこと。ミリアムさんはその頃すでにお酒を控えておられたが、そんな私たちをニコニコと受けて入れてくださったっけ。

ミリアムさんは、日本で育った時期の思い出、日本の文学や思想への思い入れ、そして日本の女性運動の軌跡や、やよりさんとの出会いなど色々語ってくださった。辛辣な日本批判もあったが、「法廷」を実現したアジアの女性運動を高く評価されていたと思う。

ロスアンゼルスにいたのは短期間であったが、その間にミルズ大学で全米の女性学の研究集会があり、ミリアムさんの薦めもあって、私たち三人も参加した。そこでアフガン戦争に

賛成したNOWの幹部が来ていて、彼女の報告に対して、イラクからの留学生が激しく批判し、議論が熱く盛り上がる場面があった。私たちが作ったブッシュのアフガン攻撃反対のピラを、発表者の一人サスキア・サッセンに渡して賛同を得たのも懐かしい。

滞在期間中、ミリアムさんの自宅で、ゼミナールの特別授業が開かれ、私たちも参加した。確か「ちびまるこちゃん」に見られる日本の家族関係がテーマで、学生からのまる子ちゃんのおかあさんが何故いつもイライラしているのかという質問に対して、日本の家族のあり方、性別役割分業、固定的な親子関係などへと議論を深めていかれる手法に感心した。その後は学生に混ざってのホーム・パーティで、おおいに盛り上がり楽しかった。

充実した日々を過ごした後別れの時が来たが、今後の研究のネットワークを固く約束した。その後、藤目さんが「アジア女性史」をテーマに科研をとってくださり、来日したミリアムさんと藤目さん宅で久しぶりにお会いした。私はアジアに関わった日本のフェミニストの軌跡、特に松井やよりさんや中原道子さんなど「法廷」に関わった方たちの思想の軌跡を跡づけたいというプランを提示して、お二人から賛同を得た。

今から思えば、それがミリアムさんとの最後の出会いだった。私は彼女たちに誓った松井やより論をまとめたいたいと思いながら、なかなか論点を絞りきれなかったが、昨今のネオ・リベリズムの暴走とそれによって世界が壊滅的打撃を受けたことを実感するにつれて、改めてやよりさんが闘ってきたものの正体が鮮明になってきた気がする。

彼女は日本の天皇制に体现される封建的な社会システムのみならず、それが延命のためにしがみついた新しいイデオロギー、いわゆるネオ・リベリズムの巧妙な構造的搾取体制の浸透を、アジアの女性たちの取材現場から鋭く感じ取り、それに対する警告を70年代から発し続けていた。当時衰退しつつあるマルクス主義に代わる新しい思想の登場と、大半の研究者やメディアが賞揚したネオ・リベリズムの「個人の自由」絶対化がもたらす自己決定・自己責任原則のトリックを、彼女はすでに暴いていた。その先駆性に今更ながら感服する。

やよりさんは、90年代後半に現れた日本の戦争責任を隠蔽する様々な言説、単なる右翼ナショナリズムのみならず、いわゆる良心的知識人による「国民基金」擁護も、構造的暴力を問題にせずして、被害者個人の救済にのみ問題を還元する点で、まさにネオ・リベリズム言説であることを見抜き、それを乗り越えるために「法廷」を構想されたのだ。

ミリアムさんは、そうしたやよりさんの世界的視野の中のネオ・リベ批判を高く評価されていた。やよりさんがアジアでえぐり出したネオ・リベ経済システムの構造的搾取が、ブッシュ大統領下のアメリカで猛威をふるう状況を、ミリアムさんは如実に感じ取られていたのだと思う。そして、やよりさんもミリアムさんも、ネオ・リベリズムの末路を既に予見されていたに違いない。

ここでミリアムさんからやよりさんに贈られた言葉を、今一度かみしめたい。

「われわれは過去に対して責任があるように、未来に対しても責任がある」。

私たちは過去に帝国主義経済で破壊された世界を再建するために、軍事主義が興隆した時代を知っている。その責任を未だ果たすことがないままに、過ちを再び復しようとする動きが見える。その過ちを繰り返さないことに関しては、私たちも未来に責任があることを再確認し、非力ながら、やよりさん、ミリアムさんの志を継承していきたいと思う。





## 戦争責任再訪：日本におけるのアウシュヴィッツ

ミリアム・シルバーバーグ

知識人は如何にして戦争に向かっているのか。私の最初の問いはすべてがあまりにも急速に進行したセプテンバー・イレブン（9・11）として知られるその事件から現れ出た。ここ合衆国でその日付を発することで祝われている他の唯一の日が7月4日（独立記念日）であることは偶然ではないのかもしれない。直線的な継続性を疑う歴史家でさえ、原因と結果についてのすべての解釈が、この日付をもっておぼろげになってしまったということに認めざるにちがいない。それが何年に起こったことだったかを表記することなく、関連する事件が歴史から取り出され、神話の界へと近づいていく。その界とは、愛国心という周期的な儀式によりふさわしい領域の近くへと連れ出されていくのだ。

「知識人は如何にして戦争を再訪するのだろうか」という私の第二の問いは、月日や年といった日付なしではほとんど答えようがない。ある戦争が次の戦争に溶け込んでいるだけでなく、戦闘を公認する宣言に先立つ数ヶ月における判断が見えなくなっている。9・11後の対テロ戦争はその数週間前の武力による威嚇からいかにして生じていったのか。9・11との関係で愛国者法（パトリオット法）が可決されたのはどの日付けだったのか。そして、わたしたちの政府が移民の権利とともに市民権を再定義し始めたのは、どれくらい後だったのか。わたしたちは知らない。わたしたちは注意を払わなかった。わたしたちは国旗を買いに外出した。

いくつかの例外はあった。スーザン・ソントグは9・11から数日のうちに「公人とTVコメンテーターたちによって行商された現実への途方もない一撃と、独善的な戯言とあからさまな欺瞞との間の切断」について指摘した。メディアは「火曜日の大量殺戮実行者たちが何と呼ばれようと、彼らは臆病者ではない」という暴力に対するこれらの責任への彼女の評価を繰り返し報じた。そして、ソントグは敵を勇敢な者と呼んだとして排斥された。一年後、彼女は「偽りの戦争の偽りの宣言」に言及することで、なおも主要紙、主要メディアと闘おうとしていた。「終結無き戦争というものはない。あるのは、それが疑い得ないことだと信じる国家による権力の拡張の宣言だ」という彼女の解説はほとんどまったく無視された。

（「ブッシュ大統領が『終わることない仕事』といくぶん聖書風に呼びかけていること」についてのアルンダティ・ロイの同様の言及を参照のこと。これに対するロイの応答はまた、ソントグによるブッシュの権力への意志への告発と同様である。「私は自分自身が市民と国家についての多くの関係について考えていることに気づいた」）そして、マッカーシー時代にはびこった行き過ぎた行為が冷え冷えと思われられるなか、コメディアンでトークショーの司会者であるビル・マハーは、似ていなくもない意見を述べた後で、彼の番組が中止され

たことを知った。<sup>1</sup>

「知識人は如何にして戦争を再訪するのか」という私の第二の問いは、この世紀を戦争前夜として振り返ることで新しい世紀に向かおうとする多くの日本の研究者たちの仕事によって促された。私を第二の問いに向かわせるにあたって重要だったのは、2004年春にイラクで三人の若い日本の市民が人質にされたとき、日本のメディアで「自己責任」という言葉が繰り返されたことである。当時、私は成蹊大学のアジア太平洋研究センターに招かれる特権を得ていた。この言葉が繰り返し使われたことは、「戦争責任」の問題が強く注目されていることと、一致しているように私には思われた。これらふたつの言葉の意味が私には理解できなかった。「自己責任」はいくぶん過剰であり、「戦争責任」はあいまいな言葉のように思われた。

『週刊朝日』2004年4月30日号のひとつの記事が、私が「自己責任」という言葉を最近の文脈のなかで理解するのを助けた。すなわちそれは、三人の若い市民の「自己責任」の欠如を公に強調し、かれらが事件を招いたと暗に非難することで、人質たちの信用を傷つけようとする小泉政権のねじれた戦略だった。『週刊朝日』は読売新聞がこのフレーズをどのように取り上げたかを示している。つまり、三人は「自己責任」の自覚を欠いたまま無責任に危険な地域に飛び込み、自らこの事態を招き、政府に大きな負担を負わせた、というのである（原文では強調されている）。彼らは「自己責任」にもとづいて救出費用を支払うべきだとされた。『週刊朝日』の記事は続けて、「自己責任」という言葉を後期資本主義の国家・日本の同時代的パロールのなかに位置づけようとする、あるメディア専門家の次のような言葉を引いている。この二、三年、この言葉は責任逃れをしようとする権力者たちによってある種の非難として使われてきた。この言葉の背景を説明してこのメディア専門家は、企業が「消費者の『自己責任』」と語りだし、今では「犯罪も市民の『自己責任』」と言われるようになった、と述べている。これは権力者の責任逃れという側面にとどまらず、異質な人を先に切り捨てることで自分は正しい側だと主張する方法でもある、と彼女は解説している。<sup>2</sup>

「戦争責任」という言葉は卑小な「自己責任」という言葉ほど簡単には定義できない。現代日本の大衆的・学問的な語用では、それは「戦争犯罪」(war crime)と関連するものとして「戦争に対する罪」(war guilt)の意味を含み、おおまかに定義されているようだ。しかし、ドイツの作家ギッタ・セレニーがその回想録『傷を癒す：経験と反響 ドイツ1938-2001』で示しているように、戦争の再検討に付与される用語は、戦時の行動の解釈および審判と因果関係をもっている。彼女は連合国がおこなったいわゆる「戦争犯罪法廷」の活動と比べて中央情報局の業績を強調している。中央情報局は（戦争行為の過程で犯された）戦

<sup>1</sup> Susan Sontag, "A Mature Democracy," *The New Yorker* September 24, 2001, p. 32; Susan Sontag, "Real Battles and Empty Metaphors," *The New York Times*, op ed page, September 10, 2002. マハーの発言は次のようなものだった。「2000マイルも向こうから巡航ミサイルを撃つなんて、われわれは臆病者だった。これは臆病なことだ。飛行機がビルにぶつかるときにそれに乗っているなんて...あなたが望むことを言えば、それは臆病なことではないということですね」。Arundhati Roy, "Come September," in *Roy War Talk* (Cambridge: South End Press, 2003), 46-47. (ロイの発言が元々なされたのは2002年9月18日)

<sup>2</sup> 「『自己責任』言い立てる小泉政権の矛盾」(週刊朝日2004年4月30日号) 27-29頁

争犯罪と（戦争と関係なくそのほとんどが無辜の市民に対して犯された）「国家社会主義の犯罪」との区別に立脚して、国家社会主義者の行為について画期的な裁判をおこない、1958年から1996年までに約6500人に有罪判決を下した。連合国は不正確にも、SS（ナチス親衛隊）やドイツ軍が被占領国やドイツ以外の強制収容所で犯した犯罪を戦争犯罪にあたりとみなし、それゆえそれらはドイツ人がドイツ人に対して犯した犯罪についてのみ裁判権をもつドイツの裁判所の範囲外とされた。1950年までに「戦争犯罪」で裁かれたほとんどの者が釈放されたとき、ドイツの裁判所が「国家社会主義の犯罪」を犯したとみなした者は裁判所の手の届かないところにおかれた。連合国がそれらの人々を二度裁くことはできないと判断したからである。<sup>3</sup>

私はこの点で現代史に関心をもっており、ここでは東京裁判の前提、判断、制度的・心理的な名残については扱わないが、セレンイーの議論は戦争犯罪と、戦争および日本の植民地主義の計画の双方に関連づけられるべき非人道的行為との連関と区別を含む類似した展開についての研究の必要性を示唆している。<sup>4</sup> その代わりに、私は私の第一の問いを修正する前に、日本の知識人が如何にして戦争に向かっていったか、を問うために、「戦争責任」という言葉のいくつかの使われ方を簡潔に検討したい。

「日本の戦争責任資料センター」のジャーナルである『戦争責任研究』の創刊号に掲載された創刊の辞は、戦争責任という言葉によって許容されている曖昧さと向き合い、責任の自認と謝罪を単なるリップ・サービスに終らせないためには「誰が誰に対しどのような責任を負うのかを明らかにすること」が必要である、と述べている。<sup>5</sup> 1998年に発行された『第二期戦争責任』第一号は、文学界の知識人、より具体的にいえば『新日本文学』の会員たちが早くも1945年10月には「戦争責任追及」に取り組んだそのプロセスを跡付けている。12月には新日本文学会の設立大会で中野重治が、戦争責任追及についての彼の提案の一部として「民主主義文学」作家の「自己批判」の必要性を提起していた。「侵略戦争」を進んで熱心に支持した者だけでなく、それを強制された者もまた、彼らの文学がどのように戦争の遂行に貢献したのかを明らかにする「自己批判」の責任が等しくあったのだ。<sup>6</sup>

『新日本文学』1946年6月号で、知識人の行動を再検討しつつ、そこで使われている用語の問題について指摘したのは文芸評論家の小田切秀雄だった。彼はそこで文学の場合には「戦争犯罪」というよりも「戦争責任」という言葉のほうが適切だと主張している。小田切は終戦直後の時期にすぐに自分たちの過失を認めた「一億総懺悔」というフレーズを拒絶したが、そのことは戦争責任をめぐる曖昧さがいかに様々な場で責任を負わせることを可能にしたかを示している。小田切のいう「戦争責任」は、作家たちの側の深い自己反省を必然的

<sup>3</sup> Gitta Sereny, *The Healing Wound: Experiences and Reflections, Germany 1938-2001* (New York and London: W.W. Norton & Co.2001), xix-xx.

<sup>4</sup> 例えば、2000年12月の東京での「日本軍軍事的性奴隷制度を裁く女性国際戦犯法廷」における藤目ゆきの専門家証言による証言の省略を参照のこと。

<sup>5</sup> 荒井信一（日本の戦争責任資料センター代表）「創刊の辞」（『季刊戦争責任研究』創刊号／1993年）2頁

<sup>6</sup> 田口裕史『文学者の戦争責任追及』（アジアに対する日本の戦争責任を問う民衆法廷準備会編『第二期戦争責任』第一号／1998年）31頁

に伴うものだった。全国民に責任があると語ることは明らかに「バカげたこと」(ママ)だった。日本国民のせいにするには、直接の責任者を免罪することだった。「一億人」にその責任を負わせることは、あまりにもあからさまに罪を負うべき者からその責任を転嫁することだった。もうひとつの重要な要素は、新日本文学会がその約束どおりにさらに多くの名前を挙げ続けることができず、文学がどのように戦争遂行を支えてきたのか徹底的な分析をおこなうことができなかつたことだ。そこから先に踏み出せなかつたのは、文学者の名前(や作品など)を挙げ続けることは、左翼の作家たちもまた責任を持っていることを、より明白にすることを意味したからであった。<sup>7</sup>

今日、「戦争責任」という言葉が罪(guilt)を追及する過程に与えていると思われる特異性は、「戦争犯罪」(war crimes)への言及が大きく欠けていることである。「一億人」(日本国民)はもはや罪を負わず、それどころか誰も罪の責任を負わない。それゆえ、誰にもグロテスクな暴力行為を議論する義務がなく、「戦争責任」という言葉と結び付けられる国民はいない。「戦争責任」はある集団や個人が犯したある種の戦時における残虐行為に言及しているものだというコンセンサスがあるように思われる。この議論があまりにも字句の意味のみに拘泥しているように思われることを私は自覚している。「戦争犯罪」(war guilt)という言葉は「戦争責任」という言葉を翻訳するとき一般に用いられてきたとすることができる。しかしこれは、「何の罪か」という問題、そして「誰に対する責任を負うのか」という問題をふたつとも避けている。事実、東久邇稔彦首相は懺悔する一億人の大衆に呼びかけて、国民は戦争に敗れた罪を負うが、いかなる人道に反する罪も犯しておらず、その罪を負うことはないと主張している。この論理によれば、日本国民は天皇の願望を実行したことに対して責任があるから、それゆえに戦争に敗れたことの罪を負うのである。これは、積極的に戦争に向かっていたことも同様に罪であるという連合国の戦争へのアプローチとは際立って対照的である。小泉政権が「自己責任」という言葉を言い立てるのは、小泉がイラクに日本の軍隊を送ったことの是非を問うことからともかく大衆の注意をそらそうとする戦術なのだという『週刊朝日』の主張をわたしたちが採用するならば、その反復こそがそのことの実態を明らかにしている。小泉が若いフリーランスのジャーナリスト、福祉労働者を日本を危険にさらしたのだと非難したように、東久邇は日本の指導者たちを一約20年もの時代をさかのぼって一、一億人の罪ある日本国民のなかに覆い隠したのだ。戦争に向かっていた日本の知識人もまた、同様の見地から保護されたのであった。<sup>8</sup>

### 日本の知識人は如何にして戦争に向かっていたのか

西川長夫の『戦争の世紀を越えて—グローバル化時代の国家・歴史・民族—』(平凡社、2002)は、過去の世紀を戦争によって特徴づけられる世紀として再検討する日本人による研究の一例であるが、それは日本の知識人が待ち望んでいた「異様な瞬間」についての説得

<sup>7</sup> 小田切秀雄『私の見た昭和の思想と文学の五十年 上』(集英社、1988) 289-290頁

<sup>8</sup> 鈴木裕子は丹念に新聞の報道を追って標語の歴史の跡をたどっている。鈴木裕子『「慰安婦」問題と戦争責任』(未来社、1996年) 25-26頁

力ある議論を含んでいる。彼は1941年12月8日に訪れた「異様な瞬間」に反応した太宰治や高村光太郎など作家たちの文学作品、日記、詩を引用している。西川は文学者たちが一般大衆の感動と興奮に浸されていったのを明確にしようとする。作家たちは実際、「言葉などいらない瞬間」に抱きしめられていったのだった。<sup>9</sup> 西川はファシズムに言及し、健康へのアピールはナチスのレトリックを思わせると記しつつ、近代日本国民国家の歴史のなかの他の戦争においても、他国においても、開戦時には同様な反応があったとしている。それにもかかわらず、西川が議論しているのは日本の歴史であり、情緒的な反応の性質を決定づけたのは日本の歴史なのである。そこで私が問いたいのは、1930年代から40年代の日本の知識人が知識人として如何にして戦争に向かっていったのか、ということである。

私の回答は、1930年代から40年代には選択肢がきわめて限られていたということである。『人民文庫』の作家たちのように、政治的問題を公然とは主張せずに、自分の感覚を文芸誌に発表する人々は存在した。雑誌『文藝世紀』がその各号で特攻隊に送るべき人物として「赤」や「偽装した左翼」とおぼしき人物の名前を挙げていた当時、高見順など『人民文庫』の同人たちは、『文藝世紀』の最新号が出ると書店に駆け込み、当局がその名前を調べる前にそのページをめくすることで、彼ら自身の政治的活動を展開したのだった。彼らの雑誌で発表された小説は、より抑制された形でプロレタリア文学運動の遺産を引き継ぐものだった。同様に、太平洋戦争期に合衆国で收容された「帰米」のなかの知識人は、自分たちの文芸誌の発行を始めた。これらの作家たちを日本文学史に含めることは、合衆国政府がそうしたように、彼らに合衆国市民としての権利を与えないという意味ではない。私が指摘したいのは、これらの若い人々の文化的指向が太平洋戦争以前の日本の文脈のなかで形成されていたということだ。それは日系アメリカ市民、およびその日本生まれの親たちを対象に作られた收容所内で出版された彼らの文芸誌の形式からも明らかである。1944年7月から1945年6月22日号まで発行されたツーリーレーク青年団の副産物である『怒濤』などの雑誌は検閲を回避し、涙を流す自由の女神像のイメージや「国史教育への一考察」などの論文を掲載した。この論文が掲載された日付は1944年10月7日であり、問題となった国は日本であった。その関心は「日本精神」を考察することであった。これらの文芸誌は戦争によって彼らが非アメリカ人とみなされた後、戦争に向かっていくために日本語という媒介を通して知識人として行動する知識人であることのための手段であった。つい最近では、『季刊前夜』が文化批評を通じて戦争、差別、植民地主義に対抗する緊急の必要性を表明する政治的理由を取り上げている。私はここでそれを付け加えるのは、その関心の矛先がわれわれを取り巻く現在の戦争という状態に対峙しているからだ。その緊急性の自覚は、次のような呼びかけの言葉に表されている。

破局前夜が生誕前夜となる、  
戦争前夜が解放前夜となる、  
その希望を、われわれは棄てない。<sup>10</sup>

<sup>9</sup> 西川長夫『戦争の世紀を越えて—グローバル化時代の国家・歴史・民族』（平凡社、2002）

<sup>10</sup> ハギワラ・タクヤ「国史教育への一考察」（『怒濤』1994年10月7日号）4-15頁。文化と抵抗というテーマについては『前夜』の創刊号を参照のこと（『季刊前夜』創刊号、2004年秋）。『前夜』は講座や公開フォーラムを開催することでその戦前の遺産を引き継ごうと



その他の戦時中の知識人は、自分たちの抵抗運動について権力への警戒が足りずに、不運にも投獄され、そこで執筆を続けた。私は、河上肇や福本和夫などの人物に加えてプロレタリア作家たちによる獄中日記や獄中からの書簡、および戦後に書かれた山代巴の複数巻からなる自伝的作品とともに、獄中文学という文学の一ジャンルとして研究されるべきだと主張したい。<sup>11</sup> 最終的に国家と協力する人々がいた。日本の文脈では、「協力者」あるいは「転向」という言葉は、国家が要請する文化をつくりだした知識人に言及するためにしばしば使われてきた。私はここで転向をめぐる研究者たちの徹底した議論に加わろうとは思わない。<sup>12</sup> そのテーマは簡略に、重要かつ複雑すぎる。たとえば佐多稲子の例がある。1980年代に三回にわたって佐多稲子にインタビューを行って以来、私は「なぜか」を理解するために多くの時間を費やしてきた。言い換えれば、プロレタリア文学運動の指導的人物の一人—私は日本文学史における彼女の位置を「女流」プロレタリア文学作家とみなそうとは思わない—が、その明白な反帝国主義の立場を棄てて、日本による事実上の全アジアの占領を擁護するにまで至ったのかという問題である。最近、私は次のように考えるようになった。つまり、ここで実際に意味ある設問は、そして日本人の戦時の行動と戦後の事後分析についてのその他の設問も、「なぜか」ではなく、「どのように」という問いでなければならない、ということである。

#### 日本の知識人は如何にして戦争を再訪したか？

戦争責任についての戦後の日本の言説は再検討という事項の一形態であった。私は戦後の小説や随筆で自分の国家との共謀を説明しようとした佐多稲子の試みを再検討の例として付け加えたい。戦後において、政治的再出発を伴う新しい雑誌の発行という実践は、すでに私が指摘したように、それは「戦争に向かっていく」ひとつの道であったのと同じく、戦争を振り返る（あるいは再検討する）一形態となった。たとえば『女性・戦争・人権』の創刊号のテーマは「戦争責任とは何か」であった。哲学者の志水紀代子はこの創刊号の発刊にあたっての文章で、戦前も戦後も日本人は自らを自律的な市民としてみなすことができなかつた、と強調している。これは占領下に始まる。従順な生徒となった日本国民は、その前後関係に何も留意することもなく、朝鮮戦争は日本の戦後復興に貢献したと教えられた。七三一部隊のことも、南京大虐殺のことも、「慰安婦」問題のことも一切教えられなかつた。生徒

している。その呼びかけの言葉に表されている過渡期ではあれ重なる時期という感覚は、現代のおよびポスト現代的なビジュアル・イメージのまれな組み合わせを包含することに反映されている。

<sup>11</sup> 山代巴『囚われの女たち』（径書房、1981年）。とくにその第一部「霧氷の花」を参照のこと。これは「東洋で最大の女性刑務所」における反戦「思想犯」の日常についての生き生きとした記録である（同書56頁）。

<sup>12</sup> 鶴見俊輔らの集団的研究である『転向』は現在でもこの問題の最も優れた概説である。思想の科学研究会編『転向』第三巻（平凡社、1959-1962年）を参照のこと。

たちは敗戦国としての日本の役割は、戦争反対のメッセージを誠実に伝道するお手本となつて行動することだと教えられてきた。この文脈のなかでは、それに反対する声をあげる余地はなかった。研究を通して論争を促進することこそが学会誌『女性・戦争・人権』の目的だった。ハンナ・アーレントの研究者である岡野八代は、「戦争責任」とは戦争を起こした「主体」である国家が責任を負うべきものであり、戦争に直接に関与していなかった者はいかなる責任を負うことはないという無頓着な立場から、自身を覚醒させていくような物語を共有することによって戦争責任というテーマを取り上げる必要を訴えた。<sup>13</sup>

地方の出版物であるが、高校教師長尾勇三が出版したブックレット『わが内なる戦争責任』は、岡野の主張と一致している。1941年に海軍に入隊した渡辺清の反戦作品の再販であるこのブックレットは、日本人民と天皇はアジア大陸における残虐行為に対する責任があるとしている。<sup>14</sup> 序文で編者の長尾は、人民には戦争責任があるとしているが、しかし彼は「一億総懺悔」へのイデオロギー的な呼びかけとは異なる立場からそう述べている。「戦争責任は指導者の頂点に立つ天皇の問題だけではない。それは国民の責任でもある」。「懺悔」の呼びかけについて、彼は権力者たちがその言葉を変えるスピードの速さを指摘している。たとえば「一億総懺悔」はたちまちに「民主主義」や「文化国家建設」に置き換えられた。<sup>15</sup>

これらはしかし、その責任を考えるために太平洋戦争を再検討してきた知識人の研究の限られた例である。しかし、この十年間に始まったように思われるもうひとつの再検討の形態がある。それが日本人のアウシュヴィッツへの巡礼である。

### 日本におけるアウシュヴィッツ

アウシュヴィッツというテーマは実際、20世紀のヨーロッパの歴史家にとって歴史研究上最も刺激的なテーマであつたし、歴史家にとって、そして読者にとっても同様に最も感情を動かされるテーマであつたかもしれない。アウシュヴィッツはホロコーストを表す言葉となつた。この言葉はユダヤ人、精神病患者を含む障害者、ジプシー、同性愛者、ヨーロッパを支配するナチ政権の政治的反対者など1100万人のヨーロッパ人の大量虐殺に言及する際の用語として、第二次世界大戦後に使われるようになった。それは「歴史家は歴史のなかにどのように歴史としてアウシュヴィッツを表象する言葉と形式を見つけうるか」という問題だけでなく、「知識人はアウシュヴィッツについて書くことができるのか、書くべきなのか」という強烈な問いかけをも喚起した。<sup>16</sup> ホロコーストは歴史のなかに書き得るし、書かれな

<sup>13</sup> 志水紀代子「『女性・戦争・人権』学会誌創刊号発刊にあたって」（『女性・戦争・人権』創刊号、1998年）3-4頁。岡野八代「従軍<慰安婦>問題が照らし出す「わたし」の諸相」（同書）62-92頁も参照のこと。

<sup>14</sup> 長尾勇三編『わが内なる戦争責任』より「アジア太平洋戦争、渡辺清の告発責任」

<sup>15</sup> 長尾前掲書 2頁、111頁

<sup>16</sup> このような歴史研究における複雑な議論のためには、Saul Friedlander, ed., *Probing the Limits of Representation: Nazism and the Final Solution*, (Harvard University Press, 1992).を参照のこと（ソール・フランダー編『アウシュヴィッツと表象の限界』、上村忠男訳、未来社、1994年）。

ければならないと決意したアウシュヴィッツに取り組む歴史家が直面しなければならなかった中心的な問題は、表象（この歴史をどのように書くべきか）の問題、ホロコーストの商品化、生き残った人々の証言は歴史的史料としてどのように用いられるべきかという問題、などである。しかしおそらく歴史家が直面する最も困難な問題は、このとてつもなく悲劇的な人類の経験を経た生存者や、その生存者の遺族とどのようにコミュニケーションをとるかという問題である。生存者の呼びかけは「決して繰り返してはならない」というものである。つまり、彼らが歴史家に与える委任状は、「それが忘れられず、そして繰り返されないための歴史を私たちに語ってほしい」というものだ。この対話のなかで、感情はつねに記憶から離れられず、その頼りうる能力においてはより困難でさえある。ジョルジョ・アガンベンという言葉では、「アウシュヴィッツのアポリアは、まさしく歴史的知識のアポリアである。つまり、事実と真実、実証と理解のあいだが不一致なのである」。<sup>17</sup>

アウシュヴィッツに取り組む歴史家は、悪夢を見続けて、人々にその悪夢を物語っているのだ。普遍化の問題に正面から向き合わねければならない。これらの悪夢は他の拷問や集団虐殺の悪夢と異なっているのか否か、普遍化されるまでは保存されなければならないのか否か、恐怖に関する歴史的記録は奪われたままであるのか否か、「ホロコースト」という言葉は20世紀初頭のアルメニア人の虐殺にも同様に適用されるのか否か。そしてなにより、「アウシュヴィッツ以後に詩を書くことは野蛮である」というアドルノの忘れ難い発言がつねに鳴り響いている。<sup>18</sup>

中世ヨーロッパの修史官や歴史家に導かれつつ、ガブリエル・シュピーゲルは、歴史が忘れられるということが、ホロコーストの資料蒐集を進めている人々を駆り立てているが、それは恐れることではないのだ、恐れるべきことはそれが多くの歴史的事件のうちのひとつでしかないかのように「標準化」されることなのだ、と主張している。言い換えればそれは例外主義的立場である。今日文化を生み出している日本の知識人にとってそれは何を意味するのだろうか。そのような再検討は何のためにあえてなされるのだろうか。日本の知識人はアウシュヴィッツに「立ち戻る」ことによってどんなメッセージを送っているのだろうか。国境を越えた著名人で、怒ったような少女の絵やドローイングでよく知られている奈良美智の事例がひとつの回答を与えている。

### アウシュヴィッツでの奈良美智

奈良美智（1959年生）は、地方公務員の父親と共働きの母親をもつ鍵っ子であり、日本とドイツで才能ある美術学生として過ごし、その後ケルンに制作拠点を置き、UCLAに招かれたりしたが、現在では国際的な評価を得た人物だ。『Slashed With a Knife』、『Who Snatched

<sup>17</sup> Giorgio Agamben, *Remnants of Auschwitz: The Witness and the Archive* (New York: Zone Books, 2002) 12 (ジョルジョ・アガンベン『アウシュヴィッツの残りのもの—アルシーヴと証人』、上村忠男訳、月曜社、2001年)

<sup>18</sup> アドルノの有名な見解に関しては、Klaus Hofman, "Poetry After Auschwitz—Adorno's Dictum," *German Life and Letters* 58:2 April 2005, 0016-877 (print); 1468-0483 (online) を参照のこと。

the Babies』、『Lullaby Supermarket』、『I Don't Mind if You Forget Me』などの作品の作者については、他の研究によるほうがふさわしいと思われるかもしれない。奈良のファンの人々の多くは、このスーパースターを戦争に向かっていく知識人についてのこの私の論文のなかで取り上げることに驚くかもしれない。アメリカと日本の報道に現れている奈良のイメージは、政治に関心をもつ美術家とはいえないが、奈良の書いたものをよく読めば、そこには伝統的規範と政治的立場を超えた一人の知識人の姿が現れており、私はそれを明らかにしたいと思う。もちろん「誰もがそうだと気付かなければ、美術というものは超越的たりうるのか」という疑問や「私たちはどのようにして越境的な美術の超越的性格を追跡することができるのか」という疑問が起こるに違いない。言い換えれば、ある種のナショナルな場の権力に挑むならばそれは超越的なのか、それともそうとは限らないのか、ということである。ある国でキッチュなものは、他の国でも観衆への裏切り行為となるのだろうか？ そうであるならば、それが別名のキッチュなのは当然ではないのだろうか。また、キッチュは侮蔑的な用語でなければならないのだろうか。私はここでは戦争に反対する知識人としての奈良美智に焦点をあてることに限定したい。<sup>19</sup>

われわれが奈良美智を彼自身の言葉で、世界での自分の美術と自分の位置について語ってきたことを捉えようとすれば、彼の立場と合衆国や日本で彼の特性だと考えられてきたこととの間の著しい相違点に気がつく。奈良自身の言葉を研究することは重要である。日本の研究者はみな知っているように、過去二世紀にわたる日本と西洋の文化交流の不文律に従って、日本の知識人、日本の美術家、日本の観衆は、西洋の美術、文学、偶像をよく知っている。しかし相互関係はなく、その試みもほとんどされなかった。言い換えれば、日本の文化の制作者と消費者は西洋文化に実によく精通しているが、西洋の側では日本の文化の変容の複雑さを知らないままなのだ。奈良の場合、西洋の観衆は文化的現象へのアクセスはあるが、そ

<sup>19</sup> 奈良美智『Slash With a Knife』（リトルモア、2003年）、奈良『Who Snatched the Babies』（小山登美夫ギャラリー、2002年）、奈良『Lullaby Supermarket』（Last Gasp、2003年／角川書店、2003年）、奈良『I Don't Mind if You Forget Me』（淡交社、2001年）を参照のこと。奈良の2003年の展覧会に付随したカタログのためのエッセイのなかでは、デボラ・ハリーが最も良く奈良の少女の感覚を捉えている。ハリーの「Insist on Little Girls」は英語で書かれた多くの批評とはかなり異なった位置にある。「...僕はこの奈良というやつがするどい洞察力をもっていることを知っていた。利口でなく、はにかみ屋の子どもでもない。キーンの絵は共感に訴えない。／これらの少女たちは考えを持ち、意志を持っていた。彼女たちは、美術がそうであるように、真実を知っていた...」。また、レオナード・ニノイの奔放なグラフィックアート、およびイングリッド・シャフナーの吉田兼好の徒然草のなかの随筆についての議論を参照のこと（Ingrid Schaffner, "Idle Reflections on Yoshitomo Nara's Pop Art.." Nara Yoshitomo, Nothing Ever Happens, Museum of Contemporary Art, Cleveland: Perceval Press, 2003, pp. 81, 86. 57-61）。おそらくロック・シンガーのブロンディが、ロック・ミュージックのなかで育ち、その背景や自分の美術のなかでロックの言葉と親しく仕事をしている奈良と最も波長が合うだろうということは驚きではない。

ここでは伝えられるべきものが伝えられていないように思われる。奈良は単に日本を拠点にしたトランスナショナルなアニメ文化出身のマンガ家だと思われている。彼が創造する人間は静かな声で複数の言語で話すのだが、西洋では、その言葉に注目する批評家はいない。彼の子どもたち—その多くは少女だ—は、ドイツ語、英語、日本語で自分たちを表現している。これはアンネ・アリソンが追跡したトランスナショナルな現象の逆だ。彼女が研究したポケモンはナショナルな性格を失っているが、奈良はおそらく彼が生み出す人物がマンガであるために日本人だとみなされている。私がこれまで読んだ美術批評のなかでは、奈良の美術を額面以上に受け取った批評家はいなかった。これらマンガの性格を分析して、彼らが多様な言語を使い、多様な形態をもつ存在であることの社会的含意を推測する必要があると考えた批評家はこれまでいなかった。日本では、奈良の若い女性ファンは彼が創造する人物の表面上のかわいらしさに魅了されている。しかし、事実として、奈良はそのドローイング、日記、もっとも最近では写真において、鮮明な戦争反対のメッセージを送っている。反戦のメッセージの部分は、第二次世界大戦に、さらに具体的に言えば、簡潔な形でアウシュヴィッツに向けられている。

奈良が出版した日記『Nara Note』<sup>20</sup>は1999年8月21日から始まる。最後の日付は2001年5月24日だ。この日記は彼が日本からドイツ、合衆国に行き、また日本に戻ってくるまでの間を追跡している。記載された事柄のプライベートな性質と、出版された作品における公的な位置の間の矛盾は、シンプルで、孤独で、静かに暮らすのが好きな美術家としての奈良の印象と、彼が国際的に得ている多大な称賛との間の緊張状態の一例ともなっている。またそれは純粋な美術界から彼が去ったことと、美術雑誌における彼の特権的な地位との間の矛盾でもある。奈良の挿絵入りのピクチャーブック（そのほとんどは展覧会のカタログだ）のなかで最も直接的な政治的論評は、性別や態度を確かめられない神風特攻隊員の姿だ。国境を越える移動へのこの美術家自身の順応と自分の作品を評価しようと試みる自意識に焦点をあてたこの日記は、そのような内省から出発しているようにも思われぬ。それゆえ、この美術家のアウシュヴィッツへの言及は、歴史家にとっては唐突で、不調和な驚きである。

朝食後7時35分ICでクラコウに出発。

2時間30分かけてクラコウへ。

ワルシャワからの車窓からは霧の平原が続く。

クラコウの駅は新しくなっていた。

前にドロータと来たのは6年前かな……

クラコウ観光を後回しにしてアウシュヴィッツへ。

アウシュヴィッツ、ビルケナウを回る。

展示されてるものよりも、塔の上からみた収容所の敷地の大きさがリアルだ。

コルベ神父の亡くなった部屋を見た。

<sup>20</sup> 奈良美智『Nara Note』（筑摩書房、2001年）

いろいろと思うことが多すぎて、ふるえるばかりで今日は上手くかけそうにない。

アウシュヴィッツについての奈良の議論はこれ以上広がらない。次の日記はクラブでの彼の展覧会のオープニングについて言及している。彼は展覧会に訪れた老若男女が彼の作品をキッシュとみなすのではないかと気にしている。しかし、9月15日の日記がアウシュヴィッツへの奈良の応答の意味を提供している。そこは、奈良はスポーツとナショナリズムの関係について議論しつつ、いかなるレイシズムをも拒否している。それは石原慎太郎に対する非難でもある。「国のために闘う」というこの東京都知事の主張は、奈良にとってはくだらないものである。石原はその結論で国と民族は同じものだと考えた。奈良は「国民の税金でオリンピックに行かせてもらっているのだから、勝つべし」という石原の考えを皮肉な言い方で退けている。彼の次のように応答する。「だったらその国民の税金は、もっと国民のために役立ってなければならない」<sup>21</sup>

奈良は「くくりが必要ならば、国や民族を超えた世代というものでくくりたい」と主張する。彼の前提は歴史主義的だ。つまり、「世代は永遠ではないからこそ、今生きているという感覚が生まれる」。ナショナリズムについての彼の非難は続く。「世界大戦が悲惨で、戦後も国交にしこりを残してしまうのは、職業軍人だけではなく、普通の人々も国の名のもとに駆り出されて兵士として召集されてしまったからじゃないか」。これに続く国の名における戦争への奈良の告発は激烈さを増す。

右翼化、左翼化、動物愛護に平和主義、なんでもござれ！

皮肉にも歴史はいつも後で、なにが正しかったのかを証明する。

そして人は後でその愚かさを知る。<sup>22</sup>

奈良はスポーツの話題に戻る。彼の自己に対する責任の概念は小泉の言う「自己責任」とは異なっている。敗北とは、ある者がある国への責任を果たさなかったことを意味するのではなく、自分自身の力がおよばなかったことを意味するのだ。翌年、奈良は知識人として、『Foil』の第一号に川内倫子の写真と並んで載ることになる写真を撮影するために、アフガニスタンの交戦地帯に向かう。それは「戦争反対 NO WAR」というタイトルの特集だった。それらの写真—その多くは子どもたちの写真だ—は、ピンクの光で囲まれた子どもの靴、ラジエーター冷却液のプラスチックの容器の上ののった帽子、花など、その構成を通してアップビートなメッセージを送っている。<sup>23</sup> その翌年まで、ロサンゼルスブルム・アンド・ポー・ギャラリーでの彼の展覧会「new works 2004」に明らかのように、奈良のドローイ

<sup>21</sup> 前掲書

<sup>22</sup> 前掲書

<sup>23</sup> 『Foil vol. I—特集：戦争反対 NO WAR』（リトルモア、2003年4月）『Foil』の編集者によれば、彼が『Foil』の反戦特集のためにアフガニスタン現地に一緒に行きたいかどうか奈良に尋ねたとき、奈良の応えは「ある人が遠く離れた安全な国から戦争反対と言ってもあまり説得力がない。何もできないかもしれないけれど、とにかく行ってみよう」というものだった。

ングは戦争に向き合ってきた。アウシュヴィッツもまた、ロサンゼルスでの奈良の展示会のスライドショーで再び現れる。50枚以上のスライドが順繰りに壁に映し出される。そのうちいくつかはアフガニスタンへの旅の際のものだ。その他は明らかにヨーロッパの彼の個人的な友人たちの子どもの愛くるしい写真である。アウシュヴィッツのイメージはこれらの多くの写真のうちのひとつで、すぐに次の写真に変わってしまうが、(収容所の) 門の写真は間違えようがない。アウシュヴィッツは奈良の語りの不可欠の部分となった。現在をもたらすのは歴史である。世界史はひとつの場所ではなく、すべての場所に属している。対照的に、1986年の徐京植と高橋哲哉によるアウシュヴィッツへの訪問はより特別の場所に関するものとなっている。

### 徐京植と高橋哲哉：アウシュヴィッツでの出会い

ここで私は、年代順では奈良による訪問の前に行われている在日の作家である徐京植と、日本人哲学者の高橋哲哉によるアウシュヴィッツ訪問を扱うが、それは後に明らかになるであろう理由があつてのことである。しかしまず初めに、『断絶の世紀 証言の時代—戦争の記憶をめぐる対話』のなかにアウシュヴィッツがどのように現れるかを要約したい。<sup>24</sup> この本は、1998年と1999年に岩波書店が企画し、1999年に『世界』に発表された二人の知識人の一連の対話の転載で構成されている。この本の序文を書くまでに、徐はマルコポーロ賞を受賞した『プリーモ・レーヴィへの旅』を発表しており、高橋は『アウシュヴィッツとわれわれ』および日本の「戦後責任」についての著作を発表していた。<sup>25</sup> 序文に続いて、「アウシュヴィッツでの出会い」と題された章があり、そこでは1996年夏に二人が一緒にポーランドに行ったときに訪れた場所について語られている。高橋はこの旅の理由を語っている。徐はアウシュヴィッツの生還者で作家のプリーモ・レーヴィに関心をもっていた。徐はプリーモ・レーヴィの墓を訪れたとき、レーヴィの墓に名前や生没年とともに「174517」という数字が彫られていることに強い衝撃を受けた。一方、クロード・ランズマンの映画『ショアー』は、20世紀のヨーロッパ哲学に関する研究とともに、ランズマンが「記憶の非在の場所」と呼んだものへと高橋を導いた。<sup>26</sup>

このアウシュヴィッツでの経験は、彼らが事前にもっていたイメージや観念によって生き活きとしたものとなっている。クラクフ駅から収容所に向かう途中にある踏み切りは、徐にヨーロッパ中から列車でそこに移送されてきた囚人を思い出させる。I・G・ファルベン工場を訪れたとき、工場で普段どおりに操業がおこなわれていることに彼は気が滅入る思いをする。「この場所で約三万人が殺された」という説明の言葉は、歴史が物語られないままに放置されていることを彼に想像させることができるからだ。しかし、徐のアウシュヴィッツ

<sup>24</sup> 徐京植、高橋哲哉『断絶の世紀 証言の時代—戦争の記憶をめぐる対話』（岩波書店、2000年）

<sup>25</sup> 徐京植『プリーモ・レーヴィへの旅』（朝日新聞社、1999年）および高橋哲哉『戦後責任論』（講談社、1999年）

<sup>26</sup> 徐京植、高橋哲哉『断絶の世紀 証言の時代—戦争の記憶をめぐる対話』5-9頁

との出会いは、彼にとっては彼自身が個人的に立ち会ってきた歴史に新しい知識を組み入れる機会でもあった。アウシュヴィッツで最も強い恐怖を彼に呼び起こしたのは、この死の収容所のなかにある第十一号棟で、反抗した囚人たちはそこで処刑されたり拷問されたりしたからだと説明している。他の場合と同様にここでも徐は彼をアウシュヴィッツに向かわせたものは、韓国政府に投獄された二人の兄が耐えていた暴力の経験であることを明らかにしている。

徐京植のアウシュヴィッツへの応答を理解する高橋は、徐の日本における「在日」(Korean in Japan)としての位置に関して詳しく語っている。「在日」は「Resident Korean」と訳されてきたが、朝鮮に出自をもち日本に連れてこられたこれらの朝鮮人は、法的には外国人として扱われ、一種の外国出身者としての生活しており、その範疇分けが無神経だと私を感じたことを表明するための試みに私はここでより正確な翻訳を用いることにしたい。高橋は徐を日本帝国主義による植民地支配のサバイバー、生き証人と呼んでいる。彼はまた徐を彼の兄たちの経験ゆえに東アジアの冷戦体制のサバイバーとも呼んでいる。

高橋は自分自身のポジションを詳しく述べているが、彼が説明しているように、他の日本人と変わることなく育てられてきたために、そのポジションは徐とはまったく違っている。こうして彼は、子ども時代に教えられた被害者の歴史としての戦争の歴史の解釈について言及する。高橋がアウシュヴィッツで議論しようとしたことは、日本の戦争責任の追及である。彼は彼のような戦後世代の日本人が戦争の記憶にかかわるようになるには次の三つの道筋を通ると説明する。一つめは、戦争経験者からその物語を聞くことである。二つめに、彼らは在日朝鮮人や在日中国人と接触をもつことで記憶の問題に直面しうる。三つめに、1990年代初めに始まったアジアの被害者からの告発である。高橋が最も関心を寄せたのは三番目の道だった。より具体的に言えば、日本からアウシュヴィッツを訪れた二人の知識人にとってそのサバイバーとは朝鮮人「慰安婦」のことであった。また、徐と高橋にとって、日本が朝鮮を植民地している時代に吹き込んだレイシズムは、今でも現代日本の評論家が「慰安婦」の証言の真実性を否定することを許しており、それはホロコーストのときにユダヤ人が苦しめられたレイシズムとよく似ているように思われた。約十年後、そして高橋と徐の対話の再録が出版されてから三年後、もう一組の在日朝鮮人の知識人と日本人の知識人が同様のアウシュヴィッツへの訪問をおこなった。これがどの程度まで歴史のなかでの偶然なのかははっきりしないが、その書物である『戦争の世紀を超えて—その場所で語られるべき戦争の記憶がある』は、歴史を非常に異なる形態に落とし込んでいる。<sup>27</sup>

#### 姜尚中と森達也：色彩のなかのアウシュヴィッツ

2003年、片方は在日、もう片方は日本人の二組目の知識人のペアが、対話を行うために、アウシュヴィッツに向かった。これは東京大学教授で、メディアでも著名な姜尚中と作家でオウム真理教を扱ったドキュメンタリー映画『A』『A2』の監督である森達也が訪れた四

<sup>27</sup> 森達也、姜尚中『戦争の世紀を超えて—その場所で語られるべき戦争の記憶がある』（講談社、2004年）



つの記憶の場所のひとつだった。高橋と徐のアウシュヴィッツについての対話における非場所性とは反対に、彼らが場所に焦点を当てていることは、このふたつのアプローチの唯一の違いではない。彼らは一組目と同じく戦争を再検討しているが、彼らはそれを現在の戦争に戻すためにしているのである。二人はアウシュヴィッツ、ザクセンハウゼン、東京裁判の法廷だった市ヶ谷記念館、そして植民地時代と戦時の暴行を伝えるために建てられたソウルの戦争記念館を旅する。徐と高橋は数年にわたる彼らの宿題をなしとげた。彼らはハンナ・アーレントを知っており、アドルノを引用し、ホロコーストについての蓄積されたイメージの影響を認めている。しかし、これから検討する森と姜が使用した写真は『断絶の世紀 証言の時代—戦争の記憶をめぐる対話—』とはひどくかけ離れているのだ。本を開いて、見開きで載っている一連のアウシュヴィッツの写真を追ってみよう。左側のページには東京大学教授である姜が、腕を脇におろし、指を開いて立っている。彼は黒いジャケットと白いオックスフォード・シャツを着て、色の濃いジーンズをはいている。その姿は働く知識人のものだ。向かいのページには半袖シャツにバギーパンツをはいたディレクターの森が、腕を腰にあてて立っている。アーティストの知識人の姿だ。彼らはカメラに向かい、あの分岐点に立っている。そこは私たちにアウシュヴィッツという悪夢の歴史を思い起こさせる象徴的な場所だ。言い換えれば、彼らは線路が分かれる地点に立っており、そのキャプションは言うまでもなく次のようなものだ。「アウシュヴィッツ第二強制収容所・ビルケナウ正門。ユダヤ人を乗せた貨物列車が到着すると、ここで労働者と非労働者（ガス室行き）に分けられたという(?)」。私は文末に疑問符を付け加えた。

上述のものについては誰もが知っている。すちなわ、われわれのアウシュヴィッツの歴史のなかにどこにでもあるホロコーストを表意するものとしての線路の写真だ。ただここで非常に異なっているのは、二人の訪問者を前景に置くカメラの視線である。線路は彼らから遠ざかり、門は最小限にしか写されていない。その瞬間と場所の恐怖は二義的なものであるように思われる。二人の顔は線路には向けられていない(姜はうつむいているようであり、森は遠くを見ているようだ)。私はどんな出版物でもこの空間に人が立っている写真を他に見た覚えがない。この二人の男性が写真の中心に存在していることが「なぜ」という疑問を起こさせる。おそらく線路のかたちを示すという着想は、空白を配置することで死や生きながらの死を想像させるのだが、同時にそれに敬意と尊厳を与えているので、これまでそのヘゲモニーが保持されてきただけなのであろう。

次の見開きのページの写真には、アウシュヴィッツの地下監獄の圧迫された空気と臭いやユダヤ人のうめきに触れたキャプションがつけられている。この写真は絶望への言及に反して、金色に変化する光で照らされている。それに続く二ページには、ホロコーストについて最も繰り返されたイメージのひとつ、靴の山が写しだされている。キャプションは問いかける。「囚われたユダヤ人たちの靴の山は、現代の我々に何を語っているのか。ただ言葉を失うだけでは、何も解決しない」。またもや観点が異なっている。過去半世紀に繰り返されて、偶像化されたイメージは、誰のものか分からないどんよりした皮の集合を撮った白黒の写真であり、カメラは正面に向けられている。言い換えれば、今日、靴の山はそれを見る者、まさに博物館としてのアウシュヴィッツを訪れる見物客のために、その前面に立ち現れる。ここでは、実物の靴は権威ある白黒写真におけるのと同じくらいに無色に近いように思われる。しかしここで、われわれは色彩あるアウシュヴィッツのアイテムをもつことになる。金色の

サンダルなどの靴が歩む道は、死の収容所へ向かう際に身に着けていたものとしてよりも、祝祭の場面によりふさわしい。これは一見してぞっとするような略取の美化であることがわかる。それはホロコーストに形式を与えている。その写真はいたるところにある日本のファッション雑誌の読者にとっては、おそらくなじみがないものではないのだろう。ある者は一作ではなく二作のオウム真理教による事件—明日の日本のリーダーとして教育された技術系の若者が社会に反逆し、地下鉄という公共空間に毒ガスを撒いた事件—を扱ったドキュメンタリーを撮ったこの映画監督と対決したくなる。ある者は美しい写真の力に対して故意に無分別である映画賞受賞者であるアーティスト・森を非難したくなる。歴史家はこの二人の男性に彼らの対話に関連して色彩のついた写真を配置したことを追及しなくてはならない。

われわれはここで「ホロコーストをいかに表象するか」という問題に直面する。この問題に関連するのは、受容の問題である。ある者にとっては、この写真はかなり明確にジェンダーを反映している。よりはきやすい女性用の靴とブーツの上に、ある男性の靴が1940年代のファッションブルな女性用のサンダルと並べて打ち捨てられたように置かれている。それが美化され広められているので、若い日本の読者に訴えるのだろう。この再表象の衝撃はもはやホロコーストの語りにうんざりした人々にとってそれと距離をとるためのひとつの形態となりうるのだろうか。これらの描写された対象は説得力がないとして奈良が拒絶した人々のなかにあつたし、しかもそれはいくつかの点で彼のスタイルを共にする写真なのだ(すなわち、色彩の光は見る者に荒廃のなかでの生活さえ思い出させる)。<sup>28</sup>

美学化は凡俗化としても、あるいは再想像化としてもあらわれるが、姜と森のやりとりは後者について語っている。記憶の場所(ピエール・ノラの*lieux de memoire*はこのことか?)をたどる彼らの能力は、ナチがその痕跡を抹殺しようとしていることの強調や、高橋と徐が強調した「非場所」を確保することとは対照をなしている。この本の光あふれる写真は、かつてパルコが妙に好んだ演出によってできた写真を思い出させないでもない。その写真をこの本は再び宣伝しているのだ。これが、死(と生)が前例のない論理で前例のない意味を帯びる領域、「灰色の領域」だ。これがその支配とそれが伴う倫理性によって生きることを強いられたことがない者には理解できない論理である、フリーモ・レーヴィの「灰色の領域」だ。ふたたびこれに関連するアガンベンのパラフレーズを紹介しよう。アガンベンはレーヴィの「灰色の領域」を、「すべての責任が確立した独立の領域」、すなわち「責任の領域」と呼ぶ。<sup>29</sup> これはこれで想像しなければならない「想像を絶する」場所であり、森と姜は

<sup>28</sup> 色彩の使用についてのこの言及は映画『シンドラーのリスト』における赤いドレスを思い出させるかもしれない。しかし、私はここでは奈良にだけ言及している。アメリカ人のホロコーストの消費と商品化については、Peter Novick, *The Holocaust in American Life* (New York: Houghton Mifflin: 1999)を参照のこと。

<sup>29</sup> フリーモ・レーヴィの「灰色の領域」の倫理的な領域についての議論は、Levi, "The Gray Zone," in Primo Levi, *The Drowned and the Saved* (Vintage International, 1988)を参照のこと(フリーモ・レーヴィ『溺れるものと救われるもの』(竹山博英訳、朝日新聞社、2000年)のなかの「灰色の領域」)。また、Agamben, *Remnants*, pp.20-21 (アガンベン『アウシュヴィッツの残りのもの』)も参照のこと。

意欲的に公然とこの課題に取り組む。アウシュヴィッツの空間に入る前、森は「シニカルな観光地」としてのアウシュヴィッツの意味を捉えようとする。彼ら二人にとって、それは「リトマス試験紙」であるのかもしれないし、「触媒」であるのかもしれない、という問題が提起されよう。<sup>30</sup>

姜はアウシュヴィッツを管理するSS（ナチス親衛隊）の日常を想像しようとする。SSの食堂が死体の焼却施設の近くにあることは彼を混乱させ、嫌悪感を与える。在日としての彼のアイデンティティによって鍛えられた彼の応答はどのようなものか。彼の答えは間接的なものだ。1923年の関東大震災直後の朝鮮人虐殺との類似点を持ち出したのは森だ（しかし自警団のメンバーとして芥川龍之介の名前を挙げたのは姜だ）。姜はまた彼の自伝である『在日』でも触れたこととして、朝鮮人の元皇軍兵士の酒の席で吐露される追憶について述べる。限られた経験としての彼のアウシュヴィッツへのアプローチは「人間を超えた人間」について考えることである。「普通の」被害者を理解することを追求しながら、彼は七三一部隊の話題を紹介する（SSは仕事が終わると家に戻るのだが、七三一部隊のスタッフは人体実験をおこなった後で、運動会に参加し、家族と弁当をつつき、くつろいだ会話をかわすのだ）。彼はアウシュヴィッツがなした大虐殺のプロセスの「合理的な」規格化にみながっている歪んだ論理に関心をもつ。<sup>31</sup> レイズム、優生学、植民地支配を結び付けているのは姜だ。そしてあれこれと考えた後で、「なぜアウシュヴィッツか」を問うことよりも、むしろその過程でどう変わってきたのかを検討することのほうが重要だと結論づけているのも姜だ。<sup>32</sup> 在日と日本人の知識人の違いは、徐と高橋にとっては、植民地主義のサバイバーと戦後日本のイデオロギーの上で育てられた「普通の」日本市民との違いである。二十数枚の写真のうち一枚のキャプションで（森と姜が二人とも写っている写真のうちのほんの数枚の例外とともに）、姜は明らかに在日として選び出されている。彼らはソウルの独立記念館の前でポーズをとっているのだが、あたかも彼らの顔に広がる笑みを説明するためであるかのように、「在日二世の姜がやや緊張気味の森をやんわりと受け止め、対話は繰り広げられた」という説明がされている。

二人の知識人はなぜ戦争を再検討したのか？森は天皇が戦争の責任を果たすことを望む。姜は現在の戦争に応答するために前世紀の戦争を再検討することをわれわれに求める。アウシュヴィッツへの訪問はそのプロセスの一部である。姜と森は、合衆国の責任を含む過去の世界大戦における責任を明らかにすることによって、最良の意味での責任の感覚—他者に対する責任の感覚が育まれてゆくことを期待している。こうして私たちは始まりの地点に戻ってゆく。

私たちアメリカ人は終わりが見えない戦争のなかにおり、このテロとの戦争には終わりが無いというスーザン・ソントグの2002年9月の洞察は、姜尚中によって「戦争の始まりも終わりもないような戦間期に我々は今生きている」と言い換えられている。<sup>33</sup> 『戦争の世紀を超えて』の結論部分では、対テロ戦争によって社会が「正常な」社会と「異常な」社会に分断されていくプロセスが述べられている。同様に、他者が受け入れられる場所はない。こ

<sup>30</sup> 森達也、姜尚中『戦争の世紀を超えて』31頁

<sup>31</sup> 前掲書 56-57 頁

<sup>32</sup> 前掲書 74-75 頁、79-80 頁

れは自己責任という言葉が浸透していく環境の一例である。それでは、日本におけるアウシュヴィッツについてはどうなのか？

私は表象、商品化、証言という歴史研究上の三つの論点に関連する三つの事例を紹介した。いくつかの予備的なつながりを探すために振り返ってみよう。奈良美智は彼の日記のなかではそのディテール、背景、文脈についてほとんど何も書いていない。彼は三つのテーマについても何も触れていない。しかし、アウシュヴィッツへの訪問を言葉にしようとしたときに起こる震えへの言及は、それが彼が創造する万人の好む（さらに言えば民族、国籍、階級が確定しがたい）少女の姿と組み合わせられたとき、ドミニク・ラカプラが求めたトラウマを受けた人々へのある種の感情移入の表明を含意している。<sup>34</sup> ラカプラにとってそのような感情移入は情動を伴い、他者を犠牲にすること、あるいは自己を犠牲にすることに逆らうかもしれない。ホロコーストのようなトラウマをもたらしした出来事を歴史化する学問は、ラカプラが「情緒不安定」と名づけたものを前提にしなければならない。ラカプラのように歴史家の経験がトラウマを受けた出来事を含んでさえいなければ、これは可能であり望ましいことだ。ナチの直接的で媒介のない応答はそれゆえ情緒不安定の一例である。

徐京植と高橋哲哉は、エリ・ヴィーゼルとプリーモ・レーヴィという二人の最もよく知られた知識人の生き証人に簡潔に触れつつ、証言者の言葉を用いている。アウシュヴィッツのサバイバーの証言についても、正確さや個人的体験と集団的経験を同一視することの正当性という点に関する証言の利用が、必然的に抱え込んでしまう諸問題についても議論されるわけではない。しかし、この二人の知識人をとがめることはできない。彼らの対話を丁寧に読めば明確な歴史的接点が明らかになる。「慰安婦」が証言をするために名乗り出てきた。学校で教えられている歴史を「改訂」することを望む新たに現れた歴史修正主義者の権力的な学者の集団から、彼女たちは嘘をついていると非難された。徐と高橋は現在の目的のために過去のアウシュヴィッツへの旅をふたたび思い起こしているのだ。同様の理由で、二人はスーザン・ソントグと姜尚中が与えている世界大戦の像に答えている。もっとも近い過去に移って、私たちが朝鮮と日本の関係をめぐる議論における徐の原点をたどるならば、最近の著作集では、徐はもはやその立場をユダヤ人・ヨーロッパ人のサバイバーと同一視しているようだ。この二者関係はいまや、朝鮮人が日本人に相対しているように、ユダヤ人がナチに相対しているということではない。パレスチナ人が被害者としてユダヤ人にとってかわり、他者を犠牲にするユダヤ人のサバイバーは、姜が指摘するように、加害者の立場に自らを置くようになったのだ。<sup>35</sup>

ここで、私は『戦争の世紀を超えて』のなかの光ある写真に推定無罪の態度で接してきた。しかし、それらはパルコの美しくグロテスクな美学とあまりにも似たものとして現れる。それらはせいぜい著名な知識人のファッション写真だ。森と姜の対話であるこの本の結論部分で、アウシュヴィッツは警告的な物語として現れる。つまり、ホロコーストのトラウマはパ

<sup>33</sup> 前掲書 285 頁

<sup>34</sup> LaCapra, *Writing History, Writing Trauma*, (Baltimore: The Johns Hopkins University Press, 2001). pp. 40-42.

<sup>35</sup> 徐京植『秤にかけてはならない-日朝問題を考える座標軸』（影書房、2003年）

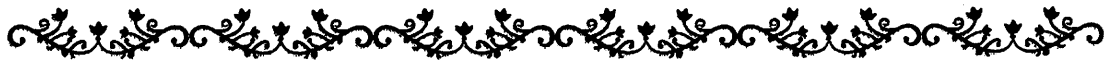
レスチナ人に対する抑圧の原因である、として。日本で出版されたアウシュヴィッツについての本がアウシュヴィッツの囚人の日常のディテールを写し出しているほどには、上記のことを簡潔に描いた事例はこれまでになかった。これはSSのメンタリティを受け入れることに関心をもった姜の場合には、ある程度まで理解できることだ。しかし、この本で姜と森の顕著な点は内的思考の使用法を含め、彼らを貨車に乗せられたヨーロッパ人で「キャンプ・エスペラント」を生き残った幸運な人々の代理となって、彼らとその倫理構造を決定的に改めることができるようにする生への意思を付与していることにある。

アウシュヴィッツ再訪は、日本の知識人が日本という国家の過去と未来の責任を主張する手段となった。これらの日本におけるアウシュヴィッツの論じ方をより悲観的に読めば、囚人やサバイバーにより多く出会わないかぎり、ちょうど国家に抱きしめられるようになった日本の知識人の植民地主義的言説が、アジア・太平洋全域への日本人進出以前からアジアに住むアジア人への認識をおろそかにしてきたように、再び被害者を見えないものにしてしまう危険を冒すことになるだろう。なるほど、性急で厳しい判断は限られた事例の検討の後では決してふさわしくない。しかし、関連して紹介した事例は検討に耐えた。例えば、日本におけるアウシュヴィッツは、日本の大衆文化の固有の言葉では、ヒットした日本のドラマ『白い巨塔』とは異なった機能をもつ。そこでは、ドキュメンタリーの題材はトラウマの忘却を促すことに役立っている。アウシュヴィッツは自己中心的な主人公、野心的な若い外科医に人間性を与えるために用いられている。彼はとりわけナチの医学実験に動揺する。しかし、この物語はアウシュヴィッツでとどまり、医者も日本の視聴者もこれがアジアにおける日本人の物語でもあることについては語らない。戦争に向かった知識人の責任、つまり例外性と普遍性を拒否し、固有性と結びつけるべき責任は裏切られてきた。ある記憶の場所（あるいは非場所—どちらにせよ）は別の場所を否定するために用いられている。しかし、戦争について語ることは常に戦争を忘却する手段であるとは限らない。過去はそれ自体を繰り返すことはないこと、そして反復される悪夢でさえ再構成されたものであることを十分に知りながら私たちが未来に進んでいこうとすれば、私たちは自らの工廠のなかで最も強力な武器のひとつである沈黙という形態がそこに未だあることを知るのである。

（翻訳：池田高巖）

---

追悼記念号に寄せる諸論文



## ポストコロニアル日本の在日朝鮮人による労働「運動」

-- 早船ちよ『キューポラのある街』及び 梁石日『夜を賭けて』における映画と文芸の表象

クリスティン デネヒー

この論文は、1950年代後半の戦後日本を舞台とした2作品における家族と近隣コミュニティを考察したものである。早船ちよ著『キューポラのある街』の舞台は埼玉県の工業都市川口市であり、梁石日著『夜を賭けて』は大阪城近郊の在日居住地区と長崎県の大村収容所を舞台としている。本稿ではまず1967年に発表された映画版『キューポラのある街』を論じる。本作品は、主人公である中学三年生のジュンを演じた吉永小百合のデビュー作であり、批評家や映画史研究者によってよく論じられている。この映画と梁の小説は共に、日本の戦後復興と経済発展にも関わらず貧しい地区に生きる人々を描いたフィクション作品である。しかし、私が焦点を当てたいのは、川口や大阪のような都市で朝鮮人の民族性と階級がどのように関わり合うかという問題である。先の帝国主義国家としての日本という歴史的背景に特に注目したい。両テキスト共に、一般の人々が経験した厳しい肉体的、精神的苦痛に焦点を当てており、戦後日本における帝国主義の様々な負の遺産について考察する道筋を提供している。

私が映画『キューポラのある街』を知ったのは、1950年代後半の、在日朝鮮人たちの北朝鮮への帰還運動に関して研究をしていた時だった。この映画が初めて上演されたのは1960年代初頭で、帰還運動について日本人観客に紹介した初の大衆映画として知られていた。<sup>1</sup> しかし早船ちよによる原作の小説は、民族問題の観点からポストコロニアル日本の人口統計を扱った作品として読まれたり批評されたりすることは非常にまれである。むしろ、たいいていの批評家が注目するのは、早船が児童文学の先駆者であったことの方である。<sup>2</sup> 1950年代後半に本作品が初めて連載された時、出版市場は、特に若者文学の裕福な消費者として子供とその親に焦点を当てて発達しているところであった。さらに当時、教育者や図書館司書は、母親を対象に、毎日20分子供と読書することを勧めるキャンペーンを行っており、このこともこの分野の市場の発達を促した。今日では早船は、貧困と再建に続く、戦後の変わりゆく社会環境における日本人の若者の日々の経験や心情を反映した小説を書いた作家として高く評価されている。

<sup>1</sup> この映画の重要性に関するコメントをくださったことを、二村一夫、美朝子両氏に感謝します。

<sup>2</sup> 『キューポラのある街：早船ちよ』（2006年 東京 けやき書房）より。本書は小説版及び作家の人気と重要性に関して以前の同僚や教師たちが論考したものを収録している。本稿では小説のテキストは特に分析しないが、小説版とそれに先立つ連載版に関する言及は、この2006年に出版された論文集からのものである。

『キューポラのある街』の主人公はジュンという少女である。ジュンは労働者階級の家に生まれ、父親は酒浸り、母親は出産したばかりである。<sup>3</sup> さらに家族はその他にいくつかの問題を抱えている。小説版、映画版両方とも的人气は主にジュンのヒロイズムにある。彼女は両親の反対にも関わらず、高校に行くという強い希望を持っている。小説版は革新的で、若者の雇用など（ジュンは隠れてパチンコ店でアルバイトをしている）様々な社会問題を扱っている。さらにセクシュアリティの問題も取り上げられている。ジュンは赤ん坊の誕生を見たり（父親は、ジュンの弟が呼びにいったにも関わらず飲みについてしまう）、学校では県立高校入試を目標にする彼女を見守ってくれる男性教師に恋心を抱いたりする。映画版と比べると、小説版は彼女のセクシュアリティや成熟に関する「内的」葛藤をよくとらえている。しかし、映画版では輪姦未遂のシーンや、ジュンが修学旅行に行かずに近所の年上の少女と踊りにいたりするシーンが描かれている。地元の不良少年に飲み物に薬を混ぜられ気を失った後、ジュンはぎりぎりのところで助けられ、破れたシャツのまま逃げ出すのである。

1961年に小説が発表された後、早船は3万円の文学賞を授与されたが、これは労働者階級の子供たち-多くの面ですでに大人の世界に足を踏み入れた子供たち-の社会的現実を描く彼女の才能が認められたためである。早船は若い読者からたくさんの手紙を受け取った。彼/彼女たちは小説の話について触れるというよりも、自分たちの生活や考え方を代弁するような登場人物を生み出してくれたことを感謝した。<sup>4</sup> ほとんどの読者や批評家にとって、本小説の重要な点は、戦後の高度経済成長と関係する問題を提起していることだった。ジュンと弟のタカユキは、マスメディア、消費文化、公害というような新しい流行や現象であふれんばかりの時代に育つ現代っ子の代表として見られた。こうした環境の下で、ジュンとタカユキは、勤勉な「サラリーマン」の父と「教育ママ」という中流階級の理想とはかけ離れた貧しい両親の元に生まれるという不運に直面しているという点で哀れみをもって描かれているが、他方では、そういった環境のもとでも生き残り、さらに明るく過ごすことのできる子供としてポジティブに描かれてもいる。『キューポラのある街』で、この家族や近隣の人々の力学をニュアンスをもってとらえた早船の能力は、彼女自身が「庶民」であることに寄る。<sup>5</sup>

『キューポラのある街』を主に戦後の高度経済成長というコンテキストに位置づけるのは妥当であるが、一方で同様に重要なのは、ポストコロニアル日本というコンテキストである。ジュンとタカユキは、後に北朝鮮に渡ることになるヨシエとサンキチと友情を育む。この出来事は特に物語の前面に押し出されている訳ではないが、川口市に住む朝鮮人の存在と1950年代後半の帰還運動は、物語を感情的なクライマックスへと向かわせる、朝鮮半

<sup>3</sup> 小説版では、出産するのはジュンの母親ではなく叔母のハナエである。ハナエの夫の啓吉は漁師で、釜山の収容所に抑留されている。早船、『キューポラのある街1 ジュン』（講談社、1977年）、56-57頁。

<sup>4</sup> 早船ちよ、123頁。

<sup>5</sup> 早船ちよ、361頁。



島に向かう為に電車に乗るサンキチに、ジュンとタカユキは半狂乱になって手を振り続けるのである。<sup>6</sup> 映画における登場人物の関係を考察することにより、北朝鮮へ渡ることが、ジュンたちにとっては大変感情的なものではあっても、朝鮮人にとっては自然なものであると描かれていることがわかる。

この映画で初めて朝鮮について言及されるのは、タカユキが家から逃げ出して、友人のサンキチと食堂で夕飯を分け合うシーンである。タカユキの母は彼のポケットに150円が入っているのを見つけ、どこで手に入れたのか問いつめるが、これで喧嘩になる。タカユキはちょっとした近所の泥棒を手伝って得たものであることを隠しているからである。父親はサンキチが泥棒を働いたと責め、彼を殴りだす。それでタカユキはサンキチの母が経営する食堂に逃げ込む。その後少年たちは彼らの隠れ家（川辺の藪の中にある洞穴みたいなもの）に行き、一夜を過ごす。そこでタカユキは当然のこととして、サンキチに朝鮮行きについて尋ねる。このシーンで、少年たちはなぜ北朝鮮と韓国が折り合いが悪いのかについて無邪気に考えを巡らせる。彼らには単純に訳が分からないからである。というのも、「おんなじ朝鮮人」だからである。

朝鮮半島分断の歴史はここでは存在しない。彼らにとっては、朝鮮人は朝鮮半島に住むべきなのである。しかし、もう一つ、少年たちが朝鮮人に関して当然のことと思っているのは、すべての朝鮮人は貧しいということである。再度少年たちは無邪気に考えを巡らせながら、朝鮮人はどこに住もうと貧乏だろうと笑い合う。つまり朝鮮に住んでも朝鮮人は貧乏だということである。このシーンで観客はサンキチの母親が日本人であることを知るが、彼女の息子は彼女が家族と一緒に朝鮮に渡るものと思っている。朝鮮人男性と結婚したからである。この物語においては、サンキチ自身が日本の朝鮮半島植民地化という歴史によって生まれた存在であるにも関わらず、慣習的、地政学的な朝鮮半島の歴史は全く描かれていない。しかしタカユキとの友情において、サンキチは主に労働者階級の、インディアンやアメリカのカウボーイ映画のような雄叫びを挙げながら学校帰りに女の子を追いかけ回したりするような、おどけた少年として描かれている。

しかし、子供の間でさえも存在する厳しい差別を映し出した一場面がある。サンキチは学芸会で人參の役を与えられるが、劇の最中タカユキは客席から「朝鮮人參」と叫ぶ。これに他の生徒たちも加わり、サンキチを嘲り侮辱するのである。グラウンドで取っ組み合いをした後、少年たちは仲直りをする。この差別発言はタカユキにとっては単なる悪ふざけにすぎないもので、近所の少女たちをからかうのと同じようなものなのである。民族に基づいた構造的不公平や、在留資格の問題、ポストコロニアル日本の社会的及び経済的ヒエラルキーの原因といったような複雑な問題は語られない。<sup>7</sup> タカユキの友人に対するこ

<sup>6</sup> 映画の最後のシーンで、サンキチは一人で電車に乗る。1日ほど前に、父親と姉と一度は出発したのだが、日本人の母親が恋しくて戻って来てしまったのである。この間に父と姉は先に朝鮮半島へ向かってしまう。しかしサンキチが家に戻って来たときには、母親は別の男性と結婚する為すでに街を去ってしまっていた。

<sup>7</sup> しかし、小説版では李承晩ライン（韓国政府による日本人漁師の勾留問題）に関する明

の振る舞いは、彼の父親の朝鮮人に対する差別発言と照らし合わせて考えられるべきものである。ジュンの友人のヨシエはジュンの為に秘密でパチンコ店でのアルバイトを紹介してくれるが、ジュンがヨシエについて話すのを聞いた父親は、いつものように酔っぱらって呂律が回らないながらも朝鮮人に対する差別を隠そうともせず、娘が朝鮮人と友達付き合いするのを厳しくとがめるのである。

ジュンのヨシエとの友情はもう一人のクラスメートとの友情とはまったく対照的である。このクラスメートは中流家庭の縮図のような少女で、ジュンが彼女の自宅で一緒に数学を勉強した後に出される華奢な皿にのった西洋風のケーキに象徴されるような存在である。この少女は父親を通して、失業中のジュンの父親のために仕事を見つけてくれる。(ジュンの父親は再度すぐに失業してしまうのだが。)一方でこの友人はジュンが切望するものを象徴している。楽天的な学生で(彼女は修学旅行のため学校に行く道すがらスキップをしハミングまでするが、これは彼女が楽天的なことをよく表している)、素敵なおカディガンを着て、マイカーを運転する父親を溺愛している。そして最も重要なことには、彼女は高校入試の準備をする時間と費用、家庭環境を持っている。しかし他方では、彼女はジュンの社会移動の限界を象徴している。これはジュンの母親がこの友情やジュンが勉強に時間をかけすぎることによく思っていないことにもっともよく現れている。このやつれた母親は、ジュンが本を読んでばかりだと怒り、入試勉強にすべての努力をつぎ込む前に、もっと家の手伝いをするべきだし高校がいかに大変か気づくべきだという。さらに父親が怒鳴って暴れながら、自分の子供たちは中学を卒業したらすぐに働きに出るんだと宣言した後、ジュンは高校に進むことを考え直し、工場で働くことを決心する。しかし、この時点ですでに母親はジュンに夢をあきらめさせたことを後悔しているようであり、中学卒業後すぐに働きに出るというジュンの決意に矛盾する感情を見せている。母親が情けなく先見の明を欠いている様子は、彼女をよりいっそう哀れに見せ、若いジュンとは正反対である。ジュンは他の誰の為でもなく、「自分」がそうしたいから働くのだと宣言する。

ジュンの父親が働いていた短い間のある日、ジュンはヨシエに家計がましになったのもうパチンコ店でアルバイトをする必要はなくなったと告げる。このシーンで初めて、私たちはジュンとヨシエの間に、ジュンと別の友人(数学と一緒に勉強した少女)とのつながりとは異なった感情的なつながりが存在することに気付く。二人の少年たちが北朝鮮への帰還を当然のこととして話す場面と同様に、ヨシエが「朝鮮に帰るから」自分もパチンコ店をやめるのだと告げた時、ジュンは当然のこととして受け取る。ジュンの反応は陽気な励まし以上の何ものでもなく、「よかったね?」と言い学校へ走って戻っていくのである。しかしジュンが去った後、カメラはヨシエにフォーカスする。彼女は一人残され、友人の簡単な反応を寂しく思い、怒っているように見える。ヨシエが自転車の横に一人立ち尽くしている時に流れる悲しい音楽がさらに彼女の感情を強調する。

---

確な言及がある。とは言うものの、小説で提示されている「朝鮮問題」は、李政権を疑わしいものとし、労働者階級の日本人漁師とその家族の払った犠牲に焦点を当てている。

ヨシエが川口駅から朝鮮へ出発しようとするとき、ジュンが感じている二人の感情的つながりの深さが表面に表れる。二人は駅に集まった大勢の騒々しく歌う人々に混じってさよならを告げあう。ヨシエは自分の自転車を仲良くしてくれたジュンに譲り、二人はメロドラマ的に、お互いのつらいことをもっと話し合う時間がなかったことを悔やむ。涙を誘うような沈黙が流れるが、自転車のベルが1、2回鳴り、二人の少女たちは自分たちのつながりの元を再確認する。それは、戦後のこの時期にはすでに普通だと考えられていた家庭の経済的安定がない為に、若くしてパートタイムで働きに出ざるを得ないという困難に立ち向かわなければならないことである。少年たちの場合と同様に、ジュンとヨシエの問題は、貧困を当然のこととして受け入れてはいるが、不幸な境遇を乗り越えようとする若者の内的葛藤として描かれている。ここでもまた、若者たちを取り囲む大きな社会、政治、経済的な要因は語られない。

これは梁石日の小説『夜を賭けて』と対照的である。梁は歴史的流れを大阪城付近の貧しい地区に住む在日朝鮮人の物語に組み入れている。舞台は1950年代で、梁はいわゆるアパッチ族の搾取に焦点を当てている。アパッチ族とは、戦争中にアメリカのB-29に爆破された兵器工場の跡地の中から鉄屑を拾い集める朝鮮人につけられた名前である。小説を通して梁は、在日朝鮮人の制度的歴史背景に関する明確な言及だけでなく、様々な刺激的なにおいや気味の悪い音、苦難の力強いイメージ、常につきまとう不安と恐怖に支配された肉体といったものに特色づけられた雰囲気を描き出している。つまり、植民地時代と戦後の環境が地続きであることと、貧しい地区に住む朝鮮人たちが克服できないような困難に立ち向かい続ける様子が描かれている。

小説の冒頭から、川底からメタンガスを噴出する「死の川」の暗く鮮烈なイメージが描かれる。「死の川」は後に、労働者たちの排泄物により更に汚染される。より多くの労働者が鉄屑を求めて地区に流れ込んでくるからである。いくつかの場面で、梁はこのような暗さと汚物を、このような状況で生きることを強いられた朝鮮人の人間性の喪失と重ね合わせる。<sup>8</sup> 一年の間に、寒さや病気、栄養失調で多くが死んでしまう。

梁は朝鮮人の生存を「出口のない戦い」と呼び、多くにとって、飢餓は警察よりも怖いものだと書く。<sup>9</sup> 鉄屑を探し当てる現場に対する警察の取り締まりがいくら厳しくても、労働者たちは「ゲリラ交戦」を繰り返し、朝、昼、晩と、回転ドアを使って現場に侵入し、警察の存在をものともしない。さきに述べたように、こういった描写に先だって、梁はこの地区に住む朝鮮人の生活をより大きな地政学的なコンテクストの観点から見ている。例えば、朝鮮戦争は日本の経済復興のターニングポイントとして強調されており、読者は、米軍からの戦時中の軍需物資、日本の経済的繁栄、戦争がもたらした朝鮮半島での悲劇的結末について再考することを迫られる。<sup>10</sup>

<sup>8</sup> 梁石日、『夜を賭けて』、39、216、400頁。

<sup>9</sup> 梁、244頁。

民族のアイデンティティに関しても、梁は日本の朝鮮植民地化に関して簡潔にふれ、1939年11月の創氏改名が、日本政府による朝鮮人皇民化政策の結果であることを説明する。政府は日本と朝鮮が血縁であることを強調したのである。戦後もこの負の遺産は受け継がれ、地区の多くの朝鮮人は通名を使い続け、日本名と朝鮮名の両方を書いた表札を使い続けた。11 この日本語と朝鮮語のハイブリッド的使用は小説の他のキーポイントでも見られる。例えば、警察がアパッチ族に犬をけしかけると、労働者たちは誰か一人に、「犬がきたあ！」と朝鮮語で叫ばせることで警官の存在を皆に知らせる。12 朝鮮語は暗闇に響き渡るコードとして機能する。小説の後半で、大村収容所の韓国／朝鮮人収容者たちが暴力的に喧嘩をする場面では、一人が「もういい！やめろ！」と朝鮮語でいい喧嘩を治めようとするが、これに「パルゲンイ」（「アカ奴」）と朝鮮語でののしる者が続く。総連と関係する機関の活動家に対するそしりである。13 実のところ、主人公の金義夫は総連と関係していたので朝鮮語を話すことができたのである。

適宜な朝鮮語の使用にだけでなく、梁はこの地区の住民が、当時の戦後日本の主流とは異なった独特の知恵を共有していたことも描いている。このことは、あまりに多くのよそ者が鉄屑を求めてやってくる為に、地区の住民が外部からの侵入を遮断した後の集落のレイアウトにもっとも端的に見られる。混沌とした狭苦しい環境で、ほとんどのものが慣れるのに苦労するようなどころであると描かれている。14 集落の構造自体が複雑で、たくさんの小さな家が込み合っ建てられており、一度道を間違うと出口が見つからないほどである。しかし住民の間では口頭のネットワークが発展していた。例えば、アパッチ族の一人が真夜中に出くわして恐怖のあまり殺害してしまった警官の死体を埋めた場所は、皆が知っていた。また、朝鮮人が北朝鮮で新しい生活を始めるチャンスである帰還運動が進行中であること等のニュースを共有していた。15

このコミュニケーションネットワークのようなものは、特定の人物の噂を瞬時に広める。多くはその人物が共同便所で目撃されたのちに、いろんな機会に事細かな点まで噂されるのである。例えば、地元出身の高山健一が刑務所で9年間服役した後に戻って来たニュースは瞬く間に広まったが、これは公衆便所で女性と性交をしているところを目撃された後のことである。16 健一の帰郷のニュースを広める活発さに加えて、集落は必要に応じて沈黙を守ることもある。健一は同一の女性を包丁で脅し翌日家を出て行く。この女性は全身痣で覆われたまま一人残されるのである。このような暴力を目にしても、住人は何事もなかったかのように振る舞う。健一の母親は息子と距離を置き、集落の女性たちは健一の彼女は売春婦だと噂する。

<sup>10</sup> 梁 13 頁。

<sup>11</sup> 梁、53 頁。

<sup>12</sup> 梁、226 頁。

<sup>13</sup> 梁、432-433 頁。

<sup>14</sup> 梁、197 頁。

<sup>15</sup> 梁、223, 339 頁。

<sup>16</sup> 梁、259 頁。

先に触れた日本名と朝鮮名の問題に関連して、最も明確な民族アイデンティティの自己監視のケースは初子が体現している。彼女はアパッチ族の金義夫が逮捕され長崎の近くの大村収容所に送られた後、彼を追って大阪を離れる。初子は社会一般における他の朝鮮人との関係を通して、戦後日本での自らの場所と言語を獲得しようとする。まず、彼女は長崎で生活を始めるに当たってバーで仕事を見つかるが、大村の収容者に会いに来たことを隠す為に通名を使う。大村は、初子と収容されている朝鮮人のつながりを示唆するコードのようなものだからである。通名を使うことは、たとえ初子自身が朝鮮人だと思われなくても、朝鮮人コミュニティとのつながりは否定的にとらえられているだろうことを前提としての対応である。結局初子は客の一人に朝鮮人かと尋ねられる。見抜かれたことに対するショックと、彼女を日本人だとばかり思っていた他のホステスたちの驚きようを目の当たりにして、彼女は羞恥心から直ちに真っ赤になる。梁は次のように書く。「このひと言で初子は素っ裸にされた屈辱を味わった。」<sup>17</sup>

金が大村に収容されている間に、読者は収容者たちが北朝鮮への帰還運動に着手していることを知らされる。<sup>18</sup> 収容者の派閥争いが詳細に描かれており、多くのものが「南組」と「北組」に別れている。<sup>19</sup> 金はこの闘争に巻き込まれ、他の収容者たちによって真夜中に叩きのめされ、骨折の治療と傷跡の縫合のため市の病院に送られる。この恐ろしい場面の後で梁は、李政権の転落(民主化運動の力に帰せられる)、続く朴正熙によるクーデター、さらに続く韓国から日本への政治亡命者、といった歴史的コンテクストを読者に与える。こういった背景のため、大村はあまりに多数の収容者を抱えており、10人収容できる部屋に200人が押し込まれている程だった。

このような状況の下で、このような血みどろの衝突は日本人看守の手による屈辱と相まって、戦後の繁栄とは正反対の、植民地時代の足かせを思い起こさせる。ここには、ジュンとヨシエのメロドラマ的涙の別れのシーンにいたような、励まし歌ってくれる群衆はいない。ここでは、1957年に日韓で規定された多くの収容者の投獄と韓国への強制送還の過程は当然のものとして描かれてはいない。『夜を賭けて』で梁石日は、登場人物に強いられた強化と監視を暴いている。彼の物語は大阪から長崎に至る朝鮮人地域の検閲されない感情と経験を読者に伝える。1960年代初頭の早船にとって、この強化と監視の過程はあま

<sup>17</sup> 梁、479頁。

<sup>18</sup> この家庭における日本政府の役割に関しては、Tessa Morris Suzuki, *Exodus to North Korea: shadows from Japan's Cold War* (Lanham, MD: Rowman & Littlefield Publishers, 2007) を参照されたい。

朝鮮人収容者についての論考は、金日編『脱出：大村収容所の人びと』(京都、三一書房、1956年)を参照されたい。

<sup>19</sup> 梁、418頁。

りにも当然のこととされていた為、より大きな社会的、政治的コンテクストを疑問視することなく、批評家は小説を読み、観客は映画を見ることができたのである。焦点は日本の労働者階級に当てられ、このことはさらに工業都市川口の戦後の風景から朝鮮人の登場人物を完全に取り除くことを当然としたのである。

(翻訳：阿南順子)

学会 “Colonial Sensibility and Imperial Japan: Affect, Object, Embodiment”  
(UCLA, 2007年12月)において発表。



## 戦時下日本のジェンダーと朝鮮人の労働<sup>1</sup>

エリサ・フェイソン

戦時下の朝鮮人強制労働については、1990年初頭より、日本政府の補償への動きにはずみを受けて関心が高まってきた。1910年から1945年まで大日本帝国を構成した様々な領土の中で、日本の植民地だった朝鮮には、植民地管理と文化的同化政策が最も徹底して適用された。日本帝国によって、日本帝国のために強制労働をさせられた元植民地住民のグループから様々な補償請求がなされている。韓国人のグループは、日本政府に対して最も盛んに補償や謝罪を求めているが、金銭補償や公式謝罪の要求は断固として拒否されている。日本帝国軍に奉仕するため、アジアの大陸や日本占領地域で徴用された朝鮮人従軍慰安婦は、戦時体験で人生を失い、その後も続いた苦境を公表するという努力の結果、国際的関心を最も強く集めた。戦争終結期の数年、日本の紡績工場で働くために徴用された朝鮮人女性数名より、日本政府に対し訴訟も起きている。日本の炭鉱で大日本帝国が強制的に労働させた朝鮮人男性の数もかなりに及び、鉱山を経営していた三井・その他の業者に対し、元労働者より謝罪と補償を要求する訴訟も起きている。<sup>2</sup> 戦争末期、日本国は、朝鮮人に対して性労働および産業労働への徴用に加え、日本帝国軍への徴兵も行った。1939年、国家の先導した様々な形の強制連行が本格的に始まるが、こうした組織化のルーツは、1910年の韓国併合期に始まり、都市部・日本の支配の広がったその他の地域への朝鮮人の移出の歴史へとさかのぼる。<sup>3</sup>

近年、女性の強制性労働と男性の産業労働への強制動員の事例は、知識人および一般大衆から最も高い関心を集めている。しかし、日本の総力戦の軍用および産業労働動員の一つの側面である朝鮮人女性・少女の工場労働についての言及は少ない。この論文では、日本の植民地主義と戦時の朝鮮人労働動員に関する文献の増加に注目し、朝鮮の女子教育・同化政策、そうした女子教育を要求した中流階級の理想の女性に対する信頼、また戦時労働動員政策へのジェンダーと階級イデオロギーの応用について検証する。ジェンダーと階級が植民地の被支配者と皇国の政治的関係をかなりの程度決定したということ論ずる。さらに、1937年、中国と戦闘状態に入る頃には、これらの関係は、総力戦動員のための国家の労働力募集の方法の中心だった。階級および教育的な背景は若い朝鮮人女性が工場労働

<sup>1</sup> この論文の長いバージョンは英文で2009年出版予定。(Barraclough and Faison, 2009)

<sup>2</sup> 日本の鉱山では、朝鮮人の労働募集の初期には、女性も、男性(しばしば夫)とともに地下で働いていた。しかし、朝鮮人の強制徴用が始まる1939年より6年も早く、女性の炭坑での労働は禁止された。Smith (1999:Ch3)参照。

<sup>3</sup> 朝鮮から日本の都心への移住民は日韓併合時から1920年後半まで、徐々に増加した。内地の移民が制限されると朝鮮人労働者の流れは満州へと移行する。(Brooks, 1998)

働あるいは軍用性奴隷として動員されるかどうかと強い関係があった。

明治時代から日本国家の男性の市民権は、家長としての権利および義務、投票権を含む政治参加の権利、そして徴兵に焦点があてられていた。日本女性にはこのような権利は一切なく、代わりに、その存在は、良妻賢母の理想にふさわしい能力および関心、つまり女性の役割に対する明白な中流階級概念に従って認識されていた。この理想は、夫の家長としての役割、軍人および市民としての国家への義務を支えることを要求し、また、子供を養育する際は、自己が養育されたようなジェンダーの規範を再生できる能力のある従順な皇国臣民に教育するよう要求された。植民地下にあった朝鮮では、日本の規則の安定化、黙従を推進するため、植民地の管理者および日本政府は、文化同化の奨励の際、こういった男性・女性の市民権の規範を適用した。朝鮮人男性・女性としてふさわしいと思われる正確な性質は、国家の労働の必要性に応じて、植民地における社会不安の回避を目的として決定された。

日本国家は、当時の西洋の帝国主義国と違い、朝鮮との「単一性」を論ずることで、その植民地支配を正当化した。「内鮮一体」のスローガンはこの統一の要求を簡約していた。また、その他の一連の概念（同文同州、一視同仁、家族国家）は両国の文化的家族的絆を強調した。(Meyers, 1984: 97) しかし、1930年後半には、これら単一性をあらわすスローガンのイデオロギー的使用は、総力戦に臨む国家の軍事的・経済的現実と、ときおり衝突しはじめた。植民地支配を正当化しようとするレトリックと労働および人員の動員の実用的必要性との不協和音は、朝鮮人を日本の労働力として統合しようとする可能性を制限した。朝鮮人男性の徴兵のように、国家の必要性とうまくかみあい、植民地民を愛国的な臣民として動員する場合もあった。すなわち、男性市民権の理想は徴兵の権利と義務を含み、朝鮮人男性が徴兵されることは、同化の目的に一致したわけである。また、朝鮮人女性を日本の工場で働くために動員する試みのように、「良妻賢母」のイデオロギーの長期にわたる教化は、家庭的な仕事が最もふさわしい選択であると教えられてきた人々を動員する努力を究極的には妨げる、といった場合もあった。日本人の運営する国民学校で教育を受けたごく少数の朝鮮人女性と少女のみが日本の工場で働く資格があるとみなされ、また同時にこれらの少女たちのみが「良妻賢母」になる能力があるとみなされた。それに反し、貧しい家庭のほとんど教育のない（また普通日本文化へはさらに適応力の少ない）朝鮮人女性は、日朝双方の社会で普及していた女性のあり方の定義の外側に位置した。これら周辺に位置した（しかし数としては多数の）グループは、日本での工場労働の可能性がなく、軍用性奴隷として慰安所での強制的に働かされた可能性が最も高かったようである。

#### 戦前の朝鮮労働と日本の労働動員

台湾は1895年、朝鮮は1910年に日本最初の植民地となり、1945年の戦争終結まで、日本の植民地運営の拠点だった。日本列島と地理的に近く、日本と歴史・文化の共通した認識(小熊, 1995 参照)、また農業および労働資源があることなどを理由に、1920年には、朝鮮は内政的にも、また外国諸国からも、日本帝国の最も重要で目立った部分として浮上していた。「五族協和」のスローガンは、朝鮮人に日本帝国の日本人に次いで第二の人種(以下、満州人、モンゴル人と続く)であるという特権を与えた。しかし、日本の植民地の中



での地位に関わらず、植民地下朝鮮の、特に借地農家の貧困悪化は、継続的な国外への移植民につながり、日本は最大数の朝鮮移民を受け入れていた。1925年、日本の朝鮮人人口は約15万人だった。1936年、中国戦争の前年にはその数は800万人へとふくれあがっていた。戦争が終わる1945年には、継続する経済の窮乏化と、軍需産業増加の目的で行われた日本国家の強制労働動員政策の結果、日本における朝鮮人人口は優に200万を超えていた。(Weiner, 1994:122, 198) 移植民のほとんどは男性で、また、戦争末期まで朝鮮人の日本での労働動員は、少なくとも労働者の法的な徴用令はなかったという点では、任意だった。

1936年に東京中心部に住む朝鮮人に行われた調査では、3700に近い回答例のほとんど(その地域に住む朝鮮人人口はおよそ4万人)は、朝鮮と比べ、日本の方が仕事をみつけやすく、また高い賃金が払われるため、朝鮮に留まるよりも日本で仕事をする方を望んだと示している。(中川, 1994:182-3) 植民地の農業政策の結果、朝鮮南部州の農村家庭の悲惨な状況が生じ、1940年初頭を通じて移民は現実性の高い選択として見なされ続けた。事実、1942年、朝鮮人200人の雇用を見込んだ日本からの募集人には、全羅南道、慶尚北道のひどい打撃を受けた地域で、約二倍の応募があった。その地域の農村家庭では、農民たちは米の接收政策に苦しみ、家族を養うのに必要な農作物さえ供出せざるをえなかった。同様に、日本の福岡県にあった八幡製鉄所は慶尚北道から受理した180人の応募者の中より130名を容易に動員することができた。応募者の一部に対して行われた調査では、多くが日本でも食糧が乏しいと言うことを知りながら、少なくともなんらかの食料配給があるので朝鮮に留まって餓死するよりはいいと信じ、日本で働きたかったと答えている。また別の応募者は、現状では一家の経済状態を維持できないから、どこか他の土地に出かけ、状況がよくなるかみてみたかった、と述べている。(山田他, 2005:141) 日本に「志願して」仕事を持つというこれらの動機は、朝鮮人にとって現実的な選択の数が限られていたこと、また家族が生き残れるかどうかが移民を含む決定をしばしば要求したことを示している。

朝鮮人の日本への移植民は国家の全体人口のほんの一部である。一方で、1930年から1940年の間に、日本の内地人口は、労働力拡大の目的で国家が推進した出生率増加運動の結果、6400万人から7300万人へと約13%増加した。労働力では、この間に兵力は600%近く(合計1700万の兵力)膨張し、また労働者数は重工業および鉱業を含む軍需産業(89.2%)また製造業および建築業(38.4%)など、男性中心の職種の労働者数が著しく増加した。それに対し、農業、漁業、家事に従事する労働者総数は(それぞれ2%、4.4%、11.6%の割合で)減少した。男性の多くが農業から産業および軍需関係の仕事に移行し、家事に従事していた女性の多くがその仕事からはなれ、男性がいなくなったことで生じた農業の労働力の空白を埋め合わせていたようである。パートタイムのみで農業に従事する女性が多くおり、その数は、田畑を離れて他の種類の仕事に移って行った男性によって生じた労働力の損失を補うには十分でなかった。(US Strategic Bombing Survey, 1947: 48-9)

朝鮮でも同様なパターンが生じ、軍需産業に動員された男性の農作業を代行できるように、総督府の働きかけで共同託児所が設置された。(樋口, 2005: 58) 日本人女性の場合と同じく、朝鮮人女性の動員は、国家によって奨励された「良妻賢母」の理想に基づく中流階級の女性観に基づいて行われた。家庭内の女性にふさわしい役割に関する考え方は、

女性は家庭という領域で国家に奉仕できることも示していた。これは、国家が、ほとんどの女性はこのカテゴリーに入り、一家の稼ぎ手としての家長のいる核家族として形成された家庭をきりもりする能力がある、と信じていたというわけではない。しかし、女性労働に関する政策はこの理想に基づいていた。こういった考えを奨励することは、教育的背景のある女性を集中的に労働動員するのを防ぎ、家庭的な女性の理想を満たせるようにした。

### 朝鮮の教育と動員

日本国家にとって、朝鮮人女性を労働者として、また 忠実な皇国臣民として動員することは、朝鮮人男性を動員するよりも問題の多い、矛盾したプロセスだった。朝鮮人男性を動員することが容易だったとか、動員の際、男性の臣民としての意味、権利と義務について複雑な妥協が少なかったと言っているわけではないが、日本軍の兵力の不足によって、朝鮮人がまず志願兵の形で入隊し、その後日本帝国軍に徴兵される可能性・必要性があるのは、特に明らかだった。男性には家庭の外で仕事を持つことが期待された。男性にとって、家長としての社会的役割を果たすことと国家に仕えることに矛盾はなかった。一方、女性には、年齢、婚姻の有無、そして教育のレベルを複合的に考慮し、日本国家が、いかに・いつ・どんな種類の労働動員を課するかあるいは課さないかについて、複雑な計算が課された。こうした計算は国家がすべての階級および教育のある女性を動員することをほばんだが、内地での工場労働への動員の条件を明確にした。

男性・女性ともに労働動員の際、特にまた圧倒的に戦争終結期において、暴力的強制連行は確かに使用されたが、日本を含む植民地支配者は、全面的に暴力を用いて臣民を動員したわけではない。実際、日本帝国は植民地下の人々に協力を呼びかけるために、無数のイデオロギーを手段として使用した。日本および朝鮮では、教育機関がこのイデオロギー的動員の中心だった。教育は、愛国心・忠誠心の教化を試みただけでなく、時には国家の必要性に合わせ、法的・強制的特権の可能性を形作り、また制限するために、重要な役割をなした。朝鮮では、国家主導型教育は皇民化戦略に基づいていた。朝鮮での皇民化の努力は、中国との戦争が始まった1937年より強化され、多岐にわたる工夫があり、朝鮮人を神道の慣例および天皇崇拝に参加させることを目的とした宗教改革、「日本語化」運動（日本語教授を優先し、1941年には学校教育のカリキュラムから朝鮮語学習の完全排除に至った）、朝鮮人に日本の名前を用いるように奨励した1940年の家族登録制度の変更などを含む。(Chou, 1996)

皇民化政策は1937年10月に正式に始まり、朝鮮総督府が朝鮮でのすべての集まりに、「皇国臣民の誓詞」を斉唱するように要求した。(Chou, 1996:43) その結果、誓詞は学校の日課の一部になった。朝鮮人の児童にこの誓詞を誓約させるのは、日本で児童に帝国教育勅語を日課として復誦させるのとおおよそ類似する。しかし、勅語では、日本人の子供たちは「我カ皇祖皇宗國ヲ肇ムルコト宏遠ニ徳ヲ樹ツルコト深厚ナリ」を覚え、「祖先ノ遺風ヲ顯彰スル」のが務めであると教えられるが、朝鮮人は、それよりかなり短い誓詞（成人用と簡単な児童用の二つのバージョンがある）で、皇国臣民としての義務を覚えるように言われた。正確には、総督府が、継続的な教化をしないと皇国臣民としての義務を忘れられたり、無視されたり、拒絶されたりするかもしれないと恐れていたということだ。皇

国臣民の誓詞の全文は以下の通りである。

- 一、我等は皇国臣民なり、忠誠以て君国に報ぜん
- 二、我等皇国臣民は 互いに親愛協力し 以て団結を固くせん
- 三、我等皇国臣民は 忍苦鍛錬力を養い 以て行動を宣揚せん<sup>4</sup>

朝鮮人の中で、学校に定期的に通っている子供たちがこの誓詞や「国語」としての日本語学習と使用など、皇民化同化プログラムのその他さまざまな側面で最も影響をうけた。

植民地支配が始まった頃、総督府は、朝鮮の学校制度改革を強引な方法で行った。1911年に、学校に普通、産業、特殊の三分類をもうけ、初等教育4年、以降男子学生は4年、女子学生は3年を義務教育化した。19世紀後期から20世紀初頭まで女子教育を奨励した大多数のキリスト教のミッションスクールは閉鎖されるか、カリキュラムを標準化し宗教教育を制限する条例にならってその運営を制限された。多くのミッションスクールの閉鎖、その他の朝鮮人が運営する学校数の欠乏、総督府側に公立の小学校を新たに開校する能力または意志がないことなどの理由で、1919年就学期の子供たちのうち4%しか公立学校に通っていなかった。1919年の朝鮮独立運動の失敗後、教育政策の徹底した改革運動のあとでさえ、識字率、特に女性の識字率は非常に低いまだだった。(Yoo, 2008: 61-4) 1942年、朝鮮人女性の就学率は33%にとどまり、日本語教育とその使用を実施するために公示された政策に関わらず、1941年の終わりまでに朝鮮人女性で日本語の基礎的な能力があったのは8%にすぎなかった。(樋口, 2005: 56)

総力戦開始以前の時期、皇民化政策は国家主義およびジェンダー・イデオロギーを取り入れて進められた。これらの同化教育政策は虚弱で未発達なものであったが、この皇民化を考慮して進められた労働動員政策を反映していた。日本国家が行い、朝鮮で奨励または強要された近代改革は、女性に対し、女性をしっかりと家庭と言う領域に位置づけ、国家コントロールの基本的なユニットである家庭の管理を任ず、という新しい見解を含んでいた。良妻賢母のイデオロギーは、女性に家庭の経済を管理し、天皇によって一体化された家長と皇国の双方に忠実で従順な子供を育てることを要求した点で、新しかった。しかし、因習を侮り、自由恋愛を行い、洋装をし、妻また母以外の仕事に憧れ、わかりやすく安定した家族のユニットを望む国家の要求に従うことを拒絶した第一次大戦後の新女性とちがい(Silverberg, 1991/佐藤, 2003)、良妻賢母のイメージは、女性および家族に関してあまり西洋的でない、より伝統的な考えと結びつく要素を含んでいた。

実は、朝鮮の知識人男性の中には、この国家支援の良妻賢母イデオロギーのより保守的な側面が真の「朝鮮人」女性とは何かを明らかにするのに役に立つと感じるようになる者もいた。こうした知識人たちは、真正な朝鮮人女性のあり方が、西洋および日本の植民地政策だけでなく、1920年代都会の街路で、そしてメディアで目立ってきた新しい女性・近代的な少女たちによって脅かされていると考えた。Insook Kwonは「植民地支配のもとで、男性の国粹主義者は新女性の現存する家長制および性的モラルに対する直接的な否定は朝鮮の伝統と結末の崩壊を引き起こすかもしれないと考えた」と説明している。(Kwon, 1998: 395) また張赫宙などの朝鮮の知識人男性は、優柔不断な日本人女性と比べ、明確に

<sup>4</sup> 成人用の誓詞である。

意見を述べる朝鮮人女性の徳を以前は賞賛していたが、1940年代には、日本の控えめで忠実な良妻を即座に礼賛し、朝鮮人の女性にそのようになるように望んだ。(フジタニ、近刊)

1940年代には、朝鮮人として朝鮮人女性との連携を持つ代わりに、男性として日本の男性植民地支配者とイデオロギーの親和関係を結ぶ、といった朝鮮の知識人男性の方向転換は、植民地政策をより堅固に女性および家族に関する保守的な見方に結びつけるという効果があった。この見方は、家族というユニットを通じて忠誠心と抑制を養って行くという戦略を提供したばかりでなく、朝鮮人男性エリートからの支持を確約した。結果、戦争中日本国は注意深く奨励したジェンダー・イデオロギーのパラミター内でのみ女性労働を動員できた。

### 国家動員と強制徴用

日本国内では、1939年の国家総動員法は一連の法令をもたらし、労働力の流動性を制限し、国家と産業界が労働者登録制度を通じてより直接的に配置を管理できるようにすることを目的とした。(Gordon, 1985: 266-72) 日本女性を勤労の目的で動員できるという国家の能力は、同時に妻や母として国家のために愛国的義務を果たせ、とするレトリックによって、また労働力不足に対応して広がった出産奨励主義によって制約された。1941年の国民勤労報国協力令は14歳から25歳までの未婚女性に、年間30日間以内の勤労奉仕を法制化した。実際の施行はあいまいであった。政府の官吏たちは、女性を工場に配属することで即座に労働力の不足を解決するよりも、将来の母としての「特別な特徴」をいかに保護するかをもっと心配した。(Faison, 2007:142-5)

朝鮮総督府でも、朝鮮人女性の勤労働員に同様な困難があった。正確には、家族における女性の地位に関する同様のジェンダー・イデオロギーのために、女性を「労働力」としてみることを許さなかった。しかし、戦争が長引き日本の人力および物質資源が限界にいたると、1944年8月、国家は女子勤労挺身勤労令を発令し、1943年から1944年にかけて一連の細かい法令を体系化し、家庭の経済を支えるのに労働を必要としない14歳以上で小学校を終えた未婚の女性を求めた。女子勤労挺身隊は朝鮮でも日本と同時に施行された。(山田他, 2005: 148-9) 女子勤労挺身隊は朝鮮全土にわたって地域で組織された。朝鮮総督府は過剰労働力を把握するのに、生産性の低い朝鮮小自作農の家族を対象に調査を行ったが、女性のすでに暮らしてきた地域での農業以外の過剰労働を動員する努力は特にされなかった。従って、朝鮮人女性も、日本人女性と同様、戦時下の動員規定のもとで、徴兵された男性のかわりに家庭内の農業労働に頻繁に従事していた。朝鮮の戦時下の労働動員について最も詳しい研究をおこなっている歴史学者の樋口雄一は、総督府が朝鮮人女性の労働を集中的に動員するのを控えた6つの主な理由を以下のように述べている。(樋口, 2005:64-5)

1. 朝鮮南部の労働力「過剰」地には女性を多数雇用できる工場がきわめて少なかったこと。
2. 過剰とされた農村女性の大半は既婚者で家庭を持っていたこと、したがって農村の家庭から切り離して遠隔地の工場などへは動員できなかったこと。

3. これらの 女性の大半は学校教育や労働者としての訓練はうけていなかったために即戦力としては使用できなかったこと。
4. 過剰とされたこれらの農家女性の日本語理解率が著しく低かったこと。
5. 女性の家事労働 以外の労働、あるいは農業以外の 外部での労働には男女双方に抵抗があったこと。またそれは、女性は家にいるという強い儒教的な慣習があったことも大きい。
6. 戦時に要請された職種が、鉱山、土木、工場などの重労働で女性に適さなかったこと。

つまり朝鮮人女性は、1939 年の国家総動員法を朝鮮にあてはめても、半島からの強制労働動員のパターンにはうまく合致しなかったわけである。

戦時下の強制労働動員のパターンについては 詳しい記録がのこっている。日本国家は、1939 年から 1942 年にかけて、募集政策に始まる三段階の労働力募集を組織した。第一段階、「募集」は日本の民間業者からの代表が関与して朝鮮総督府の割り当てた地域に旅行し、日本の植民地の農業政策によって最もひどく経済的打撃を受けた地域の極度の貧困層のなかから、鉱山、土木のための労働者を採用した。次の段階は、1942 年初頭の志願採用に代わる「官斡旋」で 1944 年まで続いた。この第二段階では、朝鮮労務協会が日本の企業に送られる朝鮮人労務者の募集、管理、配置を担当した。朝鮮労務協会は朝鮮人によって運営された国営組織で、本部は総督府に設置されていた。最終段階は、1944 年 9 月から戦争終結まで行われた「徴用」で、国民徴用令の適用は軍需産業の労働者から、全産業へと広がった。(Weiner, 1994:196/内藤, 2005:93/松村, 2007:73-93)

これらの労働動員政策は主に男性に影響したが、戦争終結期には、徴用されたほぼ半数が日本の鉱山で働いていた。一方、女子勤労挺身隊令により、日本の工場で働くために、教育のある未婚の少女たちが主に募集された。女子勤労挺身隊の大量動員では、1945 年初頭、朝鮮半島の京畿道（首都ソウルのある州）から 150 名が日本の不二越で働くために出発している。富山県にある不二越は、工作機械を専門にしており、1930 年代には日本の軍需産業の担い手だった。1928 年に創設された不二越は 1933 年の総工員数は 166 人にすぎず、うち 30 名が女性だった。1935 年に不二越 は、運営を拡大、専門化するに十分な成長を遂げ、女性工員のために特別な部門を設けた先駆者だった。不二越はこれら女性工員が製品検査、焼入れ、ネジ切り作業などに著しく精通していることを発見した。戦争中、特に政府の援助を受けながら会社を成長させ、工員数は急激に増加し、また女性のしめる割合も増加していった。1941 年 不二越の工員数 11,523 人のうち 26 %が 女性だった。1945 年には工員数は女性が 31,245 人、全体の 36 % が女性となった。(不二越鋼材株式会社, 1953:194-6/Kim, 2007:93-95)

150 名の朝鮮人女子勤労挺身隊は富山県に到着すると、6 ヶ月の訓練コースに入れられ、内鮮一体の精神、皇国婦人勤労奉仕の精神、また不二越産業精神を教えられた。訓練は、その後「皇国女性」に焦点があてられ、隊員たちに「日常生活」の指導および技術的な作業指導が行われた。(山田他, 2005:165-6) 不二越は、朝鮮人女子勤労挺身隊の仕事は日本人の少女たちと同等で、6 ヶ月かけて学ぶミリング作業をわずか 3 ヶ月で修了した者も多かったと喜びを表現している。しかし、同時に隊の富山到着直後、3 人の逃亡者があっ

たことも報告されている。(不二越鋼材株式会社, 1953:201) 不二越側は、逃亡後まもなく、その挺身隊のメンバーは勤労に戻り、調和して安定したと簡単に指摘しているが、脱走は女子勤労挺身隊の強制的な性質をものがたる。

不二越の朝鮮人女子勤労挺身隊の元隊員たちの証言から、少女たちがどのような形で動員されたかある程度知ることができる。一部メンバーは強制労働および賃金未払いの理由で会社に対し裁判を起こした。(裁判は時効を理由に却下されたが、最終的に2000年に和解に至った。) 歴史学者の山田昭次、樋口雄一、古庄正は、インタビュー、裁判議事録、また1943年2月から1945年3月まで女子勤労挺身隊に動員された37名の朝鮮人女性たちの年齢、出身地域、場所、動員の方法、配属された場所などの詳しい情報をまとめた文献を編纂した。隊員のうち、6名は東京麻糸紡績工場、22名は富山県の不二越で雇用され、8名が三菱重工業名古屋航空機工場、そして一名が鐘淵紡績工場に送られた。隊員の年齢は12歳から16歳までだが、ほとんどが動員時、13歳、14歳および15歳だった。(山田他, 2005:179-80)

山田他の研究によると、少女たちは日本の工場に働きに行く様々な理由を報告している。教師および学校幹部が少女たちの75%を動員しており、残りは官公吏、国民総力朝鮮連盟の役職者および企業社員が動員している。この資料の大多数の女性(84%近く)は甘言もしくは強要で参加を説得された。これらの甘言には、食べ物が豊富にある、勉強が続けられる、賃金が良いなどが含まれていた。一方、強要の例では、彼らが志願しないと家族の他のメンバーが徴兵されると言われた者があった。国民としての義務に訴えた場合もある。この資料の中で、総督府より実際に招集を受け取った少女は2名のみである。(山田他, 2005:149-59) 教師からの報復の恐怖と勉強が続けられるという約束が合わさり、見方によると志願のようにも見えた。しかし、学校教師に少女たちの志願を強制するよう強度の圧力をかけており、少女たちの年齢の若さもあいまって、自由志願もしくは隊員側からの働きかけだったとするのは、単に言葉のアヤにすぎない。

女子勤労挺身隊に動員された少女たちは国民学校で勉強しており日本語を学習していた。朝鮮人女性の92%が日本語が使えず、ほとんどが学校にも通っていないこの時期に教育を受けていた。この事実は、朝鮮人の少女の中でおそらく中流階級出身のマイノリティのみが日系産業の要求通りに隊員になる資格があったということを示している。また、そういった教育の機会のある家庭からの少女・女性のみが日朝の国粋主義者によって支持されている良妻賢母の理想にあった生活を望むことができるということだった。このことが、貧しい家庭出身の女性および少女の多数が異なった種類の動員の対象になり、多くの場合、慰安婦として動員される被害を受けやすくなったわけである。

皇国の政策は、朝鮮では、同化の程度、ならびにジェンダーや階級によってあらかじめ決定された基準に基づいて、日本国家への帰属性を規定した。すなわち、1940年には、皇国民民とは、朝鮮人すべてにとって、日本語を話せるかまた日本語の名前を持てるかを意味した。もちろん、戦争終結期でさえ朝鮮人のほとんどがこの基準をみたしたわけではない。女性にとっては、さらに良妻賢母の理念を教え込むということの意味し、家庭を運営し、また忠実な皇国民民として次世代を育てるためにふさわしい教育が要求された。男性にとっては、1938年以降、労働奉仕の形で、国家と天皇への忠誠を意味した。朝鮮人慰安婦および朝鮮人の帝国軍への徴用を考察することは、われわれにこういった階級やジェ

ンダーの問題がいかに関係を決定するか、またどのタイプの暴力、強制、労働の対象になるかをはっきりと見せてくれる。

## 結論

総力戦への動員には、それほど新しい勤労募集の戦略があったわけではなかった。しかし、募集のパターンの強化は朝鮮植民地支配の初期の頃から行われていた。国家総動員法が施行されていた1939年から1945年の間におよそ670,000人の朝鮮人が日本で働くために動員された。(山田他, 2005:69-71, 266) この数は、慰安婦として徴用された200,000人から300,000人の朝鮮人女性および日本軍として戦った200,000人の朝鮮人男性を含んでいない。日本の工場の多くの仕事は、労働者に日本人の監督者に管理されるために、日本語を理解することを労働者に要求した。また、皇民化イデオロギーを労働者に十分に浸透させ、日本帝国のすべての臣民が天皇の偉大なる栄光の恩寵のもとで働き、日本人は西洋の帝国主義の圧政的支配からアジアを解放するという主張を(受け入れられなくても)少なくとも理解できることを要求した。こういった教育のない者が軍の運営する売春宿や日本の炭坑内の地下でみじめな状況で仕事をするようになったようだ。

教育は女性イデオロギーの中心でもあり、家庭管理のスキルや皇国に忠実な子供たちを育てるという家庭中心の理想を推奨した。この理想は、1940年初頭の著しい労働力不足のあと、国家の女性労働の動員方法を制限した。朝鮮の保守的な男性知識人によって支持された理想—家庭人としての女性—を推奨したことによって、日本国家は、前述した通り、国家の利益のために一時的に仕事をし、後に家庭的な生活、結婚および家事にもどる、若い、未婚の少女たちを公然と動員することができた。<sup>5</sup> かくして、日本の工場労働の応募資格があったのは、中流階級の、ある程度教育があり、労働奉仕が終了した後、良妻賢母のゴールを達成できる少女のみだった。これは、しばしば強制的で報酬のない仕事だったが、帝国軍のために慰安婦として徴兵されやすかった多くの貧困で教育のない朝鮮人の少女や女性にはやれない仕事だった。

1940年代には、性労働および産業労働のために徴用された女性や少女について語るときに使われる言葉は、チョンシンデ(注: chongsindae. 韓国語の直訳は「志願勤労隊」。日本語の「挺身隊」にあたる)という一つの言葉にまとめられ、労働の種類に関係なく使われた。この言葉が軍によって徴用された慰安婦を意味するときは婉曲的に使われた。<sup>6</sup> この婉曲的な言葉は現在も継続して使われており、近年、その使用はさらに増え、韓国のメディアや学術論文で一般に使われるチョンシンデは元従軍慰安婦を意味し、工場動員の経験という意味は消えている。もちろん、韓国語のウィアンブ(注: wianbu. 日本語で「慰安婦」という言葉も婉曲的な表現で、その言葉は、韓国で(日本では使われていないが)

<sup>5</sup> Janice Kim (2007) は日本の工場労働のため少女挺身隊に徴用された女性は戦後に給料の払われる仕事をし続けることによって、ジェンダーの規範を壊したようであると示唆している。

<sup>6</sup> 実際、「志願」という言葉も、産業もしくは性労働に適応できるかどうかで婉曲的に使われた。Janice Kim (2007) はもともとチョンシンデという言葉は少女挺身隊令で工場労働に動員された女性のみ意味していたと強調している。

今日でも軍用性労働に従事する女性たちに言及するときに使われている。1950年以降、日本よりもむしろ、駐韓米軍の基地周辺のキャンプ地で米軍関係者を対象にこの労働は行われている。この「慰安婦」という言葉を現代の軍用性労働を意味するために継続的に使用しているが、太平洋戦争の際に日本人によって行われた強制軍用性労働を意味するのに何か別な言葉が必要だ。<sup>7</sup> こういったチョンシンデの使用は、その言葉と日本および韓国の女性の産業労働と性労働の歴史的関連性および一般大衆によるその後の想像の所産を示唆してくれる。しかし、その言葉は、日本帝国主義者たちの手で朝鮮の人々が犠牲になったということをより露骨に表すかわりに、戦争中の女性の工場徴用の体験を消失させてしまう。

日本国家による女性の産業労働への動員政策を戦時下の労働動員の立場から検証することは、帝国国家に属していたジェンダーに関する概念が動員の可能性を形作ったことを示してくれる。同化および理想的な家庭人女性といったイデオロギーによって総力戦が労働人口の増加を要求しても、国家が多数の女性を工場労働に動員する可能性を抑制したのである。

(翻訳：福島佳子)

## 参考文献

Barraclough, R. and E. Faison (2009) *Gender and Labour in Korea and Japan: Sexing Class*. London: Routledge.

Brooks, B. J. (1998) "Peopling the Japanese Empire: The Koreans in Manchuria and the Rhetoric of Inclusion," in S. A. Minichiello (ed.) *Competing Japanese Modernities*. Honolulu: University of Hawai'i Press, pp. 25-44.

Chou, W. Y. (1996) "The Kominka Movement in Taiwan and Korea: Comparisons and Interpretations," in P. Duus, R. H. Myers and M. R. Peattie (eds) *The Japanese Wartime Empire, 1931-1945*, Princeton: Princeton University Press, pp. 40-68.

Faison, E. (2007) *Managing Women: Disciplining Labor in Modern Japan*, Berkeley: University of California Press.

不二越鋼材工業株式会社 (1953) 『不二越二十五年』 富山：不二越鋼材工業。

<sup>7</sup> Hyunah Yang (1998)、Chunghhee Sarah Soh (2009) とともにこれに言及している。



- Fujitani, T. (forthcoming) *Racism under Fire: Koreans as Japanese and Japanese as Americans in WWII* (tentative title).
- Gordon, A. (1985) *The Evolution of Labor Relations in Japan: Heavy Industry, 1853-1955*, Cambridge, MA: Harvard Council on East Asian Studies.
- 樋口雄一 (2005) 「戦時下朝鮮における女性動員」 in 早川紀代 編『植民地と戦争責任』東京：吉川弘文館。
- Kim, J. C. H. (2007) “The Pacific War and Working Women in Late Colonial Korea,” in *Signs* 33, 1: 81-103.
- Kwon, I. (1998) “ ‘The New Women’ s Movement’ in 1920s Korea: Rethinking the Relationship Between Imperialism and Women,” in *Gender and History* 10 (November 1998) 3: 381-405.
- 松村高夫 (2007) 『日本帝国主義下の植民地労働史 = A labor history of Japan’s imperial colonies』東京：不二出版。
- Meyers, R. (1984) “Japanese Attitudes Towards Colonialism, 1895-1945,” in R. Myers and M. Peattie (eds) *The Japanese Colonial Empire, 1895-1945*, Princeton: Princeton University Press.
- Naitou H. (2005) “Korean Forced Labor in Japan’s Wartime Empire,” in P. H. Kratoska (ed.) *Asian Labor in the Wartime Japanese Empire: Unknown Histories*, Armonk, NY: M. E. Sharpe.
- 中川清編 (1994) 『労働者生活調査資料集成：近代日本の労働者像 1920-1930』第1巻。常備労働者 東京：青史社。
- 小熊英二 (1995) 『単一民族神話の起源：〈日本人〉の自画像の系譜 = The myth of the homogeneous nation』東京：新曜社。
- Sato, B. H. (2003) *The New Japanese Woman: Modernity, Media, and Women in Interwar Japan*, Durham, NC: Duke University Press.
- Silverberg, M. (1991) “The Modern Girl as Militant,” in G. L. Bernstein (ed.) *Recreating Japanese Women*, Berkeley: University of California Press, pp. 239-66.

Smith III, W.D. (1999) "Ethnicity, Class and Gender in the Mines: Korean Workers in Japans Chikuhō Coal Field, 1917-1945," University of Washington, Ph.D. dissertation.

Soh, C.S. (2009) "Military prostitution and women's sexual labour in Japan and Korea," in R. Barraclough and E. Faison (eds) *Gender and Labour in Korea and Japan: Sexing Class*, London: Routledge, pp. 44-59.

United States Strategic Bombing Survey (1947) *The Japanese wartime standard of living and the utilization of manpower*, Washington, D.C.: Manpower, Food and Civilian Supplies Division.

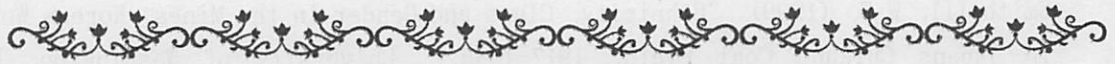
Weiner, M. (1994) *Race and Migration in Imperial Japan*, New York: Routledge.

山田昭次, 古庄正, 樋口雄一(2005)『朝鮮人戦時労働動員』東京:岩波書店。

Yang, H. (1998) "Re-membering the Korean Military Comfort Women: Nationalism, Sexuality, and Silence," in E.H. Kim and C. Choi (eds) *Dangerous Women: Gender and Korean Nationalism*, New York: Routledge.

吉見義明 (1995) 『従軍慰安婦』東京:岩波書店。

Yoo, T. J. (2008) *The Politics of Gender in Colonial Korea: Education, Labor and Health, 1910-1945*, Berkeley: University of California Press.



## 「欠損・切断された男性身体——古沢岩美の敗戦体験と主体」

北原 恵

### (1) はじめに——古沢岩美と慰安婦表象

古沢岩美（1912—2000）は、戦前からシュールレアリスム運動に関わり、多数の裸婦像を描き続けてきた洋画家である。残された仕事を通覧すると、彼の絵に登場する男性は、敗戦直後の自画像や、晩年に手掛けた「日本神話シリーズ」における男神など、数えるほどしかない。本稿では、その数少ない男性像のなかでも、敗戦直後に描かれた男性表象に注目して、戦争・敗戦と植民地での体験が、日本人男性の主体の再構築に際してどのように視覚化されているのかを考察する。なぜなら、「異色のシュールリアリスト」として異端視されることの多い古沢の作品における男性表象や慰安婦表象から見える問題は、決して彼に特殊なのではなく、戦後の男性知識人のアイデンティティ形成に共通する問題をはらんでいると考えるからである。

古沢岩美は、明治末年、佐賀県三養基郡に生まれた。画家を目指して上京し、10代後半から20代初めにかけて、すでに画壇の中核で活躍していた岡田三郎助の家に寄宿し修行生活を送った。1930年代半ばには新しく勃興したばかりのシュールレアリスムに触れ、早く

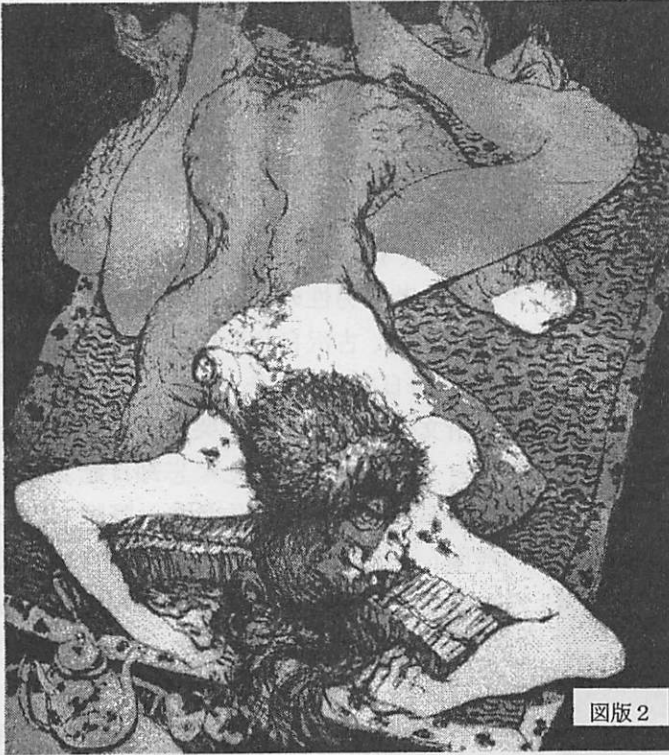


図版 1

も世に認められるようになるが、1943年に応召され中国大陸に従軍。敗戦後1年間、武昌地区で捕虜生活を送ったのち、1946年復員した。東京に舞い戻った古沢は、精力的に絵を描き、数々の展覧会に出品した。だが、1954年にシュールレアリスム系の画家たちが集まっていた美術文化協会の主導権争いに敗れ、古沢は中央画壇から離れた。その10年足らずの間に古沢が描いた油彩画には、日本の敗戦のみならず、中国での戦場、従軍慰安婦、植民地、朝鮮戦争、原爆、パンパン、GHQの日本占領などが凝縮して描きこまれており、その表象は興味深いものであると同時に、実に問題含みでもある。それらの作品として、たとえば、彼の代表作でもある、従軍慰安婦を描いた《

なぐさめもだえ》(1949年、★図版1)や、原爆を描いた《憑曲》(1948年)、《蛇望》(1950年)、《死の誕生》(1954年)、朝鮮戦争にヒントを得た《アラン峠の恋人》(1954年)などが挙げられよう。

従軍慰安婦については、《なぐさめもだえ》だけでなく、中国戦地での野戦の慰安所の様子を描いたと思われる油彩画《素絲哀》(1948年)や、古沢の所属する第11軍野戦自動車廠が参加した中国戦線最大の湘桂作戦当時の慰安婦を描いたと推測される銅版画《男になれ》(制作年不明、★図版2)、戦地に送られた初期に出会った慰安婦の様子を《姦》(制作年不明)など、油彩画だけでなく、銅版画やスケッチも含めて、たくさんの作品を残している。古沢の描く慰安婦は、初期のころは清潔であり、かつ初々しい美少女として表象されているのであるが、日本軍が中国奥地に入りどンドンと戦局が泥沼化するにつれて、変貌する。《男になれ》に登場する慰安婦の姿に典型的に見られるように、彼女たちは札束を片時も離さず、不潔で病気を患った、不気味な存在へと変わるのである。湘桂作戦頃の慰安婦たちのことを、古沢は自伝『美の放浪』のなかで、次のように書き記している。



「朝子さん[注：兵士たちによる朝鮮人慰安婦の呼称]はもらった紙幣を縄でしばって枕にし、両端を万歳したかっこうで押さえている。札束は脂汗と埃で黒光りしている。一時間ぐらいの間に彼女達の肉体を五十人余りの男が通過していった。直ちに集合、整列、完全武装して号令一下行進が始まる。浴衣を着て日の丸の小旗を振って、朝子さん達は叫ぶ、「ガンバレ、オトコニナッテ、ガンバレ」と。兵隊たちは振り向かなかった。」<sup>1</sup>

古沢が自伝のなかでこのように書き記していた記憶から制作したのが、札束を枕にして離さない慰安婦を描いた作品《男になれ》だと思われる。そして、戦争末期に

なると、野戦の山中にあったにわか作りの慰安所に触れて、「どの娘も皮膚病で不気味」であり、「部屋の隙間から、秘戯の最中を姑娘たちに覗き見され」、「時には壁の上にまで這い上がって覗いていたと不気味がっていた兵もいた」と、古沢は述べるに至るのである。彼が戦場で体験した慰安婦について自伝に書いたのは、この個所が最後である。彼の心の内にあって慰安婦たちは、単に不潔な存在になっただけではなく、日本兵たちを上から覗き見し、脅かす存在となったのである。

そして、札束にしがみつき、不気味で不潔、かつ男を眼差す「慰安婦」は、敗戦直後、

<sup>1</sup> 古沢岩美『美の放浪』文化出版局、1979年、p. 263.



変化する。古沢の代表作のひとつ、《なぐさめもだえ》を見てみよう。1949年に制作された油彩画《なぐさめもだえ》は、裸の女性が荒野を背景に身をよじらせながら立ち、傍らに糸車やパン、機械部品などが散らばるダリ風の絵である。古沢はこの女性について、中国戦線最大の軍事作戦であり自らも参加した湘桂作戦（1944年4月）で、「日本軍二十四万の内、行軍と栄養失調で八万までが干からびて死んでいった修羅の中でふてぶてしく生き続けた慰安婦が主題となっている」<sup>2</sup>と述べている。図像分析の詳細はここでは省くが、《なぐさめもだえ》は、古沢の歴史観と敗戦・占領の現実、未来への希望、故郷・日本の復活が、極めてキリスト教的な美術コードを散りばめることによって、「西洋」に対すると同時に、中国・朝鮮に対しても自らの「主体」の回復を試みた絵画だといえる<sup>3</sup>。復活を象徴する若い慰安婦の女性身体は、失われた自らの異性愛主義の日本人男性のセクシュアリティの復活と、女性身体（＝植民地）の支配の復活をも暗示していた。

## （2）敗残兵、男娼、もしくは特攻隊の生き残り、としての日本人男性

では、《なぐさめもだえ》に代表的に見られるように、従軍慰安婦、焼け跡の娼婦、原爆など、極めて特徴的な女性表象の絵画群を制作していた敗戦直後から1950年代半ばまで



の時期に、古沢岩美は、男性の身体をどのように描いていたのだろうか？あるいは、描いていなかったのだろうか？

1946年、復員直後に制作された《忘却日記》には、若い男性の頭部が登場する（★図版3）。これは、古沢自身を描いた自画像でもあり、「戦争日記」でもある。1947年5月、第7回美術文化展に、《幽山哭》《呆眠》《貧略膳》とともに出品された《忘却日記》は、作家自身がこれら一連の作品を「野戦での記憶の残像」だと述べているように、夥しく雑多なモノが、巨大な頭部のみの自画像とともにひとつの画面に押し込められている。画中の額の絵には、銃を持つ兵士（古沢自身か）がこちらを振り返り、戦場の空に若い女の顔がうっすらと浮かんでいるのが見える。工場の煙突を赤旗で巻いたのが、戦後のストライキに対する風刺の意味を込めたと述べていることから、彼の労働運動に対する冷ややかな立場と視線が伝わってくる。

<sup>2</sup> 古沢岩美「ありがたきかな四面楚歌」『みづゑ』1949年8月号、p. 45.

<sup>3</sup> 北原恵「古沢岩美の描いた「慰安婦」——戦争・敗戦体験と主体の再構築」『インパクション』169号、2009年6月を参照されたい。

古沢はその後、自分の頭部と切断したリンゴを重ね合わせた自画像、《リンゴの私のリンゴ》(1950年)や、骸骨や飛行機の残骸と頭部を並べて置いた《頭骨・自画像》(1951年)など、頭部だけの自画像を数点描いた。後者の作品では、頭蓋骨と生首のあいだにはタクトが垂直に立ち、どちらに振れるかわからない生死の危うさが表現されているが、なぜ、彼のこれらの自画像には首から下の肉体が存在しないのだろうか？ まるで、この時期の古沢の自画像は、肉体を喪失して精神性だけに昇華されてしまったかのようなのである。古沢はこれらの絵画のほかに、どのような男性像を描いていたのだろうか？

敗戦を体験した古沢の自画像の集大成として挙げられるのが、油彩画の《餓鬼》(★図版4)である。



図版4

1952年5月、独立後初めての〈血のメーデー〉事件の起こった同月、この作品は、第一回国際美術展に出品された。「私の戦争と戦時のメモの集積」だと自ら語る縦3m、横2mのこの大作は、展覧会では、いつも黒山の人だかりで見ると見る者の目を引いていたという。だが、当時、石川達三は、毎日新聞に「出来上がったものは醜悪極まるものだ。この絵は『美術』というものから完全に踏み外している。こういう絵は見るに耐えない」と酷評している。

次に、《餓鬼》の図像を検討してみよう。

まず、一番目を引くのが、片足を亡くし、ボロボロのズボンを辛うじてまとただけで松葉杖で画面中央に立つ一人の敗残兵である。その背後には、陸軍を象徴する山縣有朋の銅像が亡霊のように行んでいる。馬に乗った山縣の軍帽や顔、軍服などは鳩の糞まみれであり、その姿は地に落ちた將軍そのものだ。片足の男の眼は白く濁っており、盲目なのだろうか、どこを見ているのかわからない不気味さがある。その彼が右の掌を開いて、観者に見せるのは、星三つの陸軍の襟章である。古沢は、捕虜生活のあと兵長に昇進したそうであるから、この襟章は彼自身のものなのであろう。また、男の少し開いた口のあいだからは数本の歯が見えるが、前歯は欠けており、凄惨な雰囲気だけをよわせている。古沢は、初年兵の頃、軍隊でリンチにあい、歯が4本抜けたことがあると自伝で述べており、このリンチの体験も描きこんだのかもしれない。片足の敗残兵は、自身を重ね合わせた自画像であるとともに、「敗者」である「日本」の姿だと考えられる。

男の切断された足もとでは、観者に見せるかのように裸体をさらした女性が、日本兵に乳房を鷲づかみにされ襲われ、そのすぐ後ろの女性も兵士にはがいじめにされている。彼女たちは皆、指輪をはめ、赤いマニキュアもしておらず、娼婦ではない一般の女性として描かれていることがわかる。「看呼」（見よ）と、「福至 善人家」の赤い中国式の張り紙も見え、強姦や虐待の行為をあざ笑うかのようなのである。さらにその奥には、兵隊に追い立てられて両手を挙げた中国人の老人と、銃剣を突き付けられて幼子をしっかりと胸に抱きしめる母親、夥しい数の日本兵の死者を乗り越えて上に這い上がろうとする人間もみえる。だが、古沢の《餓鬼》では、戦場での強姦は、女性の裸体の描写からもわかるようにあくまで戦争の一コマの光景に留まり、その行為に批判や告発の意味が込められているわけではなさそうだ。すなわち、強姦や日本兵の戦死、突撃、戦場、荒廃、娼婦などが描かれた大きな画面の最終的なテーマは、娼婦の足元に転がっている骸骨が表わす「メメント・モリ（死を想え）」である。

だが、女性像は片足の男に意味を持たせる上で、決定的に重要である。片足の敗残兵を挟むかのように女が左右に配置されているのであるが、男の身体の欠損をより強調するのは、左右の美しく豊満で美しい肉体を持った女性たちの存在である。日本兵に強姦される「素人女性」と、性を売る「娼婦」（彼の絵の中では、時として従軍慰安婦でもあり、パンパンでもある）という、二種類の女性は、彼の絵の中ではともに男の欲望に応える肉体でしかない。欠損していない肉体を持つのは女性だけである。女たちのすべすべした白い肌と、敗残兵の筋張った黒っぽい身体。日本兵によって仰向けに倒される女、あるいは身を売る準備をするために腰をかがめる女と、片足であれ直立する男。「ふてぶてしく生き続けた」女と、無数の日本兵の死者。この対比のなかで、古沢は片足の敗残兵に自己を投影して見せた。1952年、講和条約発効直後の展覧会に出品された《餓鬼》は、思い出したくない戦争の記憶と、独立を迎えた時期にあって今さら触れてほしくない「敗者」としての男



性のトラウマを、まざまざと再現するものであった。それゆえに、人々はこの絵に群がり、批評家は酷評したのである。

敗戦直後、古沢は、《餓鬼》のほかにも、極めて特徴的な男性を描いている。1949年、美術文化協会第9回展に《なぐさめもだえ》とともに出品し、批評家たちから散々貶された《唄えない夜》(★図版5)である。画面では、座り込んで夜空を仰ぐ男娼がひとり大きく描かれている。白いブラジャーを胸につけ、赤い口紅と長い髪の毛の人物は一見、女性と見紛うばかりであるが、仔細に下腹部を眺めると、男根がむき出しになっているのが見える。



図版5

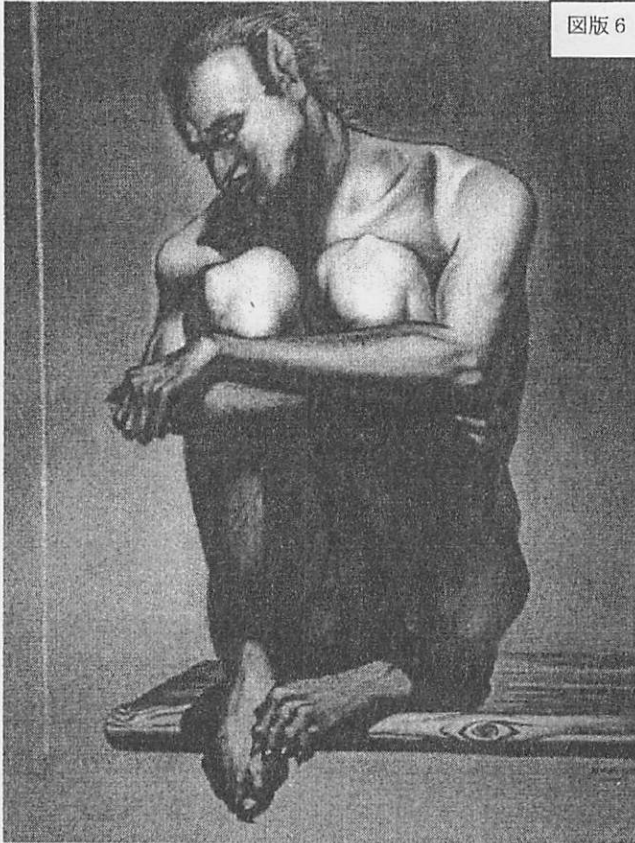
前年の1948年11月22日夜、「男娼の森」と呼ばれていた上野公園を視察中だった田中警視總監が、男娼ら30人に取り囲まれて殴られるという事件が起こり、上野公園は以後、夜間立ち入り禁止になった。古沢自身の述懐によれば、この事件が直接《唄えない夜》制作のヒントとなったわけではないというが、ギリシャのヘルマ・フロジット〔両性具有〕に対する彼なりの回答であったと述べている。だが、一般的なテーマとして両性具有を描いたわけではなく、当時の時代状況のなかから、生まれた絵であることにはちがいない。画中の男娼が後ろ手で握りしめる、かじりかけの小さなリンゴは、禁断の木の実でもある。管見の限りではおそらく日本のファインアートのなかでは、敗戦直後の男娼の姿が描かれることはほとんどなかったと思われるが、古沢は

単に風俗の一シーンとして興味を持ったのではなく、復員兵も多く携わっていたと言われる男娼に、精神的な欠損・欠陥を感じ取っていたのではないだろうか。

数少ない男性像の作品が、もう1点ある。1952年、先述の《餓鬼》とともに、第一回国際美術展で発表された《嘘吹き》(★図版6)である。支えのない板にちょこんと座る全裸の男は、猛禽類のような爪をはやし、とがった耳をしている。画面左側には、白い軌線を残しながらまっさかさまに墜落する飛行機が一機。《嘘吹き》のモチーフは、当時、古沢のアトリエをたびたび訪ねてきた特攻隊の生き残りの姿である。画家志望の彼は、訪問のたびに米軍の闇タバコをテーブルの上に置き、「アトリエの手製の長椅子の上に行儀悪く素裸になって、次から次に嘘物語を続けた」という。

「あきれて聞き流していても、ここまで嘘を積み重ねると妙に本当のことに聞こえるから不思議である。まだまだ世間は虚脱の時期である。少年であった彼等は一死奉公を信じこみ、飛行服に白い絹のマフラをなびかせ、日の丸のマークを額につけ、カッコよく生きながら軍神扱いをされた。突然戦争が終わってみると、彼等の少数は生き残って、神様は浮浪者に墜ちた。





図版 6

死ぬ術から生きる術への百八十度の転換に、彼が嘘も方便と思いついたのは見事である。」<sup>1</sup>

特攻隊の生き残りが吹くほら話は、古沢にとって180度転換したと思われる戦後の世論の象徴でもあるが、自伝の文章からは、軽蔑と哀れみだけでなく、戦争の「生き残り」同士の共感すら感じさせる。

さて、以上紹介した自画像の《忘却日記》《リンゴの私のリンゴ》《頭骨・自画像》や、《餓鬼》《唄えない夜》《嘘吹き》などが、今日画集で知ることの出来る古沢岩美の描いた男性像である。それぞれの絵画は、戦場、敗残兵、落ちた英雄、男娼、特攻隊などのモチーフを持っているが、その男性表象に共通するのは、肉体的／精神的な、切断と欠損である。

身体部分を切断された頭部だけの自画像、片足を切断され、視力を欠いた盲目の敗残兵。男性性を欠いた男娼。過去の栄光と切断された特攻隊の生き残りである。これに対して、同一画面に描かれた女性は、豊満な生命力に溢れる肉体を持っているが、彼女も完璧なわけではない。女は、生まれながらの〈女〉という欠損を抱えているのである。男性主体の回復の手立てとして、女性の身体は何度も何度も執拗に描かれ、彼の制御の元におかれていく様が、敗戦後の古沢の一連の絵画には見えるのである。

1950年代半ばに中央画壇から離れた古沢は、1960年代には長年の夢であったヨーロッパを訪れるが、厚くて重みのある文化と伝統に圧倒されて帰国した。その後、晩年に手がけた仕事が、《餓鬼》を含む戦争をテーマに描き溜めてきた「修羅餓鬼」であり、「日本神話」のシリーズであった。「日本神話」には、登場する男性は、もはや欠損も切断もない。たとえば、腐乱したイザナミの醜い死体に光を照らすイザナギ（《黄泉覗き》1987年）。イザナミの送る化け物に剣を抜くイザナギ（《黄泉比良坂》1987年）。オオゲツヒメの身体を真っ二つに断ち切るスサノオ（《オオゲツヒメ》1989年、★図版7）——。「日



図版 7

<sup>1</sup> 古沢岩美『絵の放浪』文化出版局、1985年、pp. 143-144.

本神話」シリーズのなかの男神たちが、完璧な肉体を持ち、剣を振り回すのに対して、女神たちは、腐乱し、切断される。さらにイザナミの身体が、古沢がかつて描いた中国戦線での腐乱死体や光景を彷彿させるだけではなく、イザナギとの国づくりの場面では、慰安婦たちの性的身体のディテールが再現されていることも注目すべきだろう。

古沢が「修羅餓鬼」(1993年)と「日本神話」(1994年)のふたつのシリーズを完成させた1990年代前半から半ばにかけての時期は、まさに、金学順さんらが名乗り出て日本政府に対して謝罪と補償を求めるため提訴し、従軍慰安婦問題をめぐって大きな議論の巻き起こったときであった。古沢の戦争・植民地体験の総括とも言える「修羅餓鬼」と、「日本神話」は、決してバラバラのテーマなのではなく、日本人男性の主体の回復の軌跡としてとらえる必要がある。そして、それは古沢岩美個人だけに起こった軌跡ではないのである。

---

#### 後記： 「ミリアム・シルバーバーグさんの思い出」

ミリアムさんと最初にお会いしたのは、1991年夏——。秋からのUCSC(カリフォルニア大学サンタクルズ校)での留学に備えて、UCLAで約1ヶ月間の語学講習を受けるためロサンゼルスに行ったときのことだった。わたしとは一面識がないにも関わらず、LAの空港までわざわざ出迎えて下さったときの、気さくで暖かなミリアムさんの第一印象を今でもはっきりと覚えている。月曜から金曜までびっしりと語学の勉強に追われるわたしを、彼女は週末になると決まってあちこちに連れ出してくれた。サンタ・モニカの海辺までケイジャン・ミュージックのコンサートに出かけていっしょに踊ったり、映画館に「Paris is Burning」(1990年)を見に行き、何をしゃべっているのか全然聞き取れない私のためにずっと横で通訳してくださったり…。ケイジャン料理も初めての味であり、「Paris is Burning」で見る世界も初めて。すべてが楽しく、ミリアムさんの誘うことなら、何でもついて行き、見て回った。当時のわたしは会社を辞めて大学院生になり、それまで何となく敬遠していたアメリカ合衆国という国を初めて訪れたばかりだった。

その後も、ミリアムさんとの家族ぐるみのつきあいは続いた。彼女は日本に来るたびに電話をくださり、チョコレートや子どもの服のお土産をくださった。2003年には、藤目さんや大越さんとUCLAに呼んでくださり、日本のフェミニズムや自分の研究について発表する機会をわざわざ作ってくださった。ご自宅では、ユダヤ式の手料理をいただき、日本のポピュラー・カルチャーについて夜中までお酒を飲みながらおしゃべりした。私たちひとりひとりのイメージに合わせて、シーツや枕カバーの柄まで違えて用意してくださったときは、その細やかな心遣いに感謝するとともに、その人間の特徴をよくとらえた彼女の観察力と表現力にびっくりした。同時に、自宅でたくさんの時間を共有した私たちは、彼女の身体の異変に否が応でも気づかざるを得なかったのである。いつも、たくさんの宝をいただいてばかりで、ついに何のお返しもできないままになってしまった。今のわたしには、ミリアムさんへの感謝のことばしか持っていない。



## 朝鮮戦争時期の在日朝鮮人女性の闘い

宋連玉

### 1. はじめに

2007年の日本でもっとも脚光を浴びた韓国人は朴裕河氏であろう。朴氏は著書『和解のために』（平凡社、2006年）で外国人として初の大仏次郎論壇賞を受賞し、朝日新聞紙上で異例のもてはやされ方をした。しかし受賞記念論文『『歴史認識』とは、枠組みの内と外にいる別の他者の声にも耳を澄ますこと』（『論座』2008年3月号）には、朴氏の考え方の粗さとともに、今日の韓国でのフェミニズム論議の問題点が露呈している。

朴氏は、安倍政権とノ・ムヒョン政権を「自民族を優先し、自己の正しさを疑うことを知らなかったという点では似通っていた」と断言し、ノ・ムヒョン政権の過去事清算問題を「…「親日派」や「帝国主義者」をきれいに「清算」というような思考は、中身を問わない排他主義である点ではかつての赤狩りの思想と本質的に変わらない」と言い放つのは呆れるばかりだが、本稿で論じようとする第三世界の女性解放論、言い換えると在日朝鮮人女性に関連するフェミニズムとナショナリズムの関係については次のように論じている。すなわち「……「民族」の枠組みに常に「先に」こだわる限り、「女性」や「階級」を単位としたもう一つの植民地関係や暴力を問うことは「後」になる。そのとき、「民族」の枠組みに頼れない人たちは、謝罪を受けるべき対象に出会わないまま、この世を去っていくだろう。……（中略）……日本人慰安婦たちがいまだ声を出さないのは、そのような構造があるからではないか。韓国の女性運動は、民主化闘争の中から生まれてきたものであり、そうである限り、はじめから民族主義的であるほかなかった。しかし、民族主義に頼って女性運動をする限り、たとえそのことによって運動が成功したとしても、構造的な意味での本当の女の解放はない。民族主義の根拠となるナショナル・アイデンティティ自体が、常にすでに男性中心主義的なのだから」（153頁）。

歴史的状況を度外視して、民族主義とは女性抑圧を必然的に内包するものだとする主張は、決して朴氏の発明品ではない。日本の代表的な「フェミニスト」である上野千鶴子氏も民族主義に強い拒絶反応を示してきたが、どうやら朴氏もそのような第一世界の女性解放論を信奉しているようだ。

回顧するに、朴氏の受賞作が出版された2006年という年は在日朝鮮人社会が危機的な状況にさらされた時期である。日本政府は北朝鮮の「拉致問題」を契機に、日本全国の在日朝鮮人総連合会（以下、総連と略）および傘下団体に対し、税務法違反や薬剤法違反をこじつけ強制捜査を断行した。連日メディアが垂れ流すレイシズムにより、在日朝鮮人はいっそう生きにくい状況に置かれたのである。韓国のドラマがもてはやされる世相とは裏腹に、日本社会において、在日朝鮮人は北朝鮮の国家犯罪に関与する不気味な存在としてのイメージが刻印されていき、ネット上では在日朝鮮人に対する暴言が幅を利かせている。

日本の「民主主義」への信頼度においても、朴氏と在日朝鮮人の受け止め方には相当の懸隔が存在すると言わざるをえない。

そもそも在日朝鮮人という存在は日本の植民地支配とその後の日米同盟体制がつくりだした歴史的産物である。その在日朝鮮人、とりわけ女性から見た場合、フェミニズムとは民族主義と対立する概念なのか、在日朝鮮人女性にとっての解放が上記のような政治的状況を抜きにして実現可能なのか、家父長制を共通の敵にして日本の女性たちと共闘できるのか、これらの問いの答えを解放後の在日朝鮮人女性の歴史に探りあてたい。

## 2. 8・15民族解放と在日朝鮮人女性

### 1) 継続する植民地主義

多くの在日朝鮮人は、「民族解放」が人並みの暮らしや生活の向上をもたらすであろうと素朴に期待した。しかしその期待も虚しく、日常生活を取り巻く現実はいっそう劣悪となった。例えば炭鉱などの職場は、引き揚げ日本人にとって代われ、労働の現場から追われる在日朝鮮人が相次いだ。朝鮮戦争さなかの1952年の生活実態調査では、在日朝鮮人の60%が半永久的な完全失業状態にあると報告しているが、しかもそれは日中戦争下の1930年代より状況が悪くなっているとされている（朴在一、1957：70-71頁）。日帝時代には朝鮮人を徴兵・徴用するために「内鮮一体」というスローガンが叫ばれたが、解放後は非日本人として排除し、公々然と民族差別をした。いわば在日朝鮮人は帝国日本が「内地」に囲い込んだ植民地被差別民だったのである。

以上のように、「解放」後の在日朝鮮人は性別に関係なく、いっそう差別的な条件のもとで生きなければならなかった。日・米の重層的な政治圧力が強まる中で、生活擁護の経済闘争は政治闘争に直結していった。朝鮮戦争の前哨戦ともいえる済州島の4・3事件（1948年）、そして1950年に朝鮮戦争が勃発すると、朝鮮へ帰国した人々の日本への還流が始まり、「密入国者」として法的にも不安定な地位に置かれた。

在日朝鮮人が喜んだ民族解放はつかの間の幻想に過ぎず、植民地主義の連続性を日々思い知らされていく。

### 2) 東アジア冷戦と家族の離散・崩壊

解放後の日本に居住する在日朝鮮人女性の中には、日本「内地」の日本軍施設や軍関係企業の「慰安所」に連行された朝鮮人「慰安婦」やその周辺の性売買業者に吸収された女性たちも各地に存在した。その存在については朝鮮人の民族団体、在日本朝鮮人連盟（以下、朝連）もつとに関心を向け、彼女たちを地獄のような生活から救出しようと努力した記録も残っている（「同胞女性救出急務 北海道同胞の消息」『民衆新聞（原文は朝鮮語）』1946年4月15日）。

しかし朝連への日本政府の弾圧が増し、存続自体が危ぶまれてくると、少数派である彼女たちにまで関心を向ける余裕をなくし、やがてその記憶も共有されなくなると、当初から在日朝鮮人社会が家族や宗族の縛りとともにあったかのようなステレオタイプが集団の記憶として受け継がれていく。民族団体の政治的危機とともに、在日朝鮮人社会では集団の記憶だけが残り、個人は急速に不可視の存在と化した。

多数派であった「家庭婦人」で朝連周辺の開明的な女性たちは、植民地期に実践できな

かった子どもの民族教育から着手し、家庭の近代化を図ろうとするが、やがて解放後の混乱、朝鮮半島の南北分断と朝鮮戦争、GHQ の対日本政策の変更とともに加えられるようになった朝連への弾圧、と状況が悪化すると、家族・宗族・民族団体を守る運動へと変化していった。

在日朝鮮人の最初の女性組織は在日朝鮮人の集住地域である東京都足立区や大阪市生野区で生まれたが、金天海のような男性活動家は本国の女性全国組織である朝鮮婦女総同盟（以下、婦総）をモデルにした女性組織、在日朝鮮婦女同盟（仮称）を組織しようとし、在日朝鮮人女性組織が全国的に生まれる前にすでに婦総の行動綱領を下地にしたものが作成されていた<sup>1</sup>。リーダー的存在として活躍した金恩順<sup>2</sup>は金天海どうよう社会主義的な新女性像を目標に、女性大衆に啓蒙していたのである。

1946年8月には女性組織の構想はできていたが、全国組織が実現するまでには1年以上の時間を要した。1947年10月になって誕生のはこびとなるが、当初予定されていた在日朝鮮婦女同盟という名称は在日本朝鮮民主女性同盟（以下、女同に略）に変更された。それはモデルとなっていた婦総が1947年2月の第2回大会で南朝鮮民主女性同盟と改編・改称されたことによる<sup>3</sup>。本国に追随するような形で女性組織とその理念が生まれたが、実際の女性を巡る状況は本国と在日とでは大きく異なっていた。多くの女性大衆は近代的な学校教育はおろか識字すらできなかつたので、女同初代委員長に選ばれた金恩順のような女学校出の新女性は貴重な人材だった。朝鮮戦争の始まった1950年に中央大学法学部に入学した康氏（1933年生れ、5歳で渡日）によれば、女同のメンバーと自分との教養や意識の懸隔にむしろ疎外感を感じ、参加できなかつたそうである。この証言のように、むしろ女同を支えていたのは、数少ない指導者を除いては、多くが組織の幹部や活動家との地縁、血縁で構成されている、いわば大家族の女性たちだったといえるだろう。

在日朝鮮人女性の抱えていた課題は、本国の女性たちと異なる条件・状況にあったために、当初婦総が掲げた行動綱領は「絵に描いた餅」に過ぎず、基本方針として啓蒙教育活動が優先的に採択された。具体的な啓蒙教育の内容としては、朝鮮語、婦人問題、社会学、衛生、音楽、朝鮮衣服、料理、育児法などであり、いわば近代的で合理的な家政学を柱とした近代的良妻賢母教育が目標とされた。また解放後の混乱による家族離散など家族の問題に苦しむ女性も少なくなかつた。家族離散は家長の重婚や妻以外の女性との同棲につながり、伝統的なジェンダー規範に社会的な要因が加わり、妻を苦しめるケースも散見された。「蓄妾」問題の解決が女同の重要な案件となったのも、そのような背景がある。

<sup>1</sup> 1946年1月開催の朝連第4回中央委員会で婦女部設置を決議し、行動綱領を準備した。行動綱領は以下の通りである。1. 婦女の完全な解放と男女平等実現、1. 18歳以上男女人民の選挙権被選挙権享有、1. 一般婦人文盲退治、1. 公娼妓廃止、人身売買絶対反対  
1. 半封建的奴隷的因習廃止、1. 婦女の過激労働禁止、1. 新生活運動展開、1. 世界進歩的民主主義婦人運動に提携、1. 言論、出版、集会、結社、信仰の自由

<sup>2</sup> 朝連第2回臨時大会後には大阪出身の白侯男が女性部の部長として記録されているが、東京本部婦女部長であった金恩順の方が日本の婦人雑誌などへの投稿も含め、人々に記憶されている。

<sup>3</sup> 宋連玉「朝鮮婦女総同盟」『朝鮮民族運動史研究』2号（青丘文庫、1985年）参照。





千葉県婦女部結成大会(47年8月29日、写真はいずれも「朝聯ニュース」から)<sup>4</sup>

在日朝鮮人の婚姻状況を見ると、在日朝鮮人の集住地域と散在地域とでは、異民族結婚の比率に大きな違いが見られる。すなわち朝鮮人男性と日本人女性との婚姻<sup>5</sup>が大阪や福岡では全体婚姻数の4.6%、13%なのに、山形県、北海道では68%、62%、と高い比率を見せる。大阪や九州では早くから在日朝鮮人のコミュニティが形成されていたため、同族同士の婚姻を進めるネットワークが発達しているが、強制連行などで同胞の少ない地方に来た朝鮮人男性の場合、婚姻の対象が日本人女性しかない、あるいは日本人女性の側からも戦争により適齢期の日本

人男性が不在だったという事情もある。

朝鮮人男性と日本人女性との異民族結婚は居住地における特徴として表れるだけでなく、朝鮮人男性の学歴においても見られる現象である。日本の高等教育を受けた朝鮮人男性の場合、恋愛がもたらす(であろう)近代的な男女関係・近代的家庭へのあこがれ、植民地期に受けた皇国臣民思想、朝鮮人女性の識字率の低さ、などの諸事情が重なり、日本人女性を配偶者を選ぶケースが少なくない。若い朝鮮人青年を対象にした雑誌『青年会議』などでは、恋愛問題を特集に組むと国際結婚の是非を問う企画が登場するほどであった。また1930年代以降、民族問題よりも階級問題を優先して日本人・朝鮮人の共闘が行われてきたので、日本共産党周辺にいた人々の異民族婚も少なくなかった。1959年からの北朝鮮帰国事業で夫について北朝鮮行きを選んだ日本人妻の中にはこのようなケースも多く見られる。

ある女同の幹部は、日本人女性との婚姻の理由として、朝鮮人女性が近代化に立ち遅れていることに求め、女同の課題を近代化に置くべきだという意見もあった<sup>6</sup>。

1947年10月に開催された女同全体会議では、傘下に108,910人の女性が組織された。驚くべき組織率だが、これは個々人の自覚的な参加というより祭祀などを中心にした宗族関係、あるいは宗族的な生活形態が多くの女性の結集を促したのであろう。また植民地期の協和会への参加体験が組織参加への心理的抵抗をなくした面も否めない。

筆者に、下関在住で在日本朝鮮人総連合会(以下、総連と略す)に所属していた親戚がいるが、総連を選んだ理由を聞くと、政治的・思想的な理由からでなく、近所づきあいといった感覚で選んだ、という答えが戻ってきた。もちろん、すべての総連関係者に該当するものではないが、女性の場合とはくに宗族的な意識が強く働いていたと言える。相互に扶助することで生きのびてきた日本での現実が、民族組織は言うまでもなく、朝鮮戦争時の日本共産党入党ですら、集団で決定したのである。

<sup>4</sup> 呉圭祥「解放5年、同胞女性運動②」『朝鮮新報』2007年4月14日号より転載。

千葉県婦女部結成大会においても男性の位置の重要性が写真によく表れている。

<sup>5</sup> この時期は統計などの記録に残るのはほとんどが朝鮮人男性と日本人女性との婚姻である。朝鮮人(韓国籍含む)女性と日本人男性との婚姻が逆転するのは1970年代以降のことである。

<sup>6</sup> 三多摩本部長・姜光淑「婦女運動の諸問題」『解放新聞(朝鮮語)』1947年2月1日号。

よってこの女同の大会では家庭の民主化、女性指導者の登用、国際結婚に対する認識、子どもの教育問題、「蓄妾」幹部のリコールなど、女性に関わる日常的な課題の解決を目指し、広く女性大衆の支持を得ることができた。しかし女性組織の大会で女性独自の問題を焦点化できたのはこの時期だけであった。この後、東アジアの冷戦構造の下で、朝連の存続が危うくなると、女性問題を単独に掲げ、それに向けて闘うことは不可能になる。解放後の在日朝鮮人女性は空間的には第三世界に身を置いていたと言えるし、そもそも第三世界の女性にとって、日本や米国の女性解放理論は有効ではなかった。

### 3. 朝鮮戦争と生存闘争

#### 1) 済州島4・3事件が在日朝鮮人社会に与えた影響

1959年	慶尚南道	慶尚北道	全羅南道	済州道
京都市	14,822	8,907	2,014	1,297
大阪市	17,591	12,111	12,452	48,469
東京都	13,442	9,884	5,914	14,438

1964年	慶尚南道	慶尚北道	全羅南道	済州道
京都市	15,573	9,214	1,983	1,103
大阪市	22,088	15,316	13,924	49,912
東京都	14,490	10,625	6,394	15,963

1974年	慶尚南道	慶尚北道	全羅南道	済州道
京都市	17,709	11,134	2,138	1,357
大阪市	24,175	16,417	14,069	53,463
東京都	15,529	11,009	6,134	18,799

出典；各年次「外国人在留統計」

上の表は在日朝鮮人が集住する京都、大阪、東京の出身地方別の人口統計である。この統計から大都会に住む済州島出身者の比率が他地方出身者よりも高いだけでなく、大阪、東京においては済州島出身者が常に首位にあることが判るだろう。ちなみに1966年の韓国における人口統計では慶尚南道は16.52%、慶尚北道は14.00%、全羅南道は11.48%であるが、済州道（1946年より全羅南道から独立して済州道に昇格）は1%（337,300人）に過ぎない。植民地期に済州島からアジア最大の工業都市・大阪への直航便があったために、ほとんどの青壮年層が島から日本へ向かったという背景もあり、朝鮮半島での境界、済州島は在日朝鮮人社会、とくに大阪、東京においては多数派であった。この済州道出身者に衝撃を与えたのが、1948年に起こった南の単独政府樹立に反対する4・3事件である。韓国政府軍の犠牲となった済州道出身者の家族は、韓国政府への不信感を強くし、その結果北朝鮮へ期待するところとなった。4・3事件を軸に、出身地と政治的な立場とが重なり、その仲間意識や紐帯はいっそう強まった。また4・3事件では知識人の受難が大きかったという経験から、一世たちは子どもに、とりわけ娘の教育に対し、以後否定的な反応を示す

ことになる。

濟州4・3事件に続き、大阪、神戸で民族教育弾圧に反対する4・24教育闘争が家族ぐるみで展開された。1948年初から米国は日本を反共の防波堤にするべく、対日本占領政策の転換を図り、在日朝鮮人の民族教育にまで介入してきていたが、同年、8、9月に南北それぞれに単独政府が樹立され、朝連が北の朝鮮民主主義人民共和国を支持するようになると、朝連への弾圧は過酷さを増してきた。

## 2) 女同に集約された在日朝鮮人の政治的課題

1948年に開催された女同全体大会で、韓徳銖(1955年から総連初代中央議長)は男性活動家の重婚を問題視するのは偽りの男女平等だと批判し、瑣末な問題より国家的な使命に応える女性運動を要求した。瑣末な私事は公領域の問題につながるという視点は当時の日本のフェミニズムにおいてもまだ登場していなかったが、韓徳銖の家父長的な考えや主張に反論するには、在日朝鮮人を取り巻く政治的暴圧があまりにも深刻であった。

同時期の日本人女性は、旧民法から解放され、長年の目標だった女性参政権をはじめ、男女平等を実現する法制度を獲得しつつあった。

同じ空間で、同じジェンダーを生きながら、まったく異なる条件のもとに日本人女性と在日朝鮮人女性の生の営みが分断されていたのである。

1949年9月に団体等規制令で日本政府が朝連と在日本民主青年同盟(以下、民青)を解散させられた時、女同が朝連に代わる組織としての重責を担った。1948年12月の女同第2回全体大会では食糧完全配給闘争、協同組合闘争、生活近代化などが決議されたが、中華人民共和国樹立後の49年10月に開催された全国代表者会議では生活防衛と平和擁護が行動綱領として採択された。女同の活動や、一般女性の食糧調達や密造酒に対し、警察権力は死傷者を出すほどの暴力を加えた。民族組織内の性差別に対する反発よりも、ともに生き残るための連帯が意識される時代であった。

## 3) 経済闘争であり、政治闘争でもあった密造酒

日本では元来、農民が酒・たばこを自家用に生産してきたが、日清戦争後の国家財政立て直しのために酒税法と煙草専売法が定められた。それまで農民が楽しんできた酒作りは禁止され、違反者は懲罰の対象となった。それでも密造酒をする農民は後を絶たず、農民と税務署の抗争は普遍的に見られ、農民自身も密造酒をさして罪悪だとは感じないできた。

在日朝鮮人にとってどぶろくは長年なじんできた嗜好品であり、また困窮した生活の方便として、どぶろくを始めとした密造酒はなくてはならない経済活動であった。もちろん密造酒は在日朝鮮人が独占的になしたものではない。そこには原料のコメ、麦、麴などを供給する日本人や密造する沖縄、奄美出身者<sup>7</sup>もいたが、在日朝鮮人への政治的弾圧が強まる中で、密造酒する在日朝鮮人像だけが表象化されるようになる。

在日朝鮮人と密造酒の関係がどうだったのか、集住地域である神奈川県川崎市を例に見

<sup>7</sup>内菡惟幾「税務職員殉難小史」(『税大論叢』12号、1978年11月)にはアジア・太平洋戦争末期に沖縄、奄美大島から宮崎県大島部落の軍事工場に強制疎開させられた人びとが、敗戦後失職し、900戸のうち500戸が密造酒をしていた事実を紹介している。住民は取締りがあっても他に生きる道がなかったので密造酒をやめようとはしなかった。



ていきたい<sup>8</sup>。

川崎新聞によれば、密造酒取り締まりの記事は1947年3月3日から見られるが、この数日前に桜本町全域において朝鮮人の密造酒を押収した。二日前には朝連主催の3・1独立運動記念の人民大会があったばかりで、3,500名の朝鮮人が参加している。同年6月25日の川崎新聞によれば同月23日に10余台のトラックに武装警官200名、税務署員100名が乗り、朝鮮人集住地域を包囲し、朝鮮人98名を逮捕したが、これに関連して税務署課長が死亡した<sup>9</sup>。現在も川崎南税務署の前に東京国税局から遷されてきた「殉職」署員の顕彰碑が立っている。

密造酒の摘発というには、武装警官200名の動員は尋常な事態ではない。密造酒問題は財政上の問題ばかりでなく社会問題・治安問題の対象<sup>10</sup>となったとあるが、逆に治安問題の対象である朝鮮人を弾圧するために密造酒取締りを口実にし、財政的にも治安的にも一石二鳥を狙ったと言えるだろう。1948年4月に済州道で4.3事件が、大阪、神戸で阪神教育闘争があったが、同年の前半6ヶ月間に神奈川県下で警察が密造酒人を急襲したのが27件であり、その内の21件が朝鮮人、6件は日本人だったにもかかわらず、密造酒は朝鮮人の反社会的行為としてマスコミに喧伝されていった。度を過ぎた弾圧ぶりに女同の女性たちは横須賀警察署に押し寄せ、「正業に就くにも使ってくれなければ、ヤミ(ドブクロ作り)をしなければ子どもを養えない」と抗議の声をあげた<sup>11</sup>。

米国の対日政策において逆コースが進むと、政治的な弾圧は露骨になっていった。朝連解散令の出た1949年9月に、警察が朝連台東支部の入っていた建物を接收しようとして、119名の朝鮮人を検挙するが、その中に含まれていた女性で性的な嫌がらせを受けた者もいた<sup>12</sup>。

敗戦に悲しむ日本人の横で民族解放を喜んだ朝鮮人、反共的な立場を明確にしていく日本において北朝鮮を支持する朝連、密造酒という反社会的な営みを執拗に続ける在日朝鮮人、このような在日朝鮮人像をさまざまなメディアによって喧伝していく中で、戦後の朝鮮人観が形成されていく。

朝鮮戦争が勃発すると、反戦運動を封じ込めるために密造酒がきわめて政治的に利用される。大阪南部の多奈川町(現、岬町)には軍事用造船ドック建設のための川崎重工業が4,000人以上の朝鮮人を徴用していたが、敗戦と同時に彼らを解雇した。半数の朝鮮人は途方に暮れ、廃品回収、日雇い、密造酒に従事する。多奈川町の密造酒は味に定評があったが、原料の供給と販売は日本人が担っていた。朝鮮人、日本人がともに助け合うことで地域の生活が成り立っていた。しかし朝鮮戦争下の1952年3月26日明け方に検察庁、国

<sup>8</sup> <http://www.halmoni-haraboji.net/exhibit/archives/disp00/S0017.html>

川崎在日コリアン生活資料、山田貴夫編集

<sup>9</sup> 前掲内菌論文には、「検事2名、警察官206名の応援を得て税務職員88名を動員し、…(中略)…MPを加えて、ジープを先頭にトラック20数台を連ねて桜本町に突入し」「密造者100余名を検挙し」とあるが、税務署の記録と新聞報道には数の上においても違いが認められる。同論文によれば、1947年に2回にわたって酒税法改定がなされ、税率が大幅に引き上げられた。

<sup>10</sup> 大蔵省昭和財政史編纂室『昭和財政史』1958年、421頁。

<sup>11</sup> 『神奈川新聞』1948年11月23日。

<sup>12</sup> 『婦人民主新聞』1950年3月31日。

税庁、警察の合同で、一帯を襲撃し、女、子どもまでが抵抗した。再び30日明け方に武装警官450人を動員し、朝鮮人の側に死者1名を出し、19人を起訴処分にした。この事件の背景を調査した朝鮮人記者は、多奈川町一帯の軍事基地化計画に反対する朝鮮人の反戦運動を弾圧する口実として密造酒が使われたと語っている<sup>13</sup>。朝鮮戦争前後に密造酒に絡む朝鮮人襲撃事件が頻発する。1949年4月新潟県中頸郡、1952年11月青森県五所川原などがあるが、1948年に秋田県での秋田酒税法違反事件に弁護をかってでた布施辰治は、日本政府の朝鮮人に対する無責任と無策が招来した結果だと弁論した<sup>14</sup>。

密造酒は敗戦後に失業した人びとの選択の余地なき経済活動であるが、それは国家財政を脅かし、国家に真っ向から挑戦する営為でもあった。この密造酒には女性の手仕事を中心にあつたが、だからこそ女性たちは酒や道具の押収や生産現場への襲撃に対しても一丸となって抵抗し、官憲の女同に対する圧力も強まっていった。

#### 4. 階級闘争に隠された植民地主義

##### 1) 日本共産党と在日朝鮮人

前述のように1949年の朝連と民青への解散令、金天海たち幹部28名のレッドパージ、組織の財産没収処分の後、在日朝鮮人運動への期待が女同へ集中した。戦力を失った民族団体の指導者たちは、朝連解散令の取り消しと吉田内閣の打倒を叫び、日本と世界の民主勢力に連帯を求めた。女同委員長の金恩順は「朝鮮女性は訴える」と題し、『婦人公論』1953年8月号に文章を掲載したが、同じ母親の立場で階級闘争を共闘しようと呼び掛けている。

日本共産党も反米、反吉田、反再軍備統一戦線を発展させるために、在日朝鮮人と共通の課題を抱えていると唱えた<sup>15</sup>。日本共産党はすでに朝鮮人部を内部に置いていたが、朝鮮戦争勃発後は民族対策部（以下、民対）を設置した。

1951年に在日朝鮮人統一民主戦線（以下、民戦）が朝鮮人組織として結成されたが、当時日本共産党党员でありながら民戦の活動家だった姜在彦氏は、民戦が日本共産党民対の下部組織であったと証言する<sup>16</sup>。姜氏は日本共産党の朝鮮認識の限界を次のように語る。すなわち、1930年代から朝鮮人でも居住する日本の共産党に加入しなければならないという一党原則から、日本人・朝鮮人がともに活動してきた。解放後も日本共産党の朝鮮人に対する指導と指導者意識は続いた。階級や社会主義革命という大義名分のもとに植民地主義が問題にならずに、歴史の転換点を素通りした。民戦の結成後、日本共産党が朝鮮人に対する方針を第4回全国協議会（以下、4全協）で出したが、そこには在日朝鮮人は日本の少数民族だと規定されている。指導者の方針によって女性を含む近隣の住民たちが集団で日本共産党へ加入した。日本共産党加入に対し、筆者がインタビューした在日朝鮮人の大部分が、葛藤、相克を感じながらも時代の空気に呑まれたまま、反戦運動をしたと言う。

① 金英氏（1925年生まれ）中央大学に在学中、反戦ビラを作成し撒いたことで逮捕

<sup>13</sup> 『朝鮮評論』1952年4月号。

<sup>14</sup> 高史明ほか著『布施辰治と朝鮮』高麗博物館、2008年、参照。

<sup>15</sup> 日本共産党中央委員会「在日朝鮮人運動に対し」『前衛』1954年5月号。

<sup>16</sup> 「民戦時代の私」『体験で語る解放後の在日朝鮮人運動』神戸学生青年センター出版部、1989年、参照。

される。米軍軍事裁判で3年の刑を言い渡され、2年服役。布施辰治が弁護。日本共産党のもとでも民族差別は存在したと証言。

② 黄永泰氏（1925年生まれ）1946年に中央大学に入学。反戦ビラを撒いて逮捕される。日本共産党の指示で活動することに疑問を感じたようだ。

③ 康順善氏（1933年生まれ）中央大学在学中に父親とともに入党。

しかし、日本共産党入党への疑問を表明した人物もいなかったのではない。李康勲は上海で爆弾テロ事件で逮捕され、解放後に金天海、徳田球一らと東京府中刑務所を出所した闘士だが、民戦は民族団体であって日本共産党の先兵ではないという声明を発表し、1954年に民戦を脱退する。筆者がインタビューした呉信鍾氏（1925年生まれ）も中央大学卒業後、民族学校教員となるが、教員が一括して日本共産党へ入党することに疑問を感じ、入党を拒否したが、そのことが後々まで問題視される。

1952年、東京メーデー事件、大阪吹田事件、名古屋大須事件で逮捕者総数が1751名、その内、朝鮮人が372名なので、全体の20%を朝鮮人が占める。この高い比率は朝鮮戦争への反戦意識が朝鮮人のほうが切実だったこともあるが、階級意識を共有するという錯覚から前衛党が自らの植民地主義に無自覚だったことにもよる。朝鮮戦争時期を回想したある日本人は<sup>17</sup>、日本人の反戦運動が不振だったのは、他者の犠牲で富を蓄積したことへの痛みの欠如だと指摘する。

一方、民戦本部は朝鮮人の側の犠牲の大きさに、日本共産党の方針に疑問を抱くようになるが日本共産党の武力闘争方針は1955年まで続く。日本共産党に在日朝鮮人が大量に加入することで、健康保険のない時代でもタダ同然に共産党系医療施設で診療を受けることができたが、共産党も含めた日本社会が植民地主義に無自覚な状態を長引かせたというマイナス面も指摘せざるを得ない。

1954年に北朝鮮の南日外相が日本政府に向け、在日朝鮮人の処遇に抗議する声明を発表、さらに日本共産党が極左冒険主義を反省する声明を出すや、在日朝鮮人は日本共産党から大量に脱退した。北朝鮮を支持する在日本朝鮮人総連合会が1955年に発足し、日本への内政不干渉を唱えるが、それ以来日本人と朝鮮人のすみ分けが始まり、双方が共闘の歴史も植民地主義も問う機会を失ってしまう。

## 2) 日朝女性たちの連帯の実情

この時期には日朝女性の連帯は果たして実現したのだろうか、婦人民主新聞<sup>18</sup>に探ってみよう。婦人民主新聞は、自立した近代女性をモデルに提示しながら、敗戦後の困窮を克服する家政学的知識や情報を提供、あるいは連合軍兵士を相手にする街娼の実情、西欧女性の姿などが記事に書かれている。初期の朝鮮関連の記事には舞踊家・崔承喜の近況を伝えるものもあるが、米国の対日政策が転換するころから、朝鮮半島の情勢や在日朝鮮人女性の様子を伝える記事が見られるようになる。その中で1950年8月25日、朝鮮戦争勃発直後に竹本員子という女性を書いた記事を紹介しよう。彼女は日本人も朝鮮人も共に日本帝国主義の犠牲者であるが、日本政府は自らの失策を朝鮮人になすりつけようとし、日本

<sup>17</sup> 不破三雄「李さんのこと—体験のなかの朝鮮戦争」『思想の科学』88号、1969年6月。

<sup>18</sup> 婦人民主新聞は宮本百合子や佐多稲子が結成した婦人民主クラブの機関紙であり、1991年からは「ふえみん」と改称している。

人は朝鮮人を蔑視し連帯の対象とみなしていない。日本人は過去の帝国主義のわなから抜け出す必要がある。さらに、日本は米国の植民地だという現状認識から、朝鮮植民地支配の歴史に教訓を学ぶべきだと訴えている。竹本氏は日本人も朝鮮人も同じ帝国主義の犠牲者だと同一視しながらも、その差異にも気付いている。彼女の植民地主義を問う萌芽的な感受性も検証されたり、継承されることなく、高度成長の波に洗われてしまう。

筆者は、川崎市の集住地域で看護師として長年務めた中里チヨ（1926年生まれ）氏<sup>19</sup>にもこの時期の朝鮮人との連帯について尋ねたことがある（2005年1月）。中里氏は1951年に川崎に移り住み、1952年に川崎労働会館で開催されたメーデーの前夜祭に参加したが、警察の急襲に会い、5人一組になって逃げた。事前に幹部から危険な目に会った時は朝鮮人のいるところに避難するようにと指示されており、朝鮮人に救いを求めたそう。この時の恐怖感がもとで共産党へ入党するが、朝鮮人を日本人の盾に使う、信頼感に隠された利用主義を内省するほど、日本人も朝鮮人も皇国臣民思想からフリーではなかったのだ。

前衛党は連帯を叫んでも、実際は日本人と朝鮮人は別動していた。当時、非合法的な行動は小グループを編成して行ったが、反省ビラをまいて検挙されたり、密造酒取締りに抗議する女性グループの姿は新聞で見ると限り、朝鮮人女性であり、日本人女性の姿は見られない。観念的に連帯を叫んでも、実際の生活・闘いの場では切迫した朝鮮人女性の姿しか見られなかったのである。

中里氏はメーデー前夜祭の前にも後にも在日朝鮮人に対する知識は皆無だったそうだが、その後長年集住地域で看護師をしながら、在日朝鮮人の置かれた厳しい状況を理解するようになったと言うことだ。

### 3) 北朝鮮帰還運動

朝鮮戦争時の北朝鮮の人口は正確には把握できないが、多く見積もって約1,000万人だとしても、戦死者が250万人という数は、働き手をほとんど失ったことを表す。北朝鮮当局は戦後の労働力確保と国土再建のための技術や専門知識を手に入れるために、在日朝鮮人の帰還事業を図った。日本にとっては植民地難民を排除するチャンスであり、民族差別に苦しむ在日朝鮮人の若者は北朝鮮を自己実現できる新世界とみなした。とくに女性にとっては、植民地主義によって再生産される家父長社会から性差別のない理想社会への飛躍と受け止め、一線で活躍していた女性たちが率先して帰国した。在日朝鮮人社会で女性リーダーとして活躍した金恩順も第一次帰国船で北朝鮮へ渡っている。

1959年から1984年まで続けられた北朝鮮への帰国事業は、在日朝鮮人女性の歴史をいまなお断絶したままである。

## 5. おわりに

植民地難民としてジェンダーの複合的な差別を生きなければならなかった在日朝鮮人女性にどのようなフェミニズムがありえただろうか。在日朝鮮人女性は民族解放直後の解放空間で、家族の離散や崩壊に抗いながら闘った。なぜなら個人として生きる条件が与えられ

<sup>19</sup> 従軍看護婦として海南島に行った経験を持つ。そこで朝鮮人「慰安婦」の惨状を目撃したが、1946年に帰国。

ていなかったからである。狭義・広義にかかわらず「慰安婦」として戦地の「慰安所」に連行された女性の多くは、拘束する家族とも保護してくれる家族とも切り離された存在だった。日本で、個人として生きる在日朝鮮人女性は、歴史的存在である自らを否定し、日本人に成りすまさなければ生息が許されなかった。現代版の皇国化といえる生き方を選択してはフェミニズムの本来の意味からは遠のいてしまう。

朝鮮人コミュニティに留まった女性たちは、密造酒への度を越した弾圧にも1952年から始まった監視のための外国人登録法にも率先して闘った。このような闘いを指して、性差別を必然的に内包した民族主義だと言えようか。民族主義に固執する家父長たちを懲らしめるために、日本女性と共闘すべきだったのだろうか。それが実現するような条件が朝鮮戦争下の日本に、在日朝鮮人に与えられていたのだろうか。

1950年代は日本人にとっても生きることが困難な時代だったが、日本人女性と在日朝鮮人女性が置かれていた条件が異なるために、地域によっては相互に助け合う局面もあったが、共闘を物語る資料は見いだせない。同じ帝国主義の犠牲者とはいっても、犠牲を序列化した構造を解体するビジョンや思想は出てこなかった。互いに内政干渉をしないと宣言をした1955年からはむしろ実像が見えないまま、観念的で儀礼的な交流に終わってしまい、植民地主義の問題を明らかにできないで来た。

経済的・高度成長以後の日本女性の解放理論は経済的自立を前提とした。しかし日本企業の就職差別、就職に必要な学歴からの疎外は在日朝鮮人女性の経済的自立を不可能にした。在日朝鮮人女性が従事する経済活動は家族労働に支えられる飲食業や零細家内工業が多かったからである。日本社会での在日朝鮮人の存在形態は、家父長制を必要とする構造に支えられていた。

昨今、日韓の女性学者交流で、家父長制を植民地主義と切り離して、比較文化の対象とすることが盛んにおこなわれているが、その行きつく先は、日本が家父長制の克服という面からも先進国だという結論しか出て来ないだろう。

フェミニズムがそもそも性差別を生み出す構造を解体しようとする試みであるのなら、「無学な」女性たちの密造酒闘争が、国家の根幹を脅かす闘いを挑み、本来の意味でのフェミニズムにつながる可能性を持っていたのではないだろうか。

## 参考文献

- 朴慶植、1983、解放後の在日朝鮮人運動 1～2 アジア問題研究所
- 朴慶植、1984、解放後の在日朝鮮人運動 3 同上
- 朴慶植、1975、在日朝鮮人関係資料集成 第2巻、三一書房
- 日本赤十字社編、1956、在日朝鮮人の生活実態、日本赤十字社
- 朴在一、1957、在日朝鮮人に関する総合調査研究、新紀元社
- 宋連玉、2006、在日朝鮮人にとっても戦後復興『沖縄の占領と日本の復興』青弓社

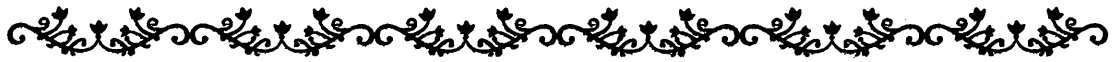
1969.9 朝鮮戦争特集『思想の科学』

高史明ほか著、2008、布施辰治と朝鮮 高麗博物館

大阪府朝鮮人強制連行真相調査団、1991、泉南における朝鮮人強制連行と強制労働、同  
会

朴慶植ほか著、1989、体験で語る解放後の在日朝鮮人運動、神戸学生青年センター出版  
部

川島高峰編、2000、米軍占領下の反戦平和運動－朝鮮戦争勃発前後 占領期全国治安情  
報



## 第二次世界大戦後日本の「女性解放」について

— 繊維労働者の経験から考える

藤目ゆき

(はじめに)

米国のイラク攻撃・占領を正当化するために日本モデルが持ち出されたとき、日本では歴史研究者の間から強く反論と批判の声があがった。占領史研究者は日本占領とイラク占領の条件・内容の差異を論じ、前者を後者のモデルにする不当性を論じた。女性史研究者は従来の占領史研究の視野の外にあった占領米軍人による性暴力の事実を指摘し、日本占領の美化を批判した。加納美紀代氏は「女性にとって良い占領はない」と断じている(加納, 2008: 5～10)。

だが日本社会一般に、米国主導の「戦争・占領による女性解放」のイメージが普及し定着していることは否めない。米国政府が自国のアフガニスタンやイラクへの戦争をムスリム原理主義からの女性解放の戦いだと主張し、マスメディアがこれを喧伝した影響は大きい。が、日本人がそんな宣伝を素直に受けとめる一つの要因は、「戦後強くなったのは女と靴下」というフレーズに代表されるような、敗戦と占領がもたらした民主化のおかげで「戦後日本の女性は解放された」という観念が国民的に浸透していることである。女性史叙述においても暗黒の戦争・悲惨な敗戦の章の後には「戦後の民主化と女性解放」の章が続くのは普通である。加納氏も性暴力以外の側面では占領政策を批判しているわけでない。「戦後の民主化と女性解放」の内実を検証するには、女性の生活・経験の諸相をジェンダーのみならず階級性と民族性に着目して考察することが必要であろう。本稿では、日本の女性労働者たちの日本敗戦から朝鮮戦争勃発という時期の経験に着目し、戦後の女性解放について考察する<sup>1</sup>。

女性労働協会は「戦後の改革と女性たち〈1945～1955年〉」を次のように説明する。

「民主主義国家として新たなスタートを切った戦後、さまざまな改革が行われ、長年の女性の願いが実現した。戦後しばらくの間は社会と経済の混乱が続き、深刻な食糧難、生活難に人々は苦しめられた。しかし同時に戦争が終わった解放感と、占領下ではあったが、新しい時代をつくるという希望にもあふれていた。

戦後改革が進められる中で、婦人参政権の実現、男女平等を定めた新憲法制定、「家」制度を廃止した民法の改正、教育の機会均等、男女共学を定めた教育基本法制定など女性の権利拡大が図られ、女性の社会進出と地位向上への基本的な条件が整えられた。

やがて朝鮮戦争(1950～1953年)をきっかけに戦争特需が急激な経済発展の契機となり、その後輸出が拡大し、日本経済は本格的に復興への道を歩み始めた。糸へん景気・金へん

<sup>1</sup> 本稿は2008年5月30日に開催された漢城大学の戦争と平和研究所主催の国際学術大会に向けて執筆されたものである。

景気と呼ばれる好況の下で、労働力需要が増大し、繊維産業における技能工、生産工に加えて各産業分野にわたって事務・販売などの仕事に従事する女性が増えた。それまで女性に門戸が閉ざされていた職業や戦後新しく登場した職業にも女性が進出するようになった。」

2

これは敗戦後の時代を光に満ちた「民主化と女性解放の時代」とみなす典型的な描写の例である。ここでは明るい解放の時代としてのみ占領時代が説明され、朝鮮戦争は日本経済の復興と発展の契機であり、女性の職業進出の好機となったと説明されている。本稿では、この説明には無視されている、1960年代の高度経済成長まで日本の基幹産業・主要な外貨獲得産業であった繊維産業における女性労働者たちの経験をとりあげたいと思う。

## 1 戦前・戦中の繊維産業と女性労働者

近代日本の資本主義は長時間・低賃金・人身拘束といった劣悪な労働条件で働く繊維産業の女性労働者に支えられて発展した。紡績労働者（女性・子ども）に対する前近代的な前貸制度や人格的隷属、拘禁、虐待を伴いつつ、長時間労働・低賃金による苛酷な搾取が行われた事情は、横山源之助『日本之下層社会』（1899年）、細井和喜蔵『女工哀史』（1925年）などが明らかにしている。寄生地主制度下の農村は潤沢な労働力供給基盤であり、高額の小作料・負債に苦しむ貧農家族から膨大な娘たちが「口減らし」として工場へ送り出された。紡績資本は国際競争・資本輸出の先兵となり、特に中国に対する紡績資本の輸出は1920年代から膨張し、1930年の段階で、在華紡は中国における紡績・織布生産量のうち36%・45%を占めた（高村，1988）。また日本植民地支配を背景に朝鮮人が日本に渡航するようになり、朝鮮人女性の多数が繊維産業に就労した。戦前、泉州の繊維産業が発展し東洋のマンチェスターと呼ばれた大阪は、近代日本最大の朝鮮人居住地域であった。1892年に創立された泉州地方最大の紡績会社・岸和田紡績では、1930年頃、全工場労働者6000余名中、約20%が朝鮮人であった（横山，2001）。このように近代日本の繊維産業は、寄生地主制度下の農村と植民地支配下の朝鮮から低賃金で働く女性労働力を確保し、彼女たちからの搾取によって急激な発展を遂げたのである。

日本最初の労働者のストライキは1886年、甲府雨宮製糸女工によるものであった。89年には大阪天満紡績女工のストライキが起こっている。苛酷な待遇に耐えかねた女工たちによる自然発生的なストライキであった。が、労働組合運動が第一次大戦後に本格的な発展期を迎えても繊維女工の組織化は低調であった。その理由としてしばしば指摘されるのは、女工が年少で、しかも寄宿舎制度のため外部からの働きかけが困難であること、そして組合幹部の男子が封建的思想から女性を蔑視し女工の組織化を後回しにしたことなどである（鈴木，1989:207, 312, 318）。女性労働者は1932年に至るまで日本の労働者階級の過半を占めて

2 女性労働協会の前身は、1952年に当時の労働省婦人少年局（現・厚生労働省雇用均等・児童家庭局）の外郭団体として発足した婦人少年協会である。80年に財団法人となり、99年、「女性労働協会」と改称、働く女性の地位向上及び女性労働者の福祉の増進を図ることを目的に掲げてさまざまな事業を展開しており、2001年には労働省（現厚生労働省）の委託を受け、「女性と仕事の未来館」を開館した。引用文は同館の常設展示における「戦後の改革と女性たち」の説明文である（<http://www.miraikan.go.jp/tenji/ayumi/004/001.html>）。



いたが、その組合組織率は概して低かったのである。

それでも金融恐慌から昭和恐慌へと不況が続く中で、人員整理や賃下げに抗して各地で女工たちは労働争議に立ち上がった。不況下の繊維産業は「合理化」を進め、1930年の一年間に紡績の60社合計で46000人が減少（内女性は77・8%）した（黒川他, 1978:164~165）。労働争議は紡績工場に集中的に起こった。「無組合・無争議」を誇る温情主義（家族主義）の牙城・鐘淵紡績に初めて争議がおき、また同じく温情主義経営を掲げていた倉敷紡績にも争議が起きた。また朝鮮人女工が多く働いていた大阪泉南地方の岸和田紡績堺分工場では日朝の女工が共同闘争を展開、ともに争議を闘った。減給即時撤回、等級制の改善、食事休憩、帰国退職手当の制定、解雇絶対反対などを要求してストライキに入った堺分工場の日朝労働者198名のうち女工は100名、その半数は朝鮮人女工であった。民族的な差別を乗り越えたこの争議は金賛汀の著作などを通して広く知られている<sup>3</sup>。また同年、東京では、女工の争議として戦前最大の規模の東洋モスリン株式会社亀戸工場の争議がおき、約3000人の従業員のほとんどがストライキに突入した。繊維資本の常套手段である父兄を利用しての強制帰国攻撃、暴力団による脅迫や暴行に抗して女工たちは果敢に闘争した。

だがこのような争議をふくめ、恐慌下の労働運動は女性労働者の勝利とはほど遠い末路となった。洋モス争議では女工の惨敗に終わり、その結果女工の三分の一は亀戸あたりで徘徊といわれ、酌婦などに「身を落とした」といわれた。労働争議で解雇された女工が「まともな」職業につくことは困難であった（鈴木, 1989:152）。ある女性は、居候や女中などを転々として、裏町の活動小屋の女給になった。が、一ヶ月半たっても給料がもらえない。「やがて近くの有名な私娼魔窟へでもいくか、めし代かせぎの男を見つけるかの外、食ふべきすべがない。」「洋モスの女工さんが亀戸の私娼窟に暗の華として、30何名か咲いているそう。裏町のカフェーはいふまでもなく、勿論すぐ近くの玉の井私娼窟にも咲いていることだろう」（田村, 1931:103）と書いている。

1931年に「満州事変」が勃発し、以降、日本は中国東北侵略戦争、日中戦争、アジア太平洋戦争・第二次世界大戦へと進み、45年に連合国のポツダム宣言を受諾して無条件降伏するまで戦争の続く、いわゆる15年戦争の時代を経過することになる。女性労働者たちの苦闘は報われず、軍国主義とファシズムの嵐に呑み込まれてゆくことになる。

日本の労働戦線は普通選挙法—治安維持法体制の成立とともに分裂、金融恐慌から昭和恐慌へ、山東出兵から「満州事変」へといたる危機的状況のなかで、総同盟系（右派）、組合同盟—全労系（中間派）、評議会—全協（左派）の潮流へと分岐していった。右派は天皇制国家体制・日本の「満蒙」權益を擁護して愛国主義・国家主義への道を進み、左派は1927年の三・一五事件・1928年の四・一六事件などの弾圧をのりこえて1928年12月に全協を結成したが、その労働者権利擁護・反戦の活動はことごとく激烈な弾圧を受けた。全協系の組合活動家が次々に治安維持法違反容疑で検挙されるようになり、全協は33年頃にはほぼ壊滅状

<sup>3</sup> 1930年の岸和田紡績工場の争議もまた争議団の敗北で終わり、多くの労働者が誅首された。この争議後、泉南地方の多くの紡績・繊維工場が朝鮮人女子の採用を見合わせるようになり、朝鮮人繊維労働者の数は急減してゆく。15年戦争時代には軍需関連の中小企業が活況を呈し、繊維産業から排除された朝鮮人女性たちを吸収していった場合も少なくなかった（横山:265~266）。

態となった。伊藤千代子（1905-29）、平林せん（1910-34）、相沢良（1910-36）、飯島喜美（1911-35）らのように特高の拷問によって獄中で、あるいは釈放後まもなく若い生涯を閉じた女性活動家たちもいる。

1937年に日中戦争が勃発すると、侵略戦争へと人も物資もみな総動員する国家総動員体制の構築に向かって産業界の再編が進んだ。外貨獲得産業の花形であった紡績産業は戦時下に軍需産業が増強される中でしだいに影が薄れていった。女性にも軍需工場に働く者が増え、紡績工場から転出する女工が目立つ一方、繊維産業の就労人口は減少し、また業界内部でも機械管振りや運搬作業など男性が担っていた仕事を女性が代替するようになった。総同盟機関紙『労働』の労働婦人欄からも、日中戦争時代に繊維労働者たちが経験した苦難の諸相を窺うことができる。危険な重労働を担いながら、男の5分の1という低賃金で酷使されている職場からの投書もみえる（鈴木、1994:285）。研修もなしに機械の操作をさせられた新人が右手の指四本を機械にもぎ取られる大怪我をし、故郷へ追い返されてしまったことを投書して訴える女工もいた（鈴木、1994:286）。また紡績会社が労働者を労働組合から脱退させて、労働組合のかわりに国防婦人会を作らせようとしてきたことを憤る投書も寄せられた（鈴木、1994:280～281）。総同盟紡織川崎支部のある女性労働者は「紡績は不安です」と次のような文章を書いている。

「紡績はどうなってゆくのでせうか。新聞で見ますと紡績は大編成替へになるように出ておりますが、私共の工場も最近北支方面へ移転する噂もありおちつきません。又ズット人をへらしました。主に女ですが、そのへらし方がほんとうに腹の立つことばかりのやり方なんです。

無理に職場を替へさせられます。慣れた仕事場からなれない仕事場へ移ると、どうしても失敗したり、能率が下がったりしますとその人の落ち度にして、いたたまれなくしてしまいます。そして自分で身を引くやうにしむけておいて退職金や其田の恩典を取りあげてしまひます。ホントにどこまでも弱い者いじめをして泣かされます。

このごろ私共少しもおちつきません。他の工場へ変わる人が多いし、会社がどうなってゆくのやら不安でなりません」（鈴木、1994:291）

「労使一体、全産業人一体となって、国運の進展に資する」という趣旨で産業報国連盟が創立されたのは、1940年のことであった。各事業場・工場に産業報国会が結成され、中間派＝旧全労系は自ら解消して産報運動になだれ込み、労組を維持し産業報国会と労組の二本立てすることを主張していた右派＝総同盟も解散することになった。もとより右派による労組維持の主張は、侵略戦争のための国家総動員体制に反対する主張であったのではなく、国家総動員体制の確立において労働組合が独自の立場で国防に貢献することを提唱していたのである。前述の、会社による国防婦人会作りが労組つぶしの策動であると憤慨する女工の投書もまた、「国防の大切なことそれには婦人も自分の持ち場より参加する事は当然」とし、「労働組合が中心となって国防婦人会を作る」ことを対置していた（鈴木、1994:280～281）ことを指摘しておかねばならない。このようにして近代日本の労働組合運動はアジア太平洋戦争勃発前年までに完全に消滅したのである。

アジア太平洋戦時下、1943年に戦力増強企業整備要綱が制定され、平和産業の大部分の施設は休廃止され、その設備・資材・労働力を軍需産業に転用する政策が取られた。

戦局が緊迫の度を加えるにしたがい民需会社の軍需への転換が推進され、多数の製糸・紡

績会社が軍需工場に転用され、紡績機業は「十大紡」（東洋紡、日紡、鐘紡、日清紡、呉羽紡、敷島紡、倉敷紡、富士紡、大和紡、日東紡）へ再編統合され、生産ははなはだしく縮小された。

## 2 敗戦直後の繊維産業と女性労働者

### (1) 繊維産業の復興と全織同盟の創立

戦後、日本の綿工業の生産再開のために不可欠な原料として1946年から米国綿花の輸入が開始され、綿工業の生産と貿易が本格的に再開されていった。敗戦直後の数年間、GHQ・日本政府は繊維産業に外貨を獲得し日本経済の復興を牽引する役割を期待して繊維産業の復興支援をはかった。47年2月、GHQは日本政府に対して「来るべき数年において漸次輸出を増大させ得るよう中間水準として400万錠まで拡張すること」を勧告し、戦時中の企業統合によって集約され戦後に残存した十大紡と戦後に成長した新紡25社が生産拡大にのりだした。当時の貿易はGHQと日本政府が管理した。輸入された米綿は国有とされ、紡績会社は貿易公団からの受注により、その委託加工を行うという管理貿易である。綿織物輸出が海外諸国におけるドル資金不足などのために停滞すると、1948年2月には政府が業界団体を招いて輸出対策協議会を催し、米国向け綿製品の輸出、米国・日本・南方地域との三角貿易促進、綿製品バーター制の実施といった輸出振興対策を打ち出している（渡辺、2007、東洋紡績（株）社史編集室、1986）。

このようにしてGHQと日本政府が復興支援策をとったことから日本の繊維産業は急速な復興をとげた。戦前水準には及ばないものの繊維品の生産量・輸出量は順調に伸展し、繊維品は貿易が本格的に再開した1949年以降49年まで繊維品は輸出総額の50%以上を占め、高度成長期に至るまで日本の貿易構造に大きな位置を占めた。綿工業を中心とする輸出産業によって獲得される外貨がなければ輸入ができない実状であり、日本経済全体が綿工業に依存していたのである。

このような繊維産業の復興過程は、この業界で働く女性労働者にとってどのようなものであったらうか。

敗戦直後の労働界では、戦災・失業・飢餓といったとてつもない生活難とともに戦時下に治安維持報で囚われていた政治犯の釈放、GHQによる労働組合の奨励といった条件があいまって、労働運動が急速に発展し、労働組合の組織化が全国で燎原の火のように広がった。1945年末までに全日本海員組合、読売新聞従業員組合、東京ガス労働組合、東京交通労働組合、全日本教員組合をはじめとして707単位労働組合、37万8481人の組織をみ、1946年にはいると経営者による御用組合設立に反対し、全国の各地方に波及した地方労働組合協議会の結成、新聞通信・印刷・映画・通運・通信・炭鉱・金属・教員・化学など各産業で全国的産別整理が進み、8月に全日本産業別労働組合会議（産別会議）の第一回大会が開かれ、21組合・157万4,169人を擁して、新しいナショナルセンターが誕生した（大原社会問題研究、1949）。産別会議とその各単産・単組に婦人部が組織され女性の独自要求を担うようになり、国際婦人デーの取り組みや、婦人民主クラブや在日朝鮮女性同盟、消費組合女性部といった他の女性団体とともに日本民主婦人協議会を結成するなど、産別会議の発足は戦後の新しい女性解放運動を鼓舞する役割を果たした（藤目、2001）。

だが繊維産業に関してはヘゲモニーを握ったのは戦前の労働運動における右派潮流であった。1946年7月31日、128組合、11万7,972人の組合員を擁して産業別組合で全日本繊維産業労働組合同盟（全織）が結成され、翌8月1日第一回大会を開いた総同盟（組合数1,909、組合員数1,061,899人）の有力単産となった。全織は十大紡の労働組合を主流に漸次業種別、地域別の組織整理を進め、1956年には全国に概算100万名、日本の繊維産業労働者の内約28万名を組織していた。織布・染色・メリヤス・縫製などは中小企業の未組織労働者が多く、労働組合への組織率は低かったが、大企業を中心とした組織労働者の過半は企業別に全織が組織した（井上・松原, 1955）。

全織同盟は、戦前の総同盟系労働指導者が中心となって上から組織された。指導者の筆頭に挙げられるのが戦前から筋金入りの反共主義者として知られた右派労働運動界の重鎮・松岡駒吉(1888～1958)や金正米吉(1892-1963)である。松岡は1920年代には総同盟からの左派組合の除名に主導的な役割を担い、1932年総同盟会長に就任。右派労組の大同団結を図り16年全日本労働総同盟を結成して会長に就任、翌37年にはストライキ絶滅などの銃後三大運動を決議するなど、時流に迎合した。大日本産業報国会が創立され総同盟が解散した後の42年、翼賛選挙に非推薦で立候補した（落選）。敗戦後、松岡は西尾末広らとともに総同盟再建に動き、全織同盟結成大会で会長に就任、総同盟第一回大会で総同盟の会長に就任し、同年の衆議院議員総選挙に日本社会党公認で出馬し当選。以後当選6回。47年衆議院議長に就任。金正も松岡同様、戦前から右派労働運動の潮流で活動し、戦時下には銃後三大運動を推進した。敗戦と同時に松岡・西尾らと労組再建に取り組み、全織結成大会で副会長、総同盟第一回大会で副会長に就任。55年には日本生産性本部の生産性向上運動を支持し、生産性本部に総同盟として参加することを推進した。

松岡駒吉・金正米吉といった指導者の中で実際に組織づくりを推進したのは紡績会社の社員たちであった。後に全織会長となる宇佐美忠信は、高千穂経済専門学校（現高千穂商科大学）を卒業してすぐ富士紡績（株）に採用された。会社の「採用の目的は、これから労働運動が盛んになるだろうから、会社としても労働組合についての知識をもった者が必要だということ」だった。彼は本社の労務部労務課に配属され、社命で総同盟の松岡駒吉のところへ派遣された。当時総同盟は「再建準備会」を作り、松岡駒吉は富士紡や日清紡の会社に対して、総同盟の本部へ出向して働く者を派遣するように要請し、その要請に応える要員として富士紡と日清紡から各二人が派遣され、宇佐美はその一人に選ばれたのである。こうして宇佐美は1946年1月から「再建準備会」の下働きを始め、やがて総同盟の中に繊維の産別組織をつくるための準備会ができると、出向社員四人がその準備会を担当し、半年後の1946年7月に全織が結成された。このようにして全織は、労働組合や紡績労働について全く関知しないで労務課に配属された新卒社員によって準備会を担ったのである。宇佐美はやがて青年対策部を担当するようになり、1949年には「独立青年同盟」を組織した。さらに全織で総務部長、副書記長、書記長を歴任した<sup>4</sup>。

全織が指導する各職場の組合役員はほとんどが男子社員であった。圧倒的多数の組合員が

<sup>4</sup> 宇佐美は日本のアジアに対する戦後補償問題に関連して、日本の現状を「謝罪外交が繰り返され、若い人たちに自虐史観が植えつけられている」と憂え、この克服のために労組指導者が歴史観や国家観に見識をもちオピニオン・リーダーとして労組が真剣に取り組んでいくよう主張している（宇佐美, 1998）。

女性だったが、女性は職場の代議員会にすら進出が少なく、しかも役員的大部分が工員ではなく社員によって構成された。一般に大企業組合の幹部は三役・執行委員・支部長などが組合専従者である場合が多いが、十大紡の組合専従役員の平均給与は女工の十倍以上の月額4～5万円におよび、彼らが全織の中央執行委員会を構成した。全織の組合費はすべて給与から天引きされて徴収されたが、繊維産業の労働組合費は概して製造工業全般の平均を遙かに上廻った水準にあり、十大紡の企業組合は莫大な基金を保有したが、このような基金は労働争議のために使われるよりも組合幹部の給与に使われた(井上・松原, 1955)。

このように全織は旧来の反共・労資協調潮流の労働運動指導者と紡績資本の協力によって組織され、繊維産業の女性労働者は敗戦直後の自主的労働運動が高揚する時代にあっても、その多くが会社と全織が一体となった労務管理体制のもとにあった。

労働基準法の制定をはじめとして民主的労働改革が推進される中でも、繊維産業では戦後にも昔ながらの「女工哀史」的な搾取と労働者支配が温存された。繊維資本は設備のフル稼働と労働強化によって復興への道を邁進し、戦前来の搾取を維持することが労働密度の高い厳しい労働を強いることを可能にした。戦前の「女工哀史」のもとになっていた募集人制度も続いていた。募集人は全国の貧農地帯を供給源として、貧しい農家の子女を「工場で腹いっぱい食べられる」「親元へ月々送金できる」「嫁入り道具や着物も作れる」「女学校に入れてもらえる」と、甘言を弄して連れてきて、手数料を受け取った。女子労働者は工場と同じ敷地の中にある寄宿舎に收容され、会社の監視下に置かれ、募集人の了解なしには会社をやめることができず、耐えきれずに逃げ出す者は後を絶たなかった。戦後改革の深夜業禁止で労働時間は朝5時から夜10時までになっていたが、この時間帯は年少者でも女子でも働かせてよいので、労働者を目一杯働かせるために二交代勤務がとられ、変則的で密度の高い労働が行われた。このような労働実態がありながらも、戦前と同様、農村出身で未成年の女子労働者が大部分であり勤務年限の短く、寄宿舎に收容された閉鎖的、孤立的な労働、生活条件は労働者の団結をいちじるしく阻害した。こういう繊維女性労働者の状況を温存し、利用しながら、会社・組合幹部の思うままの労働者支配が続いていた。

## (2) 繊維産業で働く労働者たち——日紡貝塚事件

繊維産業で働く女性労働者の状況を、大日本紡績株式会社(以下、日紡と略称)貝塚工場 で働いた女性たちが綴った『糸ぐるまの回想』(升井, 1989)から考察してみよう。

日紡貝塚工場は当時、従業員3000数百名、設備と労務管理が行き届いていることで「東洋一のモデル工場」と言われ、全織傘下にクローズド・ショップ制の労組が組織され、「総同盟の牙城」として知られていた。その工場へ八村澄江が就職したのは1946年12月のことであった。天津で敗戦を迎え長崎県へと引き揚げてきた八村は、島原の職業安定所から紹介されて日紡貝塚工場へ就職することになり、同じ引き揚げ者の近所の娘や長崎・島原地方出身の他の娘たち7～8人とともに貝塚へたどりついた。寄宿舎では10人もが同室で畳一畳分しか一人の居場所がなかった。当初の勤務は二交替で、早出は午前5時から午後2時まで、遅出は午後2時から10時まで。綿埃の中で立ちっぱなしの仕事に耐えかね、交替制のないローラー場に配置転換を願い出た。仲間の中には給料が少ないのと仕事がきついで、アルサロカ喫茶店のような水商売へ転職していった人もいた。八村は戦時中から左翼活動に関与していた共産党員・前川美子と親しくなり、また大阪労演など地域の文化運動につながりをもつ演劇サ

一クルを通して共産党に接近、1947年の6月か7月の初め頃に他の四人と入党し、先輩の前川と5人で日紡貝塚工場細胞を結成した。

貝塚工場の労組には現場の女性労働者の声は反映されにくかった。労組執行委員・常任執行委員の構成をみれば、常任執行委員の厚生部長は元陸軍航空少佐、執行委員は元憲兵伍長、組合長は元陸軍中尉、副組合長は元大尉、他にも常任委員に元中尉がいるなど、元軍人が配置されていた。また委員のほとんどが社員・準社員であり、女性労働者から選出される委員の割合は1%ほどであった。このような労組は会社の利益のために組織されていた。例えば1946年1月貝塚工場にパラチフスが発生し、保菌者数百人、発症百数十名、死者十数人を出した事件では、会社側はパラチフスの発生を厳秘にし、倒れた女性労働者たちを病院に搬送しようとし、事態が表面化すると総同盟・全織の労組幹部が起訴猶予の署名運動をし、会社を助けた。パラチフスは5月頃ようやく終息したが、その間3ヶ月余り女性労働者たちは外出禁止となった。耐えかねて逃げ出す者も出たという。

会社と組合幹部が結託した事件はこれだけではなかった。電報握りつぶし事件や生理休暇を申請する労働者へのいやがらせとして作られた「生理部屋」問題、給食のカロリー不足など、職場には問題が山積みしていた。5人の黨員たちは働きやすい職場にするために労働者の要求をとりあげるよう労組に働きかけたが、労組側はとりあおうとしなかった。5人は細胞機関紙「糸ぐるま」を発行し、職場の様々な問題を独自にとりあげてゆく。

1947年9月16日、日紡労組常任執行委員会は内匠進、近藤隆一、前川美子、美里泰長、八村澄江の5人について「組合の自主性を傷け、統制を乱し、健全なる組合民主化発展を阻んだことは除名に値する」とし、組合除名を決定した。組合の自主性や名誉を傷つけ、寮内自治を破壊し、組合の分裂・破壊を企画したと組合が5人を非難する内容には、組合で決定した生産割当完遂期間中に八村が「その様に仕事をして資本家の腹が膨れるばかりだから適当でよい」と言ったことや、「糸ぐるま」紙上に会社・組合幹部批判が掲載されたこと、また部屋の押入れや戸棚などに共産党の宣伝ビラを貼ったこと、さらに「寮内の放歌雑談、煮たき」までが並んでいた。同日、日紡はクローズド・ショップ制の労働協約が結ばれていることを盾に即日誡首を申し渡し、5日以内に寄宿舎から立ち退くことを要求した。組合員のみを雇用することを定めるクローズド・ショップ制は一般に資本に対する労組の交渉力を高めて労働者の権利を守るために採られるが、資本と労組が一体となった会社ではこの制度が逆にとられ労働者解雇に利用されたのである。5名の解雇を前提に工場長と組合長が除名二日前に5名の賃金計算を行っていたことにも会社と労組が結託していたことが露呈していた。

5人は直ちにこの不当処分を大阪地方労働委員会に提訴した。除名処分は組合員に政治活動の自由を保障する労働協約に背反し、被除名者の欠席のまま常任執行委員会で労組からの除名が行われ、会社が御用組合を利用して解雇を通告してきたことは憲法・労働基準法・労組法にことごとく違反する不当な処分であると訴え、解雇による立退き要求に対しては提訴中であることを理由に拒絶した。関西の産別会議傘下の多くの労組がこの事件に注目し、日紡・日紡労組・地労委に対して抗議と要請行動を開始した。

地労委が10月2日「クローズド・ショップ制を採用している関係上除名が直ちに失業を伴い、被除名者の生活を脅す結果となるので大会に於て更に討議されんことを要望する」という幹旋試案を出すと、組合側は10月3日に大会を開催し、審議の結果2200対406で除名を決定

してしまった。5人は直ちに地労委に第二回提訴を行い、再び寮の立退きを拒否した。5人の行動は産別会議と地域の諸団体から支持され、工場の外にマイクをそなえて応援演説を行う支援者も現れたが、日紡労組幹部と総同盟大阪府連から派遣された3名のオルグは5人を寄宿舎から追放するために暴力を行使し、10月17日には暴行を受けた美里が全治一週間の負傷、前川は乾性肋膜炎を発症する事態となった。10月20日地労委がこの問題を取上げる必要なしの裁定を11対2で決定し、暴行傷害による労組法違反の追訴も11月13日却下したため、問題は中労委にもちこまれた。

会社を立ち退かざるをえなくなった後、前川は国立療養所「貝塚・千石荘」に入院し、八村・近藤・内匠・美里は党事務所や同志の家へ身を寄せ、連日のように会議を開いた。言論思想・政党加入・政治活動の自由という理念において所定就業時間外に従業員に対し政党機関紙を配布する行動は正当な権利の行使であり、日紡労組貝塚支部の執行部の構成と運営はきわめて非民主的で、御用組合的であり、労働者の自主的に組織する組合を労組と定義する労働組合法に反している。このように処分の不当性を訴え、八村らは中労委に出席したり、支援要請に労組をまわったり、東京へ出かけてGHQ経済科学局労働課員スタンダーや労働省婦人労働課長の谷野せつに面会を求めて工場生活・寄宿舎生活のことを話し、生理休暇のことや募集人制度の問題を訴えた。やがて5人の闘いは当該の5人たち自身も驚くほど全国的に支持者を広げ、注目を集めるものとなっていった。

産別会議阪南地区会議は日紡対策の専門委員会を設置し、単産ごとに日紡資本と日紡労組への抗議、勧告、被除名者への激励、基金カンパ活動に精力的に取り組み、支援体制を固めた。全漕岸和田支部初代婦人部長で阪南地協婦人部長であった浜とみ子も当時支援行動に加わった一人である。総同盟や中立系の労組の一部、医療民主化同盟の医師・看護婦、日本主婦の会、新日本婦人協会などの女性団体も抗議・要請活動に加わっている。このような諸団体の協力で日紡貝塚事件に関する合同調査団が結成され、調査結果は産別機関紙『労働戦線』、『情報』、総同盟機関紙『労働』などに相次いで発表されていった。

表1 日本紡績貝塚工場労働組合の構成 (1947年11月)

日本紡績貝塚工場労働組合の構成 (1947年11月)						
男女別・組合幹部構成			職階別組合幹部構成			
工場従業員	幹部	幹部比	職 種	組合員数	幹部数	幹部比
総数3,010	幹部数61	49:1	社 員	70	14名	5:1
男子330	男子執行委員33	10:1	準社員	81	9名	9:1
女子2680	女子執行委員28	96:1	工場補手	180		
			普通工具	2679 (2859)	38名	75:1
工場長、署長、事務長、労務長、工務長の五名を除き全員組合員 執行委員 (幹部) のうち労務関係者 8名 旧職業軍人2名						

(『糸ぐるまの回想』より作成)

合同調査の中で日紡の労働条件の劣悪さや日紡労組執行部が労働者の利益を代表していない実態が改めて浮き彫りとなっている。例えば日紡労組は執行委員の構成について「60

名中、社員14名、準社員9名、工員38名、男子33名、女子28名であつて不均衡のものではない」と反駁したが、表①に見るとおり社員・準社員の数と工員の数とは桁違いなのである。即ち社員は5名で一人、準社員は9名で一人の執行委員を出すのに工員は75名に一人の執行委員にすぎなかった。また執行委員の性比も従業員には男子330名・女子は2680名であり、男子が10名に一人の執行委員を出すのに対して女子は96名に一人にすぎない。合同調査団は以上のような事実を具体的に検証し、「組合執行部の大半を社員（労務・人事など）が占めて一般工員の発言を封じている」ことを確認した（大原社会問題研究所, 1949）。

また合同調査団は、従業員一人当たりの適正カロリーに関する労働協約があるにもかかわらず労組は「組合員に動揺を与える」と称して組合員にカロリー表の発表を拒んだこと、そして労働協約に規定されたカロリー量は全く実施されておらず、女性労働者たちは一日平均300カロリーを小遣銭で補っており、「大根メシにパン二つ」という自嘲的な歌を歌い、「会社の食事では辛抱出来ないの町で菜っ葉を買ってきて食べている」のが実状であることを明らかにした。この他生理部屋の問題、募集人の問題など、合同調査団は「女工哀史」さながらの実態を報告したが、会社側は何れも事実と異なることを主張した。

提訴を受けた中労委は、労組法の適用は地労委の専権事項なので中労委には再審の権限がないとしつつ、この事件に関しては各方面からの申入れもあったため受理した。だが結局「本件に対する具体的判断を与えることは却つて無用の紛糾を惹起するおそれがある」として判断を回避した。組合員除名の正否判断における具体的調査の必要性や、法的救済を与えるのは民事裁判所のみであること、クローズド・ショップの規約があつても「使用者と組合幹部とが通牒し若くは使用者が組合幹部に不当の圧力を加えて組合が解雇処分に応じた協力をするとも考え得る」から使用者も責任は免れないことなど、労使問題で考慮されるべき一般論だけを述べて、調査の打切りを宣した。

5人は処分で職と住居を失い、しかも会社、組合幹部、総同盟幹部らによって暴行傷害を受けるなど多くの困難に見舞われながら、幅広い支援を受けて、6ヶ月にわたって抗議活動を続けた。地労委の再審却下・中労委の調査打ち切り宣言を経て、5人は1948年3月には闘争を一応終結せざるをえなかった。日紡労組側の云い分がとおった形で終結となったが、広く共感を集めた闘いであった。

日紡貝塚事件は、1947年の2・1ゼネスト禁止命令を経てGHQがしだいに労働運動に対して圧力を加えるようになった時期に発生した。八村たちが陳情に訪れたGHQのスタンダーが、産別会議で活発であった労組婦人部について批判し、「婦人部の機能は婦人労働者に対する特殊サービスである。婦人部が自主性をもたないよう婦人部の組織と機能を再検討しなければならぬ」と廃止を求める趣旨の声明を発表したのは48年1月15日、折しも八村たちが陳情に上京した前後のことである。この後GHQと労働省は二重投票権をもつ青年部・婦人部を設けないよう労働組合を指導し、多くの婦人部は活動を停止したり、懇談会形式の婦人対策部に変質した。GHQが労組結成や労働運動を奨励した時期は過去のものになりつつあった<sup>5</sup>。

<sup>5</sup> ならの女性生活史編さん委員会, 1995:330。なお日紡高田では以降も会社による労組活動家の排除が続き、労働者の自主的な組織である自治会に対する分裂工作も行われ、日紡の上部団体・全織は1953年11月に総評を脱会する。繊維業界の衰退とあいまって、戦後の一時期しばしば新聞をにぎわせた「闘う女工さん」の姿はこのころから影が薄くなっていった。



### 3 朝鮮戦争時代の繊維産業と女性労働者

#### (1) 朝鮮戦争とレッドパーズ

1949年頃から51年にかけて繊維産業界は「ガチャマン景気」と呼ばれる好景気にわきたった。敗戦直後の数年間には繊維製品は輸出が指向され、インフレの抑制や最低限の衣料品を国民に行き渡らせる目的とあいまって生産・配給・価格の統制が行われていたため、内需向け繊維製品は常に供給不足の状態にあった。だが1948年頃からGHQの占領政策の転換が進み、民主化よりも資本主義経済再建へと政策の重点がシフトする中で、日本の経済界がかねてから希望していた民間自由貿易への移行が本格的になり、各種の生産統制が段階的に緩和されていった。統制が緩和されると、繊維製品を作ればどんどん売れて「ガチャンと織れば1万円儲かる」という「ガチャマン景気」が到来したのである。十大紡はもとより中小の紡績企業、さらに戦時期に休止状態になっていた地方の零細な織物業も目覚ましく復興し、繊維業界は好景気にわいた。

1949年、ドッジプランによるデフレ政策が実施されると大量の首切り、企業倒産、農産物価格の暴落により、膨大な労働者が失業し、農家の生活は疲弊して国内の有効需要が減退した。50年3月には綿糸相場は暴落、ガチャマン景気にも終止符が打たれたかにみえた。ところが朝鮮戦争が勃発するや景気はたちまち回復し、朝鮮戦争の特需ブームによってガチャマン景気はピークを迎えたのであった。GHQは朝鮮戦争勃発直後の6月27日、綿紡設備制限(400万錠)を撤廃し、さらに7月に羊毛工業・スフ紡、10月に化学繊維の設備制限を撤廃し、米国の戦略物資の買い付けと世界的軍拡ムードの中で50年下期には前期に比べて繊維製品輸出が数量で二倍、金額で三倍近くになり、日本の綿布輸出は世界第一位となった。当時日本の繊維製品に対する注文が世界各国から殺到し、綿糸の輸出価格は国内公定価格の三倍強にもなり、国内の自由相場も暴騰した。このようにしてガチャマン景気は再来した。このブームが沈静化し好況から一転して不況へと落ち込んだのは、米国の戦略物資の買い付けを停止した51年3月からであった(東洋紡績株式会社社史編纂室編, 上, 1986:434~435, 611)。

東洋紡の経営に当たった谷口豊三郎は、この当手を回想して次のように述べている。

「そういつては悪いが日本経済の復興にとって朝鮮動乱は神風みたいなもので、あれで復興のハズミがつかしました。その時一番早く恩恵を受けたのが綿紡績等繊維産業でした。その頃は繊維産業と言えば、直ちに紡績業のことと考えられていました。その頃東洋紡で御、例えば昭和26年には半期約60億円、年間120億円近い利益が出ました。当時の半期60億円の利益を今日に概算すれば大変な金額になります。その当時のブームが今日の紡績業の基礎を築いたといえます」(東洋紡績株式会社社史編纂室編, 上, 1986:435)

谷口は朝鮮戦争が日本経済・紡績産業が復興する景気を与え大企業が巨富を築くことになったことを述懐しているが、ここには生産を担った労働者の経験は無視されている。

労働史の視点から見れば、朝鮮戦争時代は全国労働組合連絡協議会(以下、全労連と略称)が解散を命じられ、職場で労働強化とレッドパーズが強行され、労働運動が反共主義へと再編されていった時代に他ならない。

全労連は敗戦直後の労働運動の高揚の中で1947年3月に誕生した。産別会議も総同盟も共に加盟し、当時の組織労働者の84%にあたる約420万人を擁し、49年1月には世界労連に加入した。だがGHQは冷戦の激化・国際自由労連の創立を背景に「自由にして民主的な労働組合

運動」「共産党の組合支配の排除」などのスローガンを掲げて産別会議と全労連を攻撃し、反共労働運動を奨励した。1948年6月に総同盟が全労連から脱退し、炭労、私鉄総連、全鉱、全日通、国労、日教組などの脱退が続き、朝鮮戦争が勃発するまでに全労連の組織勢力は結成時の5分の2以下に減少した(大原社会問題研究所, 1949)。

朝鮮戦争勃発直前、GHQは日本政府に6月6日付けで日本共産党員24人の公職追放を、7日付けで同党機関紙「アカハタ」幹部17人の追放を指示した。6月25日に朝鮮戦争が勃発すると、翌26日に『アカハタ』発行の30日間停止を、7月18日に『アカハタ』とその後継紙ならびに同類紙の無期限発行停止を指示した。その間の7月11日、総同盟が中心勢力となって組合員約320万人を擁して日本労働組合総評議会(以下、総評と略称)を結成した。その結成大会の宣言は、「日本共産党の組合支配と暴力革命的な方針を排除し、自由にして民主的なる労働組合によって労働戦線統一の巨大なる礎をすえた」とし、「国際自由労連に連なる全世界の労働者と提携」して進むことを宣言した。翌8月30日GHQは全労連に団体等規正令によって解散を命じ、幹部12人を公職追放処分にした。

7月24日、GHQのネピア公職審査課長は新聞・放送など報道の経営者にレッドパージを示唆した。その後数ヶ月にわたってGHQの意向の下に全国で数多くの共産党員やその同調者とみなされた人々が職場から強権的に排除されていった。パージはほぼすべての民間の産業と公務員の分野で実施された。三宅明正によれば、控えめな見積もりでも1950年のレッドパージで職場を追われた者は、民間企業1万1893人、政府機関関係1177人、合計1万3070人にのぼる。パージが実施された際、これに抵抗する労働組合や該当者個人の多くが労働委員会に救済を申し立てた。だが労働委員会は共産党員またはその同調者とみなされた者は救済対象とせず申し立てを棄却・却下したため、実際に救済が認められた件数はごくわずかだった。レッドパージによる解雇事件の審査はGHQの要求に従って中央労働委員会会長の責任の下で処理することに決められており、中央労働委員会は事件処理の状況をGHQに報告していた。また経営者はパージがGHQの強力な示唆に基づくもので不可避であるということを労働者側に印象づけようとしたが、経営者側から積極的にパージを願い、その実現のためにGHQに援助を求める場合も少なくなかった。

繊維産業でも、10月にGHQエミナーズ課長が紡績経営者を呼びつけてレッドパージを指示した。労組の反共右派幹部は会社側が提出したパージリストをそのまま受け入れた。10月中旬より11月中旬にかけて、労働省『資料労働運動史』によれば繊維20社・従業員数11万7961人中、事前退職者をふくめて144人の整理が行われている。レッドパージで解雇された労働者の数はGHQの51年2月2日付けの被解雇者の動向に関する資料では164人にのぼる(三宅, 1994)。この資料によれば、51年2月になっても被解雇者のうち何らかの形で就業しえたのは3割台であり、従来よりも悪い労働条件の下で働いており、また7割ほどは求職中であった。他の産業と比して繊維産業では無職者と帰農者が多いことが目立つ。一般に繊維女性労働者はわずかな勤続年数で工場を退職して帰郷し、結婚してゆく者が多数を占めたが、レッドパージで解雇された女性労働者の約4人に1人が結婚退職者と同様農村にある故郷に帰っていったと考えられる。

表2 レッドパージで解雇された者の動向(1952年2月2日 GHQ労働課)

産業		全産業合計(%)	繊維(%)
解雇者総数		11,426(100)	164(100)
就業者	前共産主義者	547(4.8)	7(4.3)
	: 共産主義者	504(4.4)	9(5.5)
帰農した者		751(6.6)	23(14)
労働組合書記	前共産主義者	79(0.7)	
	共産主義者	46(0.4)	
自営		1,326(11.6)	8(4.9)
日雇い		179(1.6)	2(1.2)
党活動専念者		1,030(9.0)	20(12.2)
無職		4,226(37.0)	72(43.9)
不詳その他		2,738(24.0)	23(14)
解雇後離党した者		365	6
前党员で解雇後入党した者		64	3

総評はレッドパージに対して「単に党员たる理由をもって誡首することは不当」とし、超法規的処分や組合活動家排除のための「便乗的不当行為」に警戒を示したが、実際にはレッドパージに必ずしも反対しなかった。また総評傘下労組の内部にレッドパージに積極的に手を貸す者もあった。結果的に総評は、「レッドパージに支えられて労働組合の主導権を固めて」いったのである(総評四十年史編纂委員会編, 1993)。

この時期に、総評結成の主力となった総同盟の内部にも分岐が生じていった。総同盟は46年の結成当時は全織会長松岡駒吉・同副会長金正米吉ら右派が執行部を構成していたが、その後内部の左右対立が表面化し、48年の総同盟第3回大会では旧執行部が厳しく批判され、高野実が総主事に選出され左派が総同盟内に主導権を確立した。翌49年には反共を旗印に全織の宇佐美忠信ら右派が結成した独立青年同盟をめぐって対立は深まった。50年11月の総同盟第5回大会で「ブラッティ書簡」問題を契機に対立は頂点に達し、全織をはじめとする右派代議員が退場、左派代議員は総同盟の解体方針を決めた。このようにして総同盟は分裂したのである(金田; 2002)。全織はその時点では総評に留まっていたが、51年3月の総評第二回大会で左派勢力が多数を占めて事務局長に高野実が就任、平和四原則を決定し、当時のマスコミに“ニワトリからアヒルへ”と呼ばれたように左傾化してゆくと、53年に総評を脱退して総評の左傾化に反対して脱退した他の組合とともに54年4月全日本労働組合会議(全労、加盟人員は84万人)を結成し、左傾化した総評に対抗する右派労働運動のナショナルセンターを形成した。繊維業界の組織労働者は、そのほとんどが日本労働運動の右派を終始一貫して代表してきた全織の傘下で活動せねばならなかったのである。

## (2) 朝鮮戦争時代の繊維産業労働者

レッドパージが強行されていった時期、繊維産業で働く女性労働者はどのような経験をしていただろうか。ここで再び『米ぐるまの回想』によって日紡貝塚工場に注目してみよう(升

井;1989)。

日紡貝塚工場では1947年の解雇事件の後、この闘いの火を受け継ぐ決意で木津一美が就職し、事件当時から蔭で頑張っていた栄養士の石井アサと二人で活動を始めた。二人は1949年度の役員選挙で400票余りの支持を得て当選し、これを基礎に49年12月に「糸ぐるま」再刊に踏み切った。「生理部屋」はすでになくなり、募集人は「連絡員」と改名され、巷には「ガチャマン景気」が喧伝されていたが、労働条件は依然として劣悪だった。木津が配属された粗紡職場は、勤務は二交代で先番は午前5時から午後1時45分、後番は午後1時45分から午後10時30分。機械の騒音、30度を超える高温で多湿。綿埃がたちこめ息苦しい苛酷な環境と作業量にもかかわらず、給料は平均で女子4000円、男子5300円、そこからさらに食費1290円がひかれた。半数以上が1000円以上を郷里に送金していたので、身の回り用品で財布が空になった。また業界に「経営合理化促進委員会」がつくられ、合理化・労働強化が激しくなり、スピンドルの回転数が引きあげられた。

玉木光子は1949年就職当時17歳。生活物資の窮乏時代だが紡績で働けば綿白布の配給や住居が保証されると聞いて、募集人から1500円を受け取り14、15人の人と集団で日紡貝塚に就職した。ところが食事はひどく、布の配給もなく、募集人の話は嘘だったと知る。文学少女であった光子は組合の短歌同好誌『珊瑚礁』を通して共産黨員たちと親しくなり、組合活動をするようになった。六歳くらい年上のある同僚「ハナちゃん」への思いを書いた短編小説「充たされないもの」は、「アカハタ」(50年1月16日号)に発表されている。

小説は、スピンドルの回転数が早くなったため昼食もゆっくり取れなくなった女性労働者たちの、短い昼休みのおしゃべりから始まる。欠勤した花江が「パンパン」をしているらしいという噂話が話題だった。日紡貝塚3000人の女子従業員の中に「夜の女」が百数十人もいると会社側から言われ、寮自治会はさっそく各寮長が毎晩のように懐中電灯をもって「パンパン狩り」にでかけていた。その本場月光ホテルに通う者の中に花江がいて、昨夜、ホテルに入っていくのを寮長に見つかり、今朝出勤停止処分を受けたという。噂話に興じる仲間には反発し、主人公のちえが訴える。「給料が安く金がほしいからなんや。恥ずかしいこと知っちゃいながい、つつい出ていくことになるのや。うちのふところを見や。2000円そこそこもろて、借金返し、日用品買ったら一〇日せんうちに一〇円もない始末やの。着物一枚買うにも借金せんと手にはいらへんやろ。うちの給料がせめて一月に着もん買えてさ。日用品も不自由せんと、小遣銭も余るごつあればパンパンなんかいなくなるよ。あんなパンパン狩りで夜の寒い町に立って危ない目にあわんでも」。

光子は「花江」の姿が当時の流行歌「こんな女に誰がした」そのままのように思え、同僚が男に騙されて「性とパン」「青春と金」を交換しているのに寂寥と同情を感じていた。ちえの言葉を通して、繊維産業に働く女性の生活は低賃金と生活苦に落とし込まれていることを光子は訴えようとしたのであろう。

朝鮮戦争が始まると、紡績資本は特需による月産12万5000梱の至上命令を受けて、休日なしの輪番制を採用した。日紡貝塚工場では7月に「増産月間」をもうけ、生産目標が達成されるとタオル一本を褒賞として支給することにして生産をあおり、それが終わると9月までを「夏期出勤奨励生産増強褒賞月間」に設定し、今度は200~300円という奨励金でつって、お盆も休ませず、職場ごとに競争させ、互いに休みも取れないようにして働かせるやり方をとった。この結果資本は巨利をあげたが、労働者には激しい労働強化がふりかかった。休憩

時間にも機械を回すのでこれまで以上に生理休暇が与えられず、長時間残業が求められ、午前4時から午後6時まで残業する人もいた。女子労働者は機械を離れて便所へ行くことも、水を飲みに行くことも自由にできなくなり、苛酷な労働の結果健康を損ね、肋膜炎を患う労働者が相次いだ。紡績資本には「神風」として歓迎された朝鮮戦争特需は合理化・労働強化に拍車をかけ、職場には労働者の不満と要求が鬱積していた。

だが労組は要求をとりあげず、生理休暇を25%へらす協定に賛成したり、休暇や残業に関する労働基準法違反をもみてみぬふりし、ひたすら会社に協力し増産体制をおしすすめた。労働力急増に伴う寄宿舎確保のため一部屋（15畳）定員10人をさらに11人に増やすという会社案の提案にほとんどの組合員が反対したが、執行部は「特需のためにはやむをえない」と合意を与えてしまった。

木津一美や石井アサらはこうした労働強化に反対し、粘り強く労組の中に労働者の要求をくみあげようとし、特需が強行されるなかで「糸ぐるま」を週間に増やして発行していた。GHQによる『アカハタ』やその類似紙の発行禁止命令が出ると、労組執行部は50年7月30日臨時大会で「糸ぐるま」の発行を組合統制違反とし、木津と石井の両名の権利停止4ヶ月の処分とする決定を押し切った。が、労働者たちの信望が厚く組合役員に選出されている二人を47年事件の際のように除名・解雇まで行うことはできなかった。「糸ぐるま」は「糸つなぎ」「綿の花」「スピンドル」と次々名前をかえて発行され続けた。木津らはストックホルムアピールの署名活動にもとりくみ、工場内外で集めた署名は10月15日には818筆に達したという。

レッドページは大阪府下でも新聞放送業界の85名を皮切りに実施され、10月末までに伝記・交通運輸・金属・化学の各産業に波及、11月には繊維産業や公務・衣料・その他の産業にも及び、11月末までに1011名が解雇されるにいたった（大阪社会運動協会、1987、855～860）。日紡貝塚でも木津たち党員と活動家が対象に挙げられた。会社は公然党員に対しては11月中に解雇通告を行い、非公然党員は一人一人呼び出して退社を迫り、募集人を使って退社に追い込む方法もとった。会社はこれを拒否する木津たちを暴力的に排除し、木津たちが職場に入ってピラをまくと建造物侵入・暴力行為として告訴に及んだ。

当時、大阪府下の繊維産業では日紡貝塚工場の4名のほかに日紡の山崎工場で4名、鐘紡で6名、呉羽紡で4名、近江絹糸岸和田で2名と、合計5工場20人以上に達している。レッドページされた人々の中には抗議自殺をした人もおり、また抵抗して地労委や裁判所に提訴したり、退職を拒否して実力で会社の事務所や工場に入ろうとする人々もいた。こうした府下のレッドページ反対闘争で9月に9件118名、10月に17件98名が検挙された。大阪地裁に対して労働者側からは地位保全仮処分申請が7件220名、会社側からは工場立入禁止申請が3件35名提出されたが、後者の申請はすぐに受理され仮処分命令が出た。また仮処分命令がなくても会社が立ち入り禁止通告を受け入れなければ官憲が介入し、応援者も含めて検挙したため、不法侵入・暴行などの容疑で労働者が逮捕される事件が相次いだ。11月10日日紡山崎工場では8日に解雇された3人の女子工員が工場内へ入ったのを不法侵入とされて逮捕、14日には労働者6人を解雇した鐘紡淀川工場では塀を乗り越えてレッドページ反対のピラを配布しようとした2人が逮捕された。22日には呉羽紡績大阪本社で被解雇者と警官隊が衝突し、解雇者2人を含む12人が検束された。そして日紡貝塚では23日午後、木津ら約30人が工場裏口から本館内の労務事務所や電話室・女子寄宿舎内に入ると、工場側は非常サイレンを吹鳴して男子

工員を召集して排除しようとして乱闘騒動となった。ここで12人が逮捕されている。大阪地裁は、GHQが設定する法規範は日本の種々の法律や協約を凌駕するという判断から12月下旬に労働者側の地位保全仮処分申請を却下した(大阪社会労働運動史編集委員会, 1987; 855~860頁)。

GHQの指令が思想信条の自由や人権・労働権を規定する憲法や労働法、労使間に結ばれる労働協約などの一切に優先させられたのが占領期であり、理不尽に職場を奪われて抵抗する労働者たちに暴徒の汚名がきせられたのである。日紡貝塚の女性労働者たちの裁判で大阪地裁が「レッドパージは違憲」の判決を下したのは講和条約が発効し占領が解除された後の1952年7月17日であった(丸岡・山口; 263)。

本節の終わりに奈良県にある日紡高田工場のレッドパージにも言及しておこう。同県では前年49年のメーデーに約五千名が参加したが、大会の副議長には日紡高田労組の副執行委員長白木まきえが選ばれ、デモ行進では「実質的婦人解放」のプラカードを宛てた日紡女性労働者二千名の姿が注目を集めた。高田工場労組では左派が強く、「わが青春に悔いなし」といった映画の鑑賞やハイキングのような文化活動を通じて労働者の仲間意識と団結を強めていた。その高田工場では労組の副執行委員長尾上文男、速水善三郎、執行委員で会計の柴田祝子ら労組活動家5人がレッドパージを受けた。速水は彼自身を含め、パージされた活動家のなかには共産党員でない者も含まれていたことを筆者に語っている。速水は共産主義者ではなく、年若い女性工員たちが苛酷な労働に耐え乏しい給与のなかから故郷に送金している姿を見て組合運動に加わった人道主義者であった。だが、全国各地のレッドパージでしばしば見られたように「同調者」とのレッテルを一方向的に貼り付けられ解雇されたのである。柴田ら三名は12月地労委に不当労働行為救済を申し立てた。レッドパージをめぐる奈良県発の提訴として注目されたが、却下されている。1951年7月31日の時点でレッドパージの被解雇者が労働委員会に救済を申し立てたのは国で合計145件・1096人で、そのうち繊維産業では6件・8名の申し立てがあったが、審査中の1件3名以外は全て棄却・却下・取り下げによって終結しており、救済が実現した事例は皆無であった(三宅, 1994; 186~188)。レッドパージが実施されたとき、高田工場寄宿寮の労働者約300人が女ばかりのデモを行っている。スクラムを組み労働歌を歌い、労務課の建物付近でレッドパージに抗議したのである。労組が計画した取り組みではなく、仲間に対する理不尽なパージに思いあまった女工たちが自然にとった行動であった(ならの女性生活史編さん委員会, 1995; 326~329)。

(終わりに)

近代日本の資本主義は、寄生地主制度下の農村と植民地出身の紡績女工たちからの搾取によって発展した。日中戦争とアジア太平洋戦争の過程で繊維産業は軍需産業にとってかわられたが、日本敗戦後は外貨獲得が可能な平和産業として再び脚光を浴びた。GHQと日本政府の積極的な振興策によって繊維産業は急速な復興を遂げ、「ガチャマン景気」とよばれる好景気に業界はわいた。さらに朝鮮戦争の勃発と共に繊維産業は緊急増産の要請を受けて紡績会社は1週7日操業・休憩時間操業によって労働時間の延長を行い増産に向かった。繊維業界は戦後未曾有の活況を迎え、紡績資本は巨富を築いた。このような繊維産業における戦後復興と朝鮮戦争特需の時代は、紡績資本にとって輝かしい光あふれる再建と発展の時代であっ

た。だがその一方、時代を工場で働く労働者の視点からみれば、「女工哀史」と表象される苛酷な労働条件が戦後に引き継がれ、しかも激的な労働強化によって生産増強に駆り立てられる時代であったことは否めない事実である。

繊維業界に組織された全織は戦前以来反共主義と労資協調主義を基調に戦時下には戦争協力に邁進した労働運動右派潮流に由来し、占領下にGHQが奨励した反共労働運動において常に主力を担った。紡績資本と全織の協力によって急激な生産拡大・増産体制が実現したのである。労働組合は労働者自身が自主的に組織するからこそ労働者の利益を代表するものとなりうる。が、全織は戦前来の職業的な右派労組運動家と会社によって組織されており、組合役員に就任するのは社員がほとんどであり、女性が役員になることは珍しかった。実質的な機能は労務管理であったとって過言ではない。1947年の日紡貝塚解雇事件にみるとおり、本来は労組の資本に対する交渉力を高め労働者が互いを守り合うために労組側が締結を求めるクローズド・ショップ制さえ、労組と会社が一体化している中では、会社が解雇したい労働者を恣意的に解雇するための装置として利用されたのである。

連合国による日本占領が経済の民主化をはかり独占資本を排除し労働組合を奨励した時期は短かった。1947年のゼネスト中止命令以後、GHQによる労働運動への抑圧的介入・反共労働運動への奨励は強まっていった。朝鮮戦争勃発とともにGHQが下した全労連解散、レッドパージの指示はその集約的な表現であった。占領軍の絶大な権力の前に思想信条の自由や人権・労働権を規定する憲法や労働法、労使間に結ばれる労働協約などの一切は無に帰せられ、理不尽に職場を奪われて抵抗する労働者たちに暴徒の汚名がきせられた。朝鮮戦争特需から利益を得たのは日本独占資本と反共主義に立脚する労組であり、これに抵抗する労働組織は解体され、労働者は職場を追われたのである。

朝鮮戦争特需は労働者にとって労働強化をもたらしただけで、朝鮮戦争勃発から一年ほどで特需ブームは去っていった。停戦交渉が始まる52年春頃には生産過剰と輸出不振で綿糸は暴落、繊維業界は不況となり、女子工員の大量解雇が始まった。業界は4割操業短縮を決め、臨時帰休という名目の解雇と希望退職の募集によって、操業短縮の始まった52年3月から6月までに36,000名の女子工員が離職したのである。十大紡の操業短縮の被害は下請けの織布業者にも転化され、注文生産への切りかえ、加工賃の切り下げとなり、全国各地の機業地にも労働者の解雇、労働強化、工場閉鎖となって波及した。退職金が上乘せされると聞いて「希望退職」募集に応じた者も少なくなかったが、次の職を求めようにも繊維業界は全部不景気で求人がなく、再就職は困難で「お先真つ暗」と言われた。農村の女性にとって主な働き口であった繊維業界の不景気は、この時代の人身売買の一因ともなったのであった。

本稿の冒頭に指摘したように、連合国の対日占領による「日本の民主化・女性の解放」や朝鮮戦争特需による「戦後復興・女性の職業進出」という光あふれる時代としての戦後史像はすこぶる一般的に定着してきた。本稿にとりあげたアジア太平洋戦争前後・朝鮮戦争前後の繊維労働者の経験は、そのような光の影に隠され忘れられてきたのである。

## 参考文献

## (ハングル文献)

藤目ゆき, 2001a, 「코리아国際戦犯法廷レポート 朝鮮戦争と日本」(코리아국제전범법정 레포트 ‘한국전쟁과일본’) 米軍虐殺蛮行真相糾明全民族特別調査委員会(미군학살만행진상규명전민족특별조사위원회) 編集発行『米軍による虐殺蛮行南北海外共同白書 歴史の真実』(미군에 의한 학살만행 남북해외 공동백서 ‘역사의 진실’)

藤目ゆき, 2001b, 「日本の731部隊の朝鮮戦争参戦、人民軍捕虜に対する生体実験問題」(일본731부대 한국전쟁 참전, 인민군포로에 대한 생체실험문제) 『民族21』

藤目ゆき, 2001c, 「国際女性調査団が見た朝鮮戦争(국제여성조사단이 목격한 한국전쟁)」『現場から未来へ(현장에서 미래로)』

## (日本語文献)

井上甫・松原昭, 1955, 「繊維産業労働組合の実態——全織同盟の機構を中心として——」『社会政策学会年報』第4集 社会政策学会第十二回大会報告要旨

(<http://wwwsoc.nii.ac.jp/sssp/nenpo04kiji.html>)

宇佐美忠信, 1998, 「民主的労働運動の歴史と教訓」政策研究フォーラム発行『改革者』10月号, <http://www.e-fuji.or.jp/usami/ronbun01.html>

大阪社会労働運動史編集委員会編, 1987, 『大阪社会労働運動史 戦後編第三巻』有斐閣

大原社会問題研究所編, 1949, 『日本労働年鑑 第22集/戦後特集』第一出版

(<http://oohara.mt.tama.hosei.ac.jp/rn/22/rn1949>)

金田直樹, 2002, 「先輩に聞いた全織同盟史-1 総同盟との訣別、左傾化した総評からの脱退」<http://www.uizensen.or.jp/doc/rekishu/5-1.pdf>

金贊汀, 1982, 『朝鮮人女工のうた』岩波新書

黒川俊雄・嶋津千利世・犬丸義一編, 1978, 『講座 現代の婦人労働 4 労働運動と婦人労働者』労働旬報社

加納美紀代「前書き」恵泉女学園大学平和文化研究所編, 2007, 『占領と性』インパクト出版会

鈴木裕子編, 1994, 『日本女性運動資料集成 第6巻 生活・労働Ⅲ』不二出版

鈴木裕子, 1989, 『日本女性労働運動史論 女工と労働争議』れんが書房新社、

総評四十年史編纂委員会編, 1993, 『総評四十年史』第一書林

高村直助, 1988, 「日中戦争と在華紡」『日中戦争と日中関係』原書房

東洋紡績(株)社史編集室, 1986, 『百年史 東洋紡』上・下

ならの女性生活史編さん委員会編, 1995, 『花ひらく—ならの女性生活史』奈良県

藤目ゆき, 2001, 「冷戦体制形成期の女性運動 - 占領下の日本民主婦人協議会と朝鮮戦争 -」

三宅義子編『日本社会とジェンダー』明石書店

升井登女尾編, 1989, 『糸ぐるまの回想』水曜社



丸岡秀子・山口美代子編, 1987, 『日本婦人問題資料集成第十巻』 ドメス出版

三宅明正, 1994, 『レッドページとは何かー日本占領の影』 大月書店

横山篤夫, 2001, 『戦時下の社会』 岩田書院

渡辺純子, 2007, 「戦後復興期綿工業における企業間競争と過剰設備」 東京大学COEものづくり経営研究センターMMRC Discussion Paper No.173

執筆者 ………

- |                |                                       |
|----------------|---------------------------------------|
| ジェームズ・フジイ      | カリフォルニア大学アーヴァイン校東アジア言語文学部准教授          |
| フレッド・ノートヘルファー  | カリフォルニア大学ロスアンゼルス校歴史学部名誉教授             |
| 三宅義子           | 山口県立大学国際文化学部教授                        |
| 玉野井麻利子         | カリフォルニア大学ロスアンゼルス校人類学部教授               |
| バーバラ佐藤         | 成蹊大学文学部現代社会学科特任教授                     |
| クリスティン・デネヒー    | カリフォルニア州立大学フラートン校歴史学部准教授              |
| エリサ・フェイソン      | オクラホマ大学歴史学部准教授                        |
| グレゴリー・ヴァンダービルト | カリフォルニア大学ロスアンゼルス校歴史学部講師               |
| たけうちみちこ        | カリフォルニア州立大学ロングビーチ校歴史学部助教授             |
| 安武留美           | 甲南大学文学部英語英米文学科教授                      |
| 水野宏美           | ミネソタ大学歴史学部准教授                         |
| ジンキュン・リー       | カリフォルニア大学サンディエゴ校文学部准教授                |
| チョン・ヘンジャ       | ハミルトン・カレッジ人類学部助教授／東京大学日本学術振興会外国人特別研究員 |
| 中川成美           | 立命館大学文学部教授                            |
| 寺澤由紀           | ホフストラ大学歴史学部准教授                        |
| 大越愛子           | 近畿大学文芸学部文化学科教授                        |
| 北原 恵           | 大阪大学大学院文学研究科准教授                       |
| 宋連玉            | 青山学院大学経営学部教授                          |
| 藤目ゆき           | 大阪大学大学院人間科学研究科准教授                     |

翻訳者 ………

- |      |                          |
|------|--------------------------|
| 近藤康裕 | 一橋大学日本学術振興会特別研究員         |
| 福島佳子 | ハワイ大学ヒロ校准教授              |
| 阿南順子 | ウォリック大学演劇／パフォーマンス学部博士研究員 |
| 池田高巖 | 翻訳業                      |

第五号 ★

2009年12月20日発行

ISSN 1880-1102

編集者—「アジア現代女性史」編集委員会

発行者—アジア現代女性史研究会（代表：藤目ゆき）

〒562-8558 大阪府箕面市粟生間谷東8-1-1

大阪大学箕面キャンパス 藤目研究室気付

072-730-5397(tel/fax) fujime@hus.osaka-u.ac.jp